

の様に多く持つ意味ならば他動だ。「富むも裕に持つ」の意味で他動「乏も乏しく持つ」の意味で他動だ。併し自然的他動であることを忘れてはならない。「聞見」は他動だが矢張自然的他動であつて形式を人が聞き人が見るといふ形式にして表はすのでその目的は聲が聞え色が見えることとをいふに在る。

自動態と他動態 動詞の自動性他動性は本性の區別である。その運用上から言へば自動性でも之を他動の如く用ゐることが有り、他動性でも之を自動の如く用ゐることが有る。例へば「歌舞」は「人歌人舞」などの様に本來は自動性であるが、其の作用から客體の概念を分化させて「人歌人舞」など云へば他動化される。こゝに「飲」の自動詞の他動態といふ。「飲打」などは「飲酒打犬」などの様に本來他動性であるがその客體の概念が作用の中に埋没すれば「我昨日大飲」「兄打犬而弟則不打」の「飲」「不打」の様に自動化される。之を他動詞の自動態といふ。

依據性動詞と非依據性動詞

依據性動詞は歸著性動詞の一種である。依據性でないものは歸著性であつても

非歸著性であつても皆非依據性動詞である。

依據性動詞は他物に依據して行はれる作用を表はすものである。

- 高閣逼諸天、登臨近日邊。岑參登總持閣
- 遊吳還適越、來往任風波。皇甫冉送韓司直
- 浮雲連海岱、平野入青徐。杜甫登袁州城樓
- 星臨萬戶動、月傍九霄多。同春宿左省
- 雲氣生虛壁、江聲走白沙。同禹廟
- 星隨平野闊、月湧大江流。同旅夜書懷
- 依沙宿舸船、石瀨月娟々。同船下……
- 南山當戶牖、澧水映園林。祖詠蘇氏別業
- 逢君穆陵路、匹馬向桑乾。劉長卿穆陵關北……

右の例の。の動詞は皆依據性動詞である。その意義は皆その下の名詞へ依據してゐる。下の名詞は依據作用の客體を表はすもので之を依據の客語といふ。依據の客語は日本讀では皆「諸天」「日邊」「吳」「越」などの様に「に」を添へて讀む。

其處より出發する意味の動作はその出發性を依據性として取扱ふ。

管仲老不能_レ用事_レ休居於家桓公從而問之曰仲父家居有病即不幸而不起此病

政安遷之_レ 韓非子十過

襄公鄂公毛髮動英姿諷爽來酣戰 唐詩選杜甫青引曹將軍朝

こゝろいふ場合にはその客語を「何々より」と讀む。

依據する意味の無いものは自動性でも他動性でも皆非依據性動詞である。

1 山明殘雪在潮滿夕陽多 皇甫冉送韓司直

夜靜溪聲近庭寒月色深 嚴維詩晉選二上人

憑君莫話封侯事一將功成萬骨枯 曹松已亥歲

洞裏春情華正開看華出洞幾時回 陳羽伏翼西洞送人

半醒半醉遊三日紅白華開烟雨中 杜牧念昔遊

2 掃石焚香禮碧空露華偏濕藥珠宮 或昱寄許鍊師

洛陽城裏見秋風欲作家書意萬重 張籍秋思

關門不鎖寒溪水一夜潺湲送客愁 李涉宿武關

の(1)の。は自動性で非依據性(2)の。は他動性で非依據性である。非依據性の動詞には依據の客語は無し。

依據性動詞の依據性を特に明確にする必要の有る場合には下へ形式動詞の「於_レ于_レ乎_レ」(第_二頁)を附加する。

萬章曰士之不託諸侯何也孟子曰不敢也諸侯失國而後託於諸侯禮也士之託於諸侯非禮也 孟子萬章下

淳然而生至於日之時皆熟矣……何獨至於人而疑之 同告子上

齊王不聽吾諫故退而耕於野 史記田單列傳

冬天王出居于鄭 左傳僖廿四

立乎人之本朝而道不行耻也 孟子萬章下

依據性の有無は動詞の本性である。副性としては依據性動詞を非依據化せしめ非依據性動詞を依據化せしめる場合が澤山ある。(第二章第二節)

依據兼他動 動詞の中には依據性動詞でもあり他動性動詞でもあるものがある。こゝろいふ動詞には依據の客語と他動の客語と客語が二つ要る。

1 君何功於秦。秦封君河南。史記呂不韋列傳

毒敗亡走。追斬之。好時遂滅其宗。同

乃起兵襲秦。大敗秦人李伯之下。同張儀列傳

2 秦王恐其為變。乃賜文信侯書曰。君何功於秦。……同呂不韋列傳

鑿城數十。穴夜縱牛。同田單列傳

議不欲予秦璧。同藺相如列傳

右の例の●の動詞は依據兼他動で客語が○と△と二つある。○は他動の客語で△は依據の客語だ。そうして(1)の●と(2)の●とは性質が違ふ。(1)の方では他動の客語が依據の客語の上に在り(2)の方では依據の客語が他動の客語の上に在る。これは動詞の性質に由ることであつて妄に○と△を入れ換へるといふことは出来ない。

(1)の例は○と△の間へ「於」を入れても善く(2)の例は△と○の間へ「以」を入れても善い。既に「於」や「以」を挿む以上は△と○は入れ換へることが出来る。それらのことは後編(第三編第三章第二節)に詳説する。

生産性動詞と非生産性動詞

凡そ作用はその作用の結果として或る生産物を生産する。例へば

作用	生産物
畫く……………	繪畫
書く……………	文字
言ふ……………	言語
思ふ……………	思念
歌ふ……………	歌
傷ける……………	疵
名づける……………	名

畫けば繪畫が出来、言へば言語が出来ると云ふ様に或る生産物を生産する。

吾々は作用を分解して作用其の物と作用の生産物との二概念とし、動詞をして作用それ自身だけを表はさしめ、生産物の方は客語をして之を表はさしめる場合が

ある。そういふ動詞を生産性の動詞といふ。其餘の動詞は皆非生産動詞である。生産性動詞の主なもの本動詞では「謂云」稱聞等である。

1 宜乎百姓之謂我愛也。孟子梁惠王

蓋有幸而獲選。孰云多而不揚。韓愈進學解

2 形於上者謂之天。形於下者謂之地。命於其兩間者謂之人。韓愈原人

召軍正問曰。軍法。期而後至者云何。對曰。當斬。史記司馬穰苴列傳

不韋及嫪毐貴封號。文信侯。同呂不韋列傳贊

尊呂不韋爲相國號稱仲父。同呂不韋列傳

3 聞古之人有舜者其爲人也仁義之人也。求其所以爲舜者責於己曰。彼人也。予人也。彼能是而我乃不能是。蚤夜以思。去其不如舜者。就其如舜者。韓愈原毀

生産性動詞は自分は生産物を表はさないから客語を以て其の生産物をいふ必要がある。右の例の・は生産性動詞で下の——は皆その生産物を表はす客語である。日本讀では生産物を表はす客語へは、とを添へて讀む。

(1)(2)の「謂云」は言ふといふ動作の中からその生産物の觀念を控除したものである。

その生産物は言語である。右の(1)の「謂云」の下の——は皆その生産物たる言語だ。(2)の「謂稱號」は皆名づけるといふ動作の中からその生産物たる名稱の觀念を控除したものであつて其れらの下の——は皆生産物たる名稱である。3)の「聞」は人の言語を耳に感知する作用の中から、その感知して生ずる生産物即ち他人の言語に對する聽覺の觀念を控除したものである。下の——はその生産物たる聽覺を表はす。

曰爲の二つも生産性動詞であるがこれは形式動詞である。右に挙げた生産性動詞はその生産性を明確にするために、曰を附け加へ、自己は唯作用の實質を表はし曰をして生産性を表はさしめる場合がある。

公子光謂吳王曰。彼伍胥父兄爲戮於楚。而勸王伐楚者。欲以自報其讐耳。伐楚未可破也。史記伍子胥列傳

魏因入上郡少梁。謝秦惠王。惠王乃以張儀爲相。更名少梁曰夏陽。同張儀列傳

衛鞅既破魏還。秦封之於商十五邑。號爲商君。同商君列傳

この場合には生産性は「曰爲」が専有するから上の「謂名號」には生産性がなくなる。

之を生産性動詞の非生産態といふ。

又「問言道説論意」などの様な非生産性動詞も之に「曰爲」の意味を持たせれば生産性を帯びる。例へば

下「馬飲君酒問君何所之君言不得意歸臥南山陲但去莫後問白雲無盡時王維送別」の・の類で「問曰言曰」の意だ。之を生産性動詞の生産態といふ。

生産性動詞の生産性に對する客語は皆その生産物を表はすものである。そういふと名詞の様に聞えるが模型動詞であつて名詞ではない。事物としての生産物を表はすのではなく一種の作用としての生産物を表はすのである。

「謂云言曰等の區別」 「謂言」は本動詞であつて實際の動作を表はす意味があるが、「曰」に至つては單に形式動詞であつて動作としての形式的意義があるだけである。「云」は前に云つた様に兩方ある。(形式動詞のことは第二九頁以下で述べる)

「言」は唯「ものいふ」といふ意味がある。「默不言」などはその例だ。自動で非依據で非生産だから全く客語がない。「謂曰」などは生産性だから唯「彼默不曰」「彼默不謂」などといふことはない。必ず「何々」といはずといふ場合にのみ使ふ。「言」は又他動の

場合がある。それは意見をいふ意味だ。「彼言其不可」の類だ。「謂」は名詞になつて所謂故國者非謂有喬木之謂也。有世臣之謂也。孟子梁惠王下の「謂」の如く用ゐられる場合がある。其の場合には「意味」といふ意味になる。それは

其所以稱曰故國者非謂其謂有喬木曰故國也。謂其有世臣曰故國也。其有喬木非其所以謂故國也。其有世臣乃其所以謂故國也。

と云ふ様な意味からである。だから「謂」は唯言ふのではなく必ず「何々」といふのであつて「何々」といふ意味なしには使はない。又その「何々」といふのは唯「何々」といふのではなく「何々」といふだけの譯があつていふのである。そういふ風に「何々」とに重きを措くから意義を主として言ふ動作を主としない場合もある。その場合には「謂へらく」と讀む。

「謂」は「何々」といふであつて生産性であるが、次の様に色々に使はれる。

1 齊宣王問曰人皆謂我毀明堂。諸已乎。孟子梁惠王下

2 從流下而忘反謂之流。從流上而忘反謂之連。同梁惠王上

3 人皆謂城之不諫蓋有待而然退之不識其意而妄譏。歐陽修上范司諫書

4 季氏旅於泰山子謂冉有曰女弗能救與對曰不能。論語八佾

5 子謂公冶長可妻也雖在縲紲之中非其罪也以其子妻之。同公冶長

(1)の「謂」は依據性兼生産性だ。客語は「に」——とである。(2)の「謂」は他動性兼生産性で「を」——とを客語にする。(3)は生産性だけで他動でもなく依據でもなく。これは「謂」が言ふ動作よりもその言ふ意義に重きを置くからである。こういう場合には「謂」へらくと讀む流義もあるが矢張「謂」へらくて善い。(4)は依據性であつてその生産性は之を下の「曰」に譲つて自己は非生産化してゐる。だから「謂」の意義が「告」の意と通ずる。この場合には「謂」をつけてと讀む人もある。この場合「謂」の代に「言」云を用ゐることは出来ない。「言」や「云」には依據性がない。「語」ならば代入が出来る。(5)は他動性であつて生産性は非生産化してゐる。「謂」の意味が「稱」と通ずる。この場合に「謂」の代に「言」云を用ゐることは出来ない。何となれば「言」云には形式上から云つて他動性がない。實質から言つて稱する意がない。「云」は生産性だけで自動で非依據である。「謂」の右の(3)の用法に似てゐるが「云」は「謂」

の様にその言ふ意義に重きを置かずに眞に口或は筆で云ふ意味だ。「曰」に近いけれども「曰」の様な形式的意義だけを表はすのでなく動作としての實質的意義がある。

「云」は生産性だが自動で非依據だから「何々」を云ふ「何々へ云ふ」と云ふ用法はない。されば「云」は右の例の「謂」の(1)(2)(4)(5)へは通用されない。唯「謂」の(3)の用法とは似てゐる。併し

人皆謂(云)城之不諫蓋有待而然退之不識而妄譏。

右の「謂」はその言ふ意義を主としていふのでそう思つていふ意だから「人皆謂」は衆人の意見をいふのだ。「云」に換へれば其の言ふ内容を主とせず唯その言ふ動作を主としていふことになる。

1 臣不勝受恩感激今當遠離臨表涕泣不知所云。諸葛亮出師表

2 漢王擊楚大戰彭城不利出梁地至虞謂左右曰如彼等者無足與計天下事謁者隨何曰不審陛下所謂。史記蘇布列傳

の(1)の「所云」と(2)の「所謂」とを比較しても分る。(1)のは云ふべき語を知らないの意

向のは仰る意味が分らないの意だ。

「云は」曰と似てゐる點が有る。併し、曰は形式動詞であつて其の言ふ動作に重きを置くものではないが、云は本動詞であつて實際の動作である。「云爲行動」などいふ語の有るのも分る。

況當陵者豈易爲力哉而執事者云々。苟怨陵以不死陵不死罪也然子卿視陵豈儉生之士而惜死之人哉。李陵答蘇武書

の「云々すは明に」云が動作に重きを置くことを示すものである。

咸丘蒙問曰語云盛德之士君不得而臣父不得而子。孟子萬章上

などの「云は」曰に代へても通ずるが「曰」の方は單に形式的意義で「云」の方は動作の實質的意義がある。一説に「曰は現在の動作で」「云は過去の動作だ」とも云ふがそんな區別はあるまい。又「曰は人の動作で」「云は死物に就いて云ふのだ」といふ説も違ふだらうと思ふ。右の例では咸丘蒙は人て語は死物であり、そういう場合が多いには相違ないが、必しもそうばかり云へない。

牢曰子云吾不試故藝。論語子罕

などの「子」は人である。

「説道は略言の意の生産性動詞だ。この二つは「聞」と熟合して「聞説聞道」などいふ語が出来た。「いふを聞く」といふの意味だが、一つの非生産性動詞である。和訓は兩方とも「さくなく」とある。「曰ふを」曰はく、「云ひけり」を云ひけらくと云ふ様に「さくなり」を「さくなく」といふのである。

形式動詞の小分

形式動詞は形式的意義が有るだけで實質的意義が缺けてゐるものであるから、他の語を補充語とし補充語に依つてその缺陷を補充される。そうしてその補充され方が種々である。そこでその補充され方に由つて六種に分たれる。一、單純形式動詞、二、被修飾形式動詞、三、歸著形式動詞、四、修飾形式動詞、五、寄生形式動詞これである。

本動詞に歸著性動詞、非歸著性動詞の別が有るが、形式動詞にもこの別が有る。五種の形式動詞の内歸著形式動詞は歸著性動詞である。其餘の四種は、たゞ修飾

形式動詞の中使令傳教遣の四つ及び單純形式動詞の於以自等が歸著性動詞であるだけで他は皆非歸著性動詞である。

單純形式動詞

單純形式動詞は單純な方法に由つて實質的意義を補充される形式動詞であつて即ち單純な補充語を取るものである。單純な補充語とは單に補充語であるだけで何等特殊の役目を持たないものをいふ。今先づ日本語の例を擧げて説明する。

- 1 大阪を出發する。 大阪を出發まだしなう。
- 大阪を出發今日する。 大阪を出發誰がした。
- 本を讀みもししなう。 本を讀みはしなう。
- 本を讀みさへすれば。 讀みもし書きもする。
- 2 花無き里に住みや習へる。 云ひも合へず。
- み山の里を思ひこそ遣れ。 云ひも得ず名づけも知らず。

の「」は形式動詞であつて。○は其の補充語である。そうして○は單に「…」に對して實質的意義を補充する補充語たるだけで別に何等の役目をも持たない單純な補充語である。之を實質語といふ。「…」はさういふ單純な補充語に由つて意義の缺陷を補充される。さういふ形式動詞が單純形式動詞である。

動詞が動詞としての實質的意義が有るだけで何等特殊の形式的意義を伴つて居ないものを吾々は不定法を名づける。英文典などで不定法と云ふのも約り其れである。唯英語などの癖として不定法へは主語を附けることが出来ないが其れは英語などの特殊の癖で、特殊の國語に拘らずに一般的に不定法を解釋すれば右の様な説明でなければならぬ。日本語では不定法は即ち無活用形である。右の諸例中の○がさうだ。「出發到著勉強運動」などは本來の無活用で「讀み書き住み」云ひ「思ひ名づけ」などは活用あるものゝ或る活段を固定させて無活用化せしめた無活用形であつて、何れも不定法である。

そこで單純形式動詞とは不定法(無活用形)の動詞を補充語とする形式動詞であることが分る。英語など「Do you go to the park, I will take a little wine, May I go, I do,

will, may などはその下の不定法動詞を補充語にして自己の形式的意義を實質化してゐる。

漢文にもこういう種類の形式動詞がある。

乎「乎は單純形式動詞であつて不定法の動詞(其の下に客語が有れば其れをも含めて一動詞とする)を實質語とし其の下に用ゐられて形式語となるものである。

不得乎。親不可以爲人。不順乎。親不可以爲子。孟子離婁上

世俗之人皆喜人之同乎己而惡人之異乎己也。莊子在宥

「乎は上の動詞。に對して形式語になるもので「す」の意である。「同乎異乎は同しうす異なりすであつて「乎は「す」の意がある。併し日本語の「すと違ふことは依據性があつて「何々に」といふ意味の客語を取ることである。即ち上の動詞を助けて其の依據性を明確にする目的のものである。日本讀では「乎を讀まずに客語なる下の名詞へに或は「より」を添へて讀む。併し「乎が「により」なのではない。「同乎己では「己が「乎」に對する客語なのである。「乎己が「同」に對する客語なのではない。

於于以自 この四つは單純形式動詞には相違ないが前置詞性の單純形式動詞

である。

子曰吾十有五而志於學三十而立。論語爲政

夏四月丁巳王入于王城取大叔于溫殺之于隰城。左傳僖二十五

子曰道之以政齊之以刑民免而無恥道之以德齊之以禮有恥且格。論語爲政

步自雪堂將歸於臨臯。蘇東坡赤壁賦

此の四つは皆歸著性が有るから下に客語を置く。「於于に至つては「乎」と殆ど同じ様であるが「乎は本來の形式動詞である。「於于は前置詞性形式動詞である。此の四つの詳細は第八節に譲る。

云「云はもと本動詞であつて「書云孝乎惟孝などの様に用ゐるものであるが、又形式動詞として動詞の下へ用ゐることが有る。

葉公問孔子於子路子路不對子曰女奚不曰其人也發憤忘食樂以忘憂不知老之將至云爾。論語述而

學孔子者習聞其說樂其誕而自小也亦曰吾師亦嘗師之云爾。韓愈原道

繆公亟見於子思曰古千乘之國以友士何如子思不悅曰古之人有言曰事之云

乎、豈曰友之云乎。孟子萬章下

於是相屬爲詩以道其行云。韓愈送殷員外序

晉平公於亥唐也入云則入坐云則坐食云則食。孟子萬章下

子曰禮云禮云玉帛云乎哉樂云樂云鐘鼓云乎哉。論語陽貨

凡吾所謂道德云者合仁與義而言之也。韓愈原道

□曰……云爾を從來……爾云ふと曰ふなどといふ風に訓んだのは惡訓だと思ふ。「云は上の——を實質語とし之に對して形式語となる。曰……云爾は……と曰ひ爾云ふ」と讀むべきもので、上の……と曰ひが實質語で「云ふが形式語であらうと思ふ。曰云の重なるのは日本語で云へばなぜ老の至らむとするのを知らないツテそらイハないか」と云ふやうなのである。「ツテは」としてあり「とては」と曰ひての意だからつて云ふは」と曰ひて云ふであつて、約りいふが重なるのである。

「入云は」と云へばの意であるが直譯すれば「入れ云へば」である。「入れは模型動詞で入れと命令する發音作用を表はすのである。上に「曰が有れば、曰まで入れて「曰入が記號動詞であるが、曰が無いから、入だけで模型動詞である。それが模型動

詞であることは「云」に由つて示される。「入は實質語(補充語)で「云は形式語だ。

「禮云は禮と云ひて直譯すれば「禮云ひ禮云ふ」といふ風になる。

「云は又「云々」と重なる場合がある。これは上のことを云ふだけでなく以下まだ色々云つた意味である。矢張單純形式動詞だ。

來得盡了の類 これらも不定法動詞の下に用ゐられる。

憂來藉艸坐、浩歌淚盈把。杜甫玉華宮

天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙。同飲中八仙歌

明眸皓齒今何在、血污遊魂歸不得。同哀江頭

桑柘影斜秋社散、家々扶得醉人歸。王駕社日

秋風吹不盡、總是玉關情、何日平胡虜、良人罷遠征。李白子夜午歌

且道世間甚事不、因忙後錯了。小學並行實明倫

了は近時の俗文及び口語に盛に用ゐられる。

歸著形式動詞

歸著形式動詞は客語に歸著し客語に依つて意義の缺陷を補充される形式動詞である。その補充語は實は客語であるから單純に補充するのではなく客語といふ形式に於て補充するのである。

然らば客語とはどういふものであるかといふと、事柄の客體を表はすものである。例へば

風花を散す。

鳥木に止る。

月山より出づ。

我れ人と交る。

の「……」は下の○○なる事柄に就いて其の客體を表はしてゐる。こゝいふのが客語だ。これらの客語は日本語では下へ「を」により「と」などの助辭が附いて居つて其の語が連詞中に於て客語になるべき資格のあることを示してゐる。この詞の連詞中に於て占むる立場を示す資格を格と云ふ。そうしてそれが客語になるべき資格であれば之を客語格といふ。

右の例の「……」は下の○○に對して客語であるが下の○○はこの客語に對して之を歸著語といふ。主語に對して敘述語が有る様に客語に對して歸著語がある。

歸著語は本動詞から成り立つことが多いが形式動詞からも成り立つ。客語は名詞から成ることが多いが動詞からも成るである。

漢文の歸著形式動詞には次の様な種類がある。

第一種 名詞を客語とするもの

有 無 勿 毋 亡 罔 靡 蔑 末 莫 微 爲……………他動性

如 若 猶……………依據性

第二種 模型動詞を客語とするもの

曰 爲 作……………生産性

第三種 動詞を客語とするもの

足 可 當 應 合 宜 暇 逸 勝 庶 庶 幾 見 遇 遭……………依據性

須 能 得 被 莫 無 勿 毋 罔……………他動性

爲……………生産性

等がそうだ。

有 漢文の「有」を説明するに先つて先づ日本語の「あり」から論じて見よう。凡そ

物は皆存在する。抽象的概念であつたに於て必ず其の存在を豫想する。物の概念には存在の觀念が含まれてゐるのである。物即是存在とも云へる。併し特に其の存在に就いて考へた時には、日本は極東に在りなどの様に動詞を以て存在を表はす。そういふ「在り」は動詞としての實質的意義を具へてゐるものであつて日本語の「在り」も漢文の「在り」も本動詞である。併しその物の存在の觀念が明確に物の概念から分化しない場合には別に動詞を用ゐずに

見渡す限の春の海、嶋、岩、小舟、鷗、白帆、波は靜にて風もなし。

の——などの様に名詞だけを用ゐる場合もある。又その存在の形式的意義だけを動詞に表はさしめて實質的意義をば名詞に表はさせる場合もある。その場合は

嶋あり

岩あり

小舟あり

鷗あり

である。「嶋、岩……」は名詞で存在の實質的意義を表はし、「あり」は動詞で存在の形式的意義を表はす。この「あり」は形式動詞である。この「あり」は自動性であつて「嶋、岩……」を主語とし主語に依つて自己に缺けた實質的意義を補充する。

□漢文の「有」は矢張存在の形式的意義を表はすもので形式動詞である。併し他動性である點が日本語の「あり」と違ふ。漢文の「有」は「有嶋、有岩」といふ様に「嶋、岩」を客語として客語に由つて自己に缺けた實質的意義を補充する。

□他動性の動詞には前に第七頁で云つた様に意志的他動と自然的他動とある。漢文の「有」は自然的他動である。「有嶋、有岩」の「嶋、岩」は客語であつて「有」が他動である以上、「有」といふ動作に別に主體がなければならぬ。併しこの場合はその主體が意志體(人格)ではなくて非意志體(自然力)である。「有」は人間の動作ではなくして自然力の動作である。「有嶋」は何物かが嶋を有つのであるが人間が有つのではなく自然が嶋を有つのである。猶

中天懸明月、ツク令嚴夜寂寥

の「懸」が人間が明月を中天へ懸けたのではなく自然力が懸けたのであると同様である。唯「懸」は本動詞で「有」は形式動詞であるだけの差で、自然他動である點は同じだ。自然他動の動作の主は自然力であつて一定してゐる。漢文ではその主體觀念が動詞の中へ埋没して仕舞つて一概念を成さないから自然他動の動詞には主

語を用ゐない場合が多い。「有嶋」に主語がないのはこの爲である。併し主語の有る場合もある。「我有父母」などいふ場合は「我」が主語である。「有は「我」の意志的動作ではなくて非意志的動作である。

□日本の「有」は自動で漢文の「有」は他動でも「有」が自然的他動であるから意義は同じことになる。「有嶋」を譯して「嶋あり」といふのはその爲だ。そういふ例は他にもある。

自然他動

自動

有嶋……………嶋あり

不見山……………山見えず

聞琴……………琴聞ゆ

下雨……………雨ふる

□併し又日本語では自動性の動詞を利用してそのまま自然他動に用ゐる習慣もある。

女郎多かる野べに宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ。古今集

「名をや立ちなむ」は自然他動であるが「名が立ちなむ」(自動)を利用したものである。「名を立てなむ」とは違ふ。「名を付きぬ」(他動)は「名が付きぬ」(自動)の自然他動で「名を付けぬ」とは違ふ。「下雨雨雪」などを「雨をふる」「雪を雨」と讀む習慣がある。此の習慣に従へば「有嶋」は「嶋をあり」と讀むべきである。そうすれば眞の直譯になる。何となれば客語を客語に譯し自然他動を自然他動に譯するからである。そう讀んで意味を味つて見てこそ始めて漢文の「有」の意味の工合が分る。若しも「有嶋」の「嶋」を主語と思ひ「有」を敘述語と思つたならば漢文の成分排列法は譯の分らないものになつて仕舞ふ。

階地々々米

「有」を「何々を有り」と譯して古例を讀んで見よう。

有朋自遠方來、不亦樂乎。論語學而

朋を有り、遠方より來る。亦樂しからずや。

王坐於堂上、有牽牛而過堂下者。孟子梁惠王

牛を牽いて堂下を過ぐる者を有り。

今日舉百鈞則爲有力人矣。孟子告子

今百鈞を擧ぐと曰はゞ力を有る人と爲さむ。

子曰夷狄之有君不如諸夏之亡也論語八份

夷狄の君を有るは諸夏の亡きに如かざるなり。

「有」の客語は必ず名詞である。勿論動詞性名詞の場合もある。

無 「無」は否定された「有」である。「有」の否定は「不有」であつて「無」は「不有」とは多少違ふ。「無し」と「有らず」とは少し違ふのである。肯定否定といふことは判断の形式である。「有」も「無」もどちらも肯定で、否定は「不有」「不無」「有らず」「無からず」である。唯「有」は肯定された結果を肯定し、「無」は否定された結果を肯定する。「無」は材料が否定なので形式は肯定である。意義の材料の否定は否定された結果であつて、これから否定するのではない。論理學で材料の肯定されてゐるのを表詮と云ひ、材料の否定されてゐるのを遮詮といふ。

	肯定	否定
表詮	有り	有らず
遮詮	無し	無からず

「無」と「有」とは表詮遮詮だけの違ひでその他は全く同じである。唯日本では「有り」は動作動詞で「無し」は形容動詞であるが、漢文ではどちらも動作動詞である。「無」を「無し」と讀むが直譯すれば「無かり」である。又「無某物」は假に「某物を無かり」と讀んでみれば「無」の文法的性質がよく分るのである。無は古く无と書いた。

夫よりあるは、
無からず

「勿」「亡」「罔」「蔑」「末」「靡」などは皆「無」と類音で意義も「無」と同じである。「罔」は全體を網する意味だとか、「末」は「すゑ」の意だとか、「蔑」はないがしろにする意味だとか、「亡」は段々無くなる意だとかいふのはよくない。「罔」といふ音を表はす爲に當字として罔といふ字を使つただけで網の意味はない。佛國米國と云つても佛敎國米食國の意でないのと同様である。「蔑」が侮蔑の意になるのは「蔑」に無の意味があるから轉じて無みする意味になつたので輕蔑の意から「無い」の意になつたのではない。

「無」及び此等の諸詞は皆名詞を客語とすることは「有」と同じである。又動詞性名詞も名詞であるから之を客語にすることもある。要するに物の無いのにも動作や状態の無いのにも使ふ。

無罪而殺士則大夫可以去。無罪而戮民則士可以徙。孟子離婁

子曰愛之能勿勞乎。忠焉能勿誨乎。論語憲問

子絕四。毋意。毋必。毋固。毋我。同子罕

孔子對曰有顏回者好學不遷怒不貳過不幸短命死矣今也則亡。同雍也

無稽之言勿聽弗詢之謀勿庸可愛非君可畏非民衆非元后何戴ナシ后非衆罔與守ナシ

邦。虞書大禹謨

晉政多門不可從也寧事齊楚有亡而已ナシ從晉矣若欲得志於魯請止行父而殺

王我斃蔑也而事晉蔑有貳矣魯不貳小國睦不然歸必叛矣。左傳成十六

公山弗擾以費畔召子欲往子路不說曰未之也已何必公山氏之之也。論語陽貨

織之爲珠璣華實變之爲雷霆風雨奇辭奧旨靡不通達。韓愈上兵部李侍郎書

雲漢之詩曰周餘黎民靡有子遺。孟子萬章

「無勿毋罔」は動詞の上に用ゐて禁止の意を表はす場合がある。「なかれ」と讀む。動詞の上に用ゐられて禁止を表はす場合は動詞性名詞を客語とするものではなく動詞を客語とするものであるから第二種に屬することとなる(第三頁)。「蔑末靡」は

命令には用ゐない様である。

莫「莫もなし」と讀むが「無」と少し違ふ。

君仁莫不仁。君義莫不義。孟子離婁

乃微服遊於康衢聞童謠曰立我丞民莫匪爾極不識不知順帝之則。十八史略五帝

溥博如天淵泉如淵見而民莫不敬言而民莫不信行而民莫不說。中庸

晉國天下莫強焉叟之所知也。孟子梁惠王

爲君計者莫若安民無事。史記蘇秦列傳

是以賓客遊士莫敢自盡於前者。同

是日觀范雎之見者群臣莫不變色易容者。同范雎列傳

「無」は有形物の無いにも動作状態の無いにも使ふが「莫」は有形物の無いには使はない。形の上から観ると右の最後の二例の様には有形物の無いに用ゐた様に見える場合が有つても意味の目的はその状態の無いことをいふのである。「群臣莫不變色易容者」は群臣皆變色易容の意をいふのである點から云つても「莫」が人の無いをいふのでなくて状態の無いを云ふのであることが判る。「我莫智識今夜莫月など

とは決して言はなす。

「微」も「無」と類音で矢張無い意味だ。微細といふ意味は無いといふ意味から轉じたものであらう。「微」は特殊の形式動詞であつて「なし」といふ意味に使ふことは殆どなく大抵假定して「無かつたならば」といふ時に使ふ(第二章第二節参考)。讀むには「なかりせば」或は音便で「なかつせば」と讀む。日本語の「なかりせば」の「なかり」は「無かり」(ラ行變格)の第二活段で「せ」は過去の活動辭「せ、○、き、し、しか」の第一活段である。

將殺里克。公使謂之曰微。子則不及此。左傳僖十

子犯請擊之。公曰微。夫人之力不及此。同僖三十

若伯夷者特立獨行窮天地。互萬世而不顧者也。雖然微。二子亂臣賊子。接迹於後世矣。韓愈伯夷頌

管仲相桓公。霸諸侯。一匡天下。民到于今受其賜。微管仲。吾其被髮左衽矣。論語憲問
「なかりせば」と訓んだものに次の様なものがある。

原泉混々。不舍晝夜。盈科而後進。放乎四海。有本者如是。是之取爾。苟セカ無本。七八月之間。雨集溝澮。皆盈。其涸也。可立而待也。孟子離婁

これは本無きを爲せばと訓ずべきものである。

曰爲作。曰は、いはく」と讀むが直譯すれば、いふである。「爲作」は自動では「何々たり」何々となるの如く「たり」なる」と讀み、他動では「何々となすの如く「なす」と讀む。「何々たり」は「何々」とありの約音である。

「爲」は形式動詞であつて且つ生産性動詞である。生産性のことは第一頁で説いたから再讀を願ふ。「謂ふ稱す」などは生産性動詞であるが本動詞であつて動作としての實質的意義が有る。「曰爲」などは、動作を表はすに相違ないが單に動作の形式的意義を表はすだけで動詞としての實質的意義はなんにも無い。「子曰」と云つた所で「余以爲」と云つた所で「曰爲」は何等動作の實質を表はさない。併し「子曰色難」とか「余以爲不可」とか云へば「曰爲」は「色難」以爲不可は動作の實質的意義を生ずる。即ち客語に由つて實質的意義が補はれるのである。

謂其臺曰靈臺。謂其沼曰靈沼。孟子梁惠王

邦君之妻。君稱之曰夫人。夫人自稱曰小童。邦人稱之曰君夫人。稱諸異邦曰寡小君。異邦人稱之亦曰君夫人。論語季氏

賢賢易色事父母能竭其力事君能致其身與朋友交言而有信雖曰未學吾必謂之學矣。論語學而

晉襲文公之餘威猶得爲諸侯之盟主。蘇老泉管仲論

惑而不從師其爲惑也終不解矣。韓愈師說

角者吾知其爲牛鬣者吾知其爲馬。韓愈獲麟解

已見松柏摧爲薪更聞桑田變成海。唐詩選二

美人爲黃土況乃粉黛假。同一

* 於是以石生爲媒以禮爲羅又羅而致之幕下。韓愈送溫處士序

三月乙卯乃雨甲子又雨民以爲未足。蘇東坡喜雨亭記

嗚呼仲以爲威公果能用三子矣乎。蘇老泉管仲論

(4)の「曰」は名づける作用で其の生産物は名稱だ。「靈臺夫人」…は名稱。

(5)の「曰」は言ふ作用で其の生産物は言語だ。「未學」は人の言語だ。

(6)の「爲」は「ある」の意味で。○はその生産物だ。

(7)の「爲」は「なる」の意味で。○はその生産物だ。

(8)の「爲」は「する」の意味で。○はその生産物だ。

(9)の「爲」は思ふ意味で其の生産物は思念だ。——は民仲の思念だ。

「曰」はもと自動性であるが他動兼生産に用ゐられることもある。

謂山蓋卑爲岡爲陵民之訛言寧莫之懲召彼故老訊之占夢具曰予聖誰知鳥之

雌雄。詩小雅節南山正月

「曰爲」の客語。○。——は前例の(4)(5)(6)では○。○が名詞と見え(7)(8)では——が動詞と見える。通俗の解はそれでも済むが嚴正に言へば此等の客語は皆模型動詞である。模型に代示される實物は(4)では名稱作用で(5)(6)では事物の事物ぶり(作用)である。(7)では言語作用(8)では思惟作用である。(第三頁参照)

「曰爲」は動詞ではあるが動作の形式的意義を表はすだけである。日本語で

鳴が鶯鶯を視て餌を奪はれるかと思つて怒つて、一聲高くクワッ。と云ふと此のクワッは聲といふ物としてのクワッでもあるが又音響作用としてのクワッである。クワッだけでも音響作用の模型動詞であるが動作としての形式的意義を明確にする爲にはクワッへとを付けクワッとをして音響作用の實質

的意義を表はさしめ、その形式的意義はいふに表はさしめる。漢文でも同様で

夫鵙鵙發於南海而飛於北海。非梧桐不止。非練實不食。非醴泉不飲。於是鵙得麤
鼠。鵙鵙過之。仰而視之曰。嚇。 莊子秋水十二

といふ。だから曰は形式動詞である。又

- 1 君君。臣臣。
- 2 臣焉而不君。其君。

の(1)の君臣は君たり臣たりの意、(2)の臣は臣たりの意、君は君とすの意で各一詞で
ありながら君臣といふ實質的意義とたりとすといふ形式的意義とを表はしてゐ
るが、之を分解して形式的意義(たりとす)を爲て表はせば

君爲君。君臣爲民。
爲之臣而不以其君爲君

と云ふのであるから爲は形式動詞である。

曰は歸著形式動詞であるが、謂言道等は本動詞である。「云は其の言つた語の上に
在れば本動詞で下に在れば單純形式動詞である。(第八九頁)

爲は右に挙げた様な場合は形式動詞であるが又本動詞の場合も有る。「成就濟は
常に本動詞だ。「作は大體は本動詞だが稀に形式動詞として爲に代用される場合
がある。「爲作の區別をいふには爲の用法を詳論する必要が有る。「爲には歸著形
式動詞として、前置詞として、本動詞としての三用法が有る。

形式動詞としての爲の用法は次の三つである。
一「思ふ或は云ふ」といふ意味の場合、これは上へ副詞以を附けて「以爲又は以……爲」
として用ゐることが多い。名稱を與へれば他動性生産性の用法だ。

余以爲不可。 我以爲機可乘。
余以彼爲君子。 余以爲彼君子。

の類だ。前の三四頁の例もこれだ。「以爲は余以て不可と爲すの様に讀んでも善
く又余以爲へらく不可なり」と讀んでも善い。唯下が長い時には「以爲へらく」と
讀む方が具合が善い。

又「以なしに爲」だけを用ゐる場合もある。

子曰、法語之言能無從乎、改之爲貴、異與之言能無說乎、釋之爲貴。 論語子罕

世涸々不_レ清。蟬翼爲_レ重。千鈞爲_レ輕。屈平卜居
矢張、他動性で生産性だ。他動性に對する客體は暗示されてゐる。この用法には次の様な自動性なのがある。

樂正之(克)見_レ孟子曰克告於君君爲_レ來見也。孟子梁惠王
これは意志を表はすものである。「欲」に近し。

二「なる」の意で單なる生産性だ。

柳下惠爲_レ士師三黜。論語微子

凡自唐虞已來編簡所存、大之爲_レ河海、高之爲_レ山嶽、明之爲_レ日月、幽之爲_レ鬼神、織之爲_レ珠璣、華實變之爲_レ雷霆風雨、奇辭與旨靡不通達。韓愈上兵部李侍郎書
汝作士明于五刑以弼五教期于予治。虞書大禹謨
の類で前の三〇四頁の(一)も此れだ。

信方斬曰吾悔不用_レ蒯通之計、乃爲_レ兒女子所詐、豈非天哉。史記淮陰侯列傳

などの「爲」も「なる」の意で此れだ。之を「ため」と思つて「兒女子の爲に詐かる」と讀むのは直譯としては誤である。直譯では「兒女子の詐く所と爲る」である。「兒女子の詐

く所」は連詞的名詞であつて「爲」の客語である。

□此の「三」の用法は依據性を帯びることがある。そうして其の依據の客語は形式名詞「之」に由つて示される。

古之時人之害多矣、有_レ聖人者立、然後教之以_レ相生和養之道、爲_レ之君、爲_レ之師、驅其蟲蛇禽獸處_レ之、中士。韓愈原道

「之に君となり、之に師となり」と讀むべきである。依據性に對する客語は「之」で、生産性に對する客語は「君師」だ。こういうのを「之が君となり、之が師となり」と讀む習慣があるがそれは惡訓である。

又「桑田變成海」などの様に「成」を用ゐても略同義だが、文法上は違ふ。「成」は本動詞であつて自然的他動である。「海を成す」と讀むが善い。

三、前條の「なる」の意の他動で「なす」と讀む。何々にするの意で他動性生産性だ。

予至扶風之明年始治官舍爲_レ亭於堂之北、而鑿池其南、引_レ流種_レ樹以爲_レ休息之所。

蘇東坡喜雨亭記

以_レ相如功大拜爲_レ上卿、位在_レ廉頗之右。史記廉頗列傳

前の二四頁の(四)も此の例である。「以爲」と「以」へ續いても「以爲へらく」の意ではなく、實際にそうする意である。

この用法が依據性を帯びると次の様になる。

周公乃成其不中之戲以地以人與小弱弟者爲之主其得爲聖乎。柳子厚桐葉封弟辨

之に主と爲すと讀む。「之が主となす」と誤つてはいけない。

四「たり」と讀む場合の用法で自動性で生産性だ。

爾爲爾我爲我雖袒裼裸裎於我側爾焉能浼我哉。孟子公孫丑

穰苴既辭與莊賈約曰旦日日中會於軍門穰苴先馳軍立表下漏待賈賈素驕貴

以爲將已之軍而已爲監不甚急。史記司馬穰苴列傳

帝曰臣作朕股肱耳目。虞書益稷

の類で二四頁の(五)もこれだ。

この用法が依據性を帯びると依據の客語と生産の客語とを取る。

相如素賤人吾羞不忍爲之下宣言曰我見相如必辱之。史記廉頗列傳

この「四」の用法は「たり」と讀む位で靜止的動作を表はすのであるから前々項「三」と少し違ふ。「三」は「なる」と讀んで運動性動作を表はすのである。

爲「爲」は又單に動作を爲る意の場合がある。他動性の形式動詞で動作を表はす名詞を客語とする。

1 吾臣有檀子者使守南城楚不敢爲寇泗上。十八史略春秋齊

陽虎曰爲富不仁矣爲仁不富矣。孟子滕文公

屈原曰舉世混濁而我獨清衆人皆醉而我獨醒是以見放漁夫曰……衆人皆

醉何不舖其糟而啜其醢何故懷瑾握瑜而自令見放爲。史記屈原列傳

是社稷之臣也何以伐爲。論語季氏

右の〇は爲の他動性の客語である。△△は他動性の客體を表はすものではあるが意味が提示されてゐるから爲より上に在る。

これが更に依據性を帯びると次の様になる。そうして「作」が代用される。

坐一室左右圖書與之語道理辨古今事當否論人高下事後當成敗若河決下流

而東注若駟馬駕輕車就熟路而王良造夫爲之先後。韓愈送石處士序

然天下已定、後世子孫之計、陳平張良之所不及、則高帝嘗先爲之、規畫處置、使夫後世之所爲、曉然如自見其事、而爲之者。蘇老泉高祖論

書曰、天降下民、作之君、作之師。孟子萬章

〇〇は他動性の客語で、〇〇は依據性に對する客語である。

□こゝろいふ場合の「之」を「之が」と讀むのは惡訓である。「之」といふ形式名詞は唯「之に」之を」といふ意味の客格が有るだけで主格も連體格もないのである。「これがこれの」と讀む理由が無い。「之に」と讀むべきものである證據には次の様な例がある。

反乎無聲、與形者鬼神是也……有動於民而爲禍、亦有動於民而爲福、亦有動於民而莫之爲禍福。韓愈原鬼

の「莫之爲禍福」は普通の排列では「莫爲之禍福」であるが、上に打消の文字「莫」が有るために「爲」に對する客語「之」の位置が變つたもので「莫之能禦」「莫之得」などと同例である。處が、この法は客語が單詞なる代名詞或は形式名詞であつて、而も直接に打消さるべき動詞に客語たる場合に限るのである。「莫斷吾頭」「我不知汝意」などの様に「吾が頭」「汝が意」など云ふ場合には位置が變らないのである。然らば「之れが禍福

を爲す莫し」の意ならば「之」の位置が「爲」より上になる筈がない。「之に爲す」の意であるからこそ「之」が直接に「爲」の客語になるから「爲」の上に在るのである。但し「之を」と訓ずる場合は有る。併しそれは形式副體詞であつて形式名詞ではないのである。(第三五頁)

「爲」が形式副詞として用ゐられる場合には「ため」と讀む。それは副詞の所ていふが、今序に一寸本動詞たる場合のことを述べる。

一、物を作る意味の場合の單なる他動「作」と通ずる。

謹獻舊所爲之文一十八首。韓愈與于襄陽書

因魯史記作春秋、自隱至哀十二公、絕筆於獲麟。十八史略魯

これが依據性を帯びると物を他人の爲に作る意になる。これは依據で他動だ。有聖人者立……寒然後爲之衣、饑然後爲之食、木處而顛、土處而疾也、然後爲之宮室、爲之工、以贍其器用、爲之賈、以通其有無、爲之醫藥、以濟其天死、爲之葬埋、祭祀、以長其恩愛、爲之禮、以次其先後、爲之樂、以宣其湮鬱、爲之政、以率其怠勸、爲之刑、以鋤其強梗。韓愈原道

この「之」も「之」がと讀むのは誤である。「爲」は依據性で且つ他動性であるから「之」に何々を爲すである。

二、他に對して何でも或る爲をする意味で其の所爲の種類に由つて授ける意味にも治める意味にも學ぶ意味にもなる。

以之爲己則順而祥、以之爲人則愛而公、以之爲心則和而平、以之爲天下國家無所處而不當。韓愈原道

冉有曰夫子爲衛君乎。論語述而

爲孔子者習聞其說樂其誕而自小也、亦曰吾師亦嘗師之。韓愈原道

滕文公問爲國孟子曰民事不可緩也。孟子滕文公上

三、出来るの意で「成」と通ずる。自動だ。

志立於事爲之先、志遂乎功成之後。朱伯賢論志

この外形式名詞性の形式動詞として「爲にす」と讀むべき場合があるが、これは變態詞である。(第八節)

如若猶 「如若」は同様である意の時は「ごとし」と讀み、及ぶ意の時は「し

く」と讀むが其れは日本人が二つに分けて讀むので漢字の「如若」は「ごとし」しく「共に通な意を持つものである。「猶」は「なほ……ごとし」と二度に讀む。これは關係の同じことを表はすものである。

帝堯陶唐氏……其仁如天、其知如神、就之如日、望之如雲。十八史略五帝

嘗晝寢、夢遊華胥之國、怡然自得、其後天下大治、幾若華胥。同

禹濟江、黃龍負舟、舟中人懼、禹仰天歎曰、吾受命於天、竭力而勞萬民、生寄也、死歸也、視龍猶蠅蚋。同禹

「如若」の訓「ごとし」は「こと」といふ名詞をク活に活用させたもので名詞性形容動詞であるから「が」の下へ用ゐるが漢文の「如」は依據性の形式動詞であるから直譯すれば「如花」は「花の如してはなく、花に如し」「花に似たり」である。其の證據には「如之」といふ用例が澤山ある。

九年春王三月癸酉大雨霖以震、書始也、庚辰大雨雪亦如之。書時失也。左傳隱九
之は客語格に限る詞である。「之れ」といふ格はない。

「如若」「孰如」なども皆「何に如る」「孰れに如る」「何が如る」「孰れが如る」「或は」「何に如る」の

意である。(第三編第三章第四節)

足「足は本動詞では「糧足」足其糧の様に名詞を主語客語にするが、形式動詞の場合には依據性であつて次の例の様に動詞を客語とする。

大王信行臣之言死不足以爲臣患亡不足以爲臣憂。史記范雎列傳

子曰如有周公之才之美使驕且吝其餘不足觀也已矣。論語泰伯

且跖之爲人也心如涌泉意如飄風強足以拒敵辯足以飾非。莊子盜跖

可「可はべし」と讀むがこれは意譯である。日本の「べし」は助辭だが「可」は形式動詞だ。意味は「べし」と同様で自然又は人爲の拘束許容を表はす。當然命令可能などの意になる。

王召見問藺相如曰秦王以十五城請易寡人之璧可予不。相如曰秦彊而趙弱不

可不許。史記廉頗列傳

汝可疾去矣且見禽。同商君列傳

然則廢覺鐘乎曰何可廢乎。孟子梁惠王

子曰父母之年不可不知也一則以喜一則以懼。論語里仁

嗚呼在位而不肯自憂又禁他人使不得憂可嘆夫。歐陽修讀李翱文

周之德其可謂至德也已矣。論語泰伯

子曰三軍可奪帥也匹夫不可奪志也。同子罕

子曰可與共學未可與共適道可與適道未可與立可與立未可與權。同子罕

曾子曰可以託六尺之孤可以寄百里之命臨大節而不可奪也君子人與君子人也。同泰伯

梓宮決不可還太后決不可復淵聖決不可歸中原決不可得而此膝一屈不可復伸國勢陵夷不可復振可爲痛哭流涕長大息也。胡澹菴上高宗封事

「可」は下の客語——に對して「可」であるといふ意で依據性である。依據性である證據には次の様な例がある。

知不可乎驟得託遺響於悲風。蘇東坡赤壁賦

の「不可」の下に「乎」が有ることは「不可」の依據性たることを示すものである。

「可」は「可以……」といふ時は可能の意が明確になる。「以」が下の動詞を修飾して「以……」といふ連詞的動詞を成しそれが「可」の客語になる。

當應合 「當應はまさに……べし」と讀む。日本語の「まさに」は副詞で「べし」は助辭だ
が漢文の「當應」は形式動詞だ。「合はたどべし」と認む。

公叔座召鞅謝曰……因謂王即弗用鞅當殺之王許我汝可疾去矣且見禽史記廉頗藺相如列傳

時與道人偶或隨樵者行自當安寢劣誰謂薄世榮韋應物幽居

索莫竟何事徘徊祇自知誰爲後來者當與此心期柳宗元南澗中題

黥布者六人也姓英氏秦時爲布衣少年有客相之曰當刑而王史記黥布列傳

王之弟……不當封邪周公乃成其不中之戲以地以人弱小弱弟者爲之主其

得爲聖乎柳子厚桐葉封弟辨

聖主不須封禪凡主不應封禪梁武帝紀

簾前春風應須惜世上浮名好是閑唐詩選五

苟見陛下如此將謂真心事佛皆云天子大聖猶一心敬信百姓何人豈合更惜身命韓愈諷佛骨表

「當は」——に當ずの意、應は——に應ずの意合は——に合すの意から形式動

詞となつたものであるから自動性で依據性であつて下の——を客語とする。

「宜」は「宜しく……べし」と讀む。これも……に宜しといふ意味であつて自動の依據性である。

詩云娶妻如之何必告父母信斯言也宜莫如舜舜之不告而娶何也孟子萬章

今雖不能如周公之吐哺握髮亦宜引而進之察其所以而進退之不宜默々而已也韓愈復上宰相書

王之弟當封邪周公宜以時言於王不待其戲而賀以成之也柳子厚桐葉封弟辨

無所能人乃宜以盲廢有所能人雖盲當廢於俗輩不當廢於行古人之道者韓愈代張籍與李浙東書

下の——なる動詞を客語とする。意味は「そうある筈だ」そうなければならぬといふ意味で「可」よりは強く「不可」よりは弱い。「宜が可」と重なることが有る。

擅齊之彊得一士焉宜可以南面而制秦尙何取鷄鳴狗吠之力哉王荆公讀孟嘗君傳
臣竊以爲其人勇士宜可使史記廉頗藺相如列傳

「宜しく以て南面して秦を制すべし」と讀む。「制することが出来(可)る筈(宜)だの意だ。「宜」を當然に「可」を可能に使うのである。「秦を制すべし」と讀んではいけない。

「宜は宜しく」と讀む爲に副詞の様に感ぜられるが、これは「べし」の方が重いので「宜しく」は附け加へて讀むだけである。「宜」が形式動詞である證據には次の様な例がある。

宜乎辭尊而居卑辭富而居貧。韓愈爭臣論

「宜」の下に「乎」を置き得ることはその下の語——が客語であること及び「宜」に依據性のあることを明示する。

暇違皇 この三つは上に「不」があればいとまあらずと讀み「不」が無ければ反語であつていとまあらむやと讀む。何れも餘裕の無い意である。依據性であつて下へ他の動詞を附けてその客語にする。

問無恙外不暇出一言且先賀其得賢主人。韓愈代張籍與李浙東書
聖人之憂民如此而暇耕乎。孟子滕文公

爾之安行亦不違舍爾之亟行違脂爾車。一者之來云何其旺。毛詩小雅節南山

吾濟小人朝不及夕相時射利皇郵厥德。蘇東坡三槐堂銘

勝 やはり上に「不」があつて否定に用ゐられる。日本讀は「勝へず」又は「勝けて」；「不」であるが漢文としては依據性の形式動詞で下へ必ず客語として他の動詞を置く。

不違農時穀不可勝食也數罟不入滄池魚鼈不可勝食也斧斤以時入山林材木不可勝用也。孟子梁惠王

「勝」の意は「切れる」意で「不可勝食」は「食ひ切れない」の意だ。

庶庶幾 「ちかし」と訓ずる。「こひねがはくは」とも訓ずるが其れは意譯である。

漢文としては依據性の形式動詞で「足」と同じ用法である。意味は幸にそうあることが望まれようかといふに在る。

誠宜有以奉其職使四方後代知朝廷有直言骨鯁之臣天子有不僭賞從諫如流之美庶巖穴之士聞而慕之束帶結髮願進於闕下而伸其辭說致吾君於堯舜熙

鴻號於無窮也。韓愈爭臣論

欣々然有喜色而相告曰吾王庶幾無疾病與孟子梁惠王下
王之好樂甚則齊國其庶幾乎同

最後の例の様に「庶幾」の下に客語の無いのは客體の意義が餘りに一般的であるためだ。完全なる國たるに庶からむの意だ。

「庶」は本動詞としては、翼ふ意にも使ふ。

吾儕小人朝不及夕相時射利皇郵厥德庶幾僥倖不種而穫蘇東坡三槐堂銘

「こひねがふ」と讀む。嘗て明治教育勅語の漢譯に原文の文字をそのままに庶幾の字を用ゐたことに就いて喧しい議論があつたが庶幾を「こひねがふ」といふ動詞に使ふことは一向差支はない。

見「見」は被動を表はす形式動詞である。「るらる」と訓ずる。

汝可疾去矣且見禽史記商君列傳

且夫有高人之行者固見非於世有獨知之慮者必見救於民同

嗚呼其亦幸而出於三代之後而不見正於禹湯文武周公孔子也韓愈原道

高帝怒使人讓梁王梁王恐欲自往謝其將扈輒曰王始不往見讓而往往則爲禽

矣史記魏豹列傳

六國爲一并力西鄉而攻秦秦必破矣今西面而事之見臣於秦夫破人之與見破同
於人也臣人之與見臣於人也豈可同日而論哉同蘇秦列傳

「見」は見ゆる意が有る。即ち遇ふ遭ふの意だ。「見禽見非」は禽にせらるる「見破」は破にせらるることに出會ふの意だから依據性である。そうして右の例の——は原動を表はす動詞であつてこれが「見」の依據性に對する客語になる。下の○○は原動の主體即ち被動の客體であつてこれは別の形式動詞「於」に對して客語になる。

「見」が見ゆる意即ち出會ふ意であることは次の「遭遇」が被動を表はすことに因つて明瞭である。「被」が蒙る意で他動性であるのと違ふ。

遭遇 この二つも「るらる」と讀む。「見」がまみゆる意から被動の語となつた様にこの二つも事件にぶつかる意から被動になつたのである。

去之趙見逐入韓魏遇奪釜鬲於塗史記范雎蔡澤列傳

遭太后虧損至德同惠帝紀

これらは「見」の様に多くは用ゐられない。

須「爲可からく……べし」と讀む。須つ意、須要な意味から轉じて形式動詞となつたものである。他動性だ。

勸君金屈卮、滿酌不須辭。花發多風雨、人生足別離。唐詩選六

雨晴雲散北風寒、楚水吳山道路難。今日送君須盡醉、明朝相憶路漫漫。唐詩選七

能「能は能ふの意だが副詞に直して能くと訓じ、不能だけを能はずと動詞に訓する。客語(次の例の——)に對して他動性だ。

有執爵而言者、曰大夫真能以義取人、先生真能以道自任、決去就。韓愈送石處士序

秦王因曰、今殺相如、終不能得璧也、而絕秦趙之驩。史記藺相如列傳

能是「能文章」などの様に名詞の上に使つたのは本動詞だ。

得「う」と讀む。客語(次の例の——)に對して他動性だ。

舜之不告而娶、則吾既得聞命矣。帝之妻舜而不告、何乎。曰帝亦知告焉、則不得妻也。孟子萬章

齊宣王問曰、齊桓晉文之事、可得聞乎。孟子梁惠王

被 本動詞では「かうむる」と讀んで「被頭巾」などの様に名詞を客語とするが、形式動詞では「るらる」と讀んで動詞を客語とし、他人の動作を蒙る意を表はす。日本の「るらる」は助辭であるが漢文の「被」は他動性の形式動詞だ。

又安知夫被、縱而去也不意其自歸、而必獲免、所以復來乎。歐陽修縱囚論

懷畔逆之意、及敗不死而虜囚、身被刑戮。史記魏豹列傳

以萬乘之國、被圍於趙、壤削主困、爲天下僂笑。同魯仲連列傳

同人永日自相將、深竹閉園偶辟疆、已被秋風教憶胎、更聞寒雨勸飛觴。唐詩選五張

南史

「被」は依據性で他動性である。依據性に對しては、原動の主體を表はす名詞。〇。〇。が客語となり、他動性に對しては、原動を表はす動詞——が客語となる。

莫、無、勿、毋、罔 皆動詞を客語として之を統率して禁止の意を表はす。「なかれ」と讀む。「勿」が一番禁止の意が強い。

歸心莫問三江水、旅服從沾九日霜。唐詩選五張南史

莫遣行人照容鬢、恐驚憔悴入新年。同李益

主人不相識。偶坐爲林泉。莫謾愁沽酒。囊中自有錢。唐詩選六賀知章

座屏人言曰。王卽不聽。用鞅必殺之。無令出境。王許諾而去。史記商君列傳

諸生業患不能精。無患有司之不明。行患不能成。無患有司之不公。韓愈進學解

左右皆曰。可殺。勿聽。諸大夫皆曰。可殺。勿聽。國人皆曰。可殺。然後察之。見可殺焉。然

後殺之。故曰。國人殺之也。孟子梁惠王下

乃盟。載書曰。凡我同盟。毋蘊年。毋壅利。毋保姦。毋留慝。左傳襄十

益曰。吁。戒哉。傲戒無虞。罔失法度。罔遊于逸。罔淫於樂。任賢勿貳。去邪勿疑。疑謀勿

成。百志惟熙。虞書大禹謨

爲「るらる」と讀む。被動の語だ。

公子光謂吳王曰。彼伍胥父兄爲戮於楚。而勸王伐楚者。欲以自報其讐耳。史記伍子

胥列傳

王始不往。見讓而往。往則爲禽矣。不如遂發兵反。同魏豹列傳

これは被動を表はすには相違ないが矢張なるの意で「爲戮於楚」は楚に戮となるてある。前の第二八頁の「爲」の三の用法の一種である。唯彼は名詞を客語にして「爲所

戮」戮る所となるといふが此れは直に動詞「戮」を客語とするの相違はある。矢張、生産性で依據性だ。

修飾形式動詞

修飾形式動詞は終止獨立して斷句の代表詞となるものが無く、必ず他語に對して修飾語となり、修飾される詞に由つて實質的意義を得る形式動詞である。それには「得使俾令遣教」等がある。

得 前に第三四頁に挙げた「得は可得聞乎」などの「得」の様に客語聞に歸著して意義が實質化されるものであるから歸著形式動詞であるが「得は又客語に歸著せず」に他語を修飾して被修飾語に由つて實質化される用法がある。その場合には修飾形式副詞である。

子曰。秦伯其可謂至德也已矣。三以天下讓。民無得而稱焉。論語秦伯

居下位而不獲於上。民不可得而治也。孟子離婁

秦復愛六國之人。則遞三世可至萬世而爲君。誰得而族滅也。杜牧阿房宮賦

公曰君王何如對曰非小人之所得知也。左傳成九

の「得」などがそうだ。下の「而」は無くても善い譯であるが「而」が無いと歸著形式動詞の場合との區別が不明確になる。例へば「不可得治は得て治むべからずか治むるを得べからずか分らなくなる。そこで大抵「而」を附けるのである。

この用法に於ては「得而○○」なる連詞は上に「不無」を附けて否定にするか、そうでなければ反轉語にする場合が多い。即ち「得て……ず得て……なし」又は「得て……むや」などとなる。單に肯定にして「得て……す」となることは稀だ。

使は矢張修飾形式動詞で下の動詞を修飾し且つ下の動詞に由つて意義が實質化する。

楚數使奇兵渡河擊趙。記史淮陰侯列傳

漢王使酈食其已說下齊。同

楚亦使龍且將號稱二十萬救齊。同

の「使」の類だ。下の——を修飾して之にそうさせる意味を帯びしめる。「使は實質動詞では人を使ふ意味だが形式動詞では使ふといふ様な實質的意味はないか

ら日本讀ては之をしてと讀む。その實質的意義は下の動詞に由つて補はれる。下の動詞はそうさせる意味を帯びるから日本讀ては之へしむを附けて「何々せしむ」と讀む。

「使」には他動性がある。他動性に對する客語は名詞を用ゐる。右の例の○○がそれだ。「使」はその客語と共に連詞的形式動詞となるのである。併し「使」が誰にそうさせるかが客語なしに分る場合には客語は要らない。例へば

子曰民可使由之不可使知之。論語泰伯

子曰如有周公之才之美使驕且吝其餘不足觀也已矣。同

この場合の「使」は「使之」の意であるが「之」が無い爲に「使」を訓まらずに下の動詞(由、吝)へしむを附けて讀むから丁度「使」をしむと訓んだ形になる。併し眞の直譯をすれば「民は使て由らしむべからずの如くなるべきである。

「使」の下に修飾さるべき動詞が無い場合がある。

布之初反謂其將曰上老矣厭兵必不能來使諸將來。史記蘇布列傳

樂正子見孟子曰克告於君君爲來見也嬖人有臧倉者阻君是以不果來也曰行

或使之行止或尼之、行止非入所能也。孟子梁丘王下。

この場合は「使」が下の動詞の意義を自己の内部へ含むのであるから「使」が寄生形式動詞化する。「之を使む」と読む習慣ではあるが「しむ」は動助辭であつて單用すべきものではないから「之をしむ」と訓むのは惡訓である。「之を使ってせしむ」或は「之をせしむ」と讀むべきである。

「使」をしての意とすれば修飾形式動詞だといふことになり「しむ」の意だとすれば歸著形式動詞だといふことになる。併しそれが前者であることは次の様な例に由つて證明される。

1 使天而雨珠寒者不得以爲襦使天而雨玉饑者不得以爲粟。蘇東坡喜雨亭記

秦人不暇自哀而後人哀之後人哀之而不鑑之亦使後人而復哀後人也。杜牧阿房宮賦

2 且天之生物也使之一本而夷子二本故也。孟子滕文公上

故深折其少年剛銳之氣使之忍小忿而就大謀。蘇東坡留侯論

3 漢王使酈食其已說下齊。史記淮陰侯列傳

右の例の(1)は「使」の客語の下に「而」が有る。「使がしむてあつて意味が終止するならば「而」は有り得ない。「而」が有るのは「使がしてである證據である。「使天而雨珠は「天を使而雨を雨せしむである。之を天にして珠を雨せ使む」と解することの出來ない證據には(2)の例に「使の下に「之」が有る。「之は客格が有るだけで主格はない詞であるから「使之は「之を使って」と解する以外には解し様がない。又右の例の(3)は「已」を「使」の上に置かずに「說」の上に置いてある。「使をしむ」と解すれば「已」に説いて齊を下さしめたりといふことを酈其食にさせる意となる。「已」といふ字の性質上そんなことは言へない。「使を被」に換へて「人被盜賊已偷物などと云ひ得るものではない。

俾「使」と同様だ。下の語「」を修飾して使動の意を帯びしめる。

或聞茲命司慎司盟名山名川羣臣羣祀先王先公七姓十二國之祖明神殛之俾失其民隊命亡氏踏其國家。左傳襄十一年

世々享德萬邦作式俾我有周無斃嗚呼往哉惟休無替朕命。周書微子之命

王曰古人有言曰牝雞無晨牝雞之晨惟家之索今商王受惟婦言是用昏棄厥肆祀弗答昏棄厥遺王父母弟不迪乃惟四方之多罪逋逃是崇是長是信是使是以

遣

爲大夫郷士俾暴虐于百姓以姦宄于商邑。周書牧誓
遣はす意から使動の形式動詞となつたものである。
義帝天下之賢主也獨遣沛公入關不遣項羽。識卿子冠軍於稠人之中而擢以爲
上將。蘇東坡范增論

乃遣張良往立信爲齊王。史記淮陰侯列傳

從來凍合關山道今日分流漢使前莫遣行人照容鬢恐驚憔悴入新年。唐詩選李益

「不遣項羽」は「不遣項羽入關」の意で「遣」の中へ「入らしめ」の意を含ましめたものである。
教 語源が教へる意であるから「使」よりは多少勸誘的である場合もあるが、必し

もそうではない。訓は「使俾」と同じだ。

晉侯以樂之半賜魏絳曰子教寡人和諸戎狄以正諸華。左傳襄十一年

子教子路菹此患上無以爲身下無以爲人。莊子盜跖

同人永日自相將深竹閒園偶辟疆已被秋風教懷膾更聞寒雨勸飛觴。唐詩選五張

南史 白狼河北音書斷丹鳳城南秋夜長誰爲含愁獨不見更教明月照流黃。唐詩選五沈

俛

「已被秋風教懷膾」は直譯すれば「已に秋風に我を教て膾を懷はしめらるる」である。「使俛」は人事物に對して他動性であるが「教及び次の令」は人事物に對して依據性である。動作に對しては何れも修飾的である。

令「使」と同じであるが人事物に對して依據性である。

卒定變法之令令民爲什伍而相收司連坐。史記商君列傳

王卽不聽用鞅必殺之無令出境。同

惠王既去而謂左右曰公叔病甚悲夫欲令寡人以國聽公孫王也豈不悖哉。同

乃召延陵生令將軍中騎先至晉陽。韓非子十過

假令晏子而在余雖爲之執鞭所祈慕焉。史記管晏列傳

「假令」を「たとひ」と讀むがそれは右の(1)の様な場合には適當であるが(2)の様な場合にはいけない。

「令出境」は「令鞅出境」の意である。

被修飾形式動詞

被修飾形式動詞は修飾語に依つて實質的意義の缺陷を補充される形式動詞である。先づ日本語の例を引くが、

本を讀んで居る　　字を書きつゝある
火が消えてゐる　　火が消してある
人に道を教へてやる　　人が道を教へてくれる
遊んでほならない　　遊んでも善す
來れば善す　　雨が降るといけなす

の「……」は被修飾形式動詞で、上の「……」に修飾せられつゝ且つ「……」に由つて自己の形式的意義を實質化する。その「……」は形式上修飾語であるが、實質上「……」に對する補充語である。そうして動詞へ「つゝ」或は「は」「ば」ともなどの附いたものである。「つゝ」の附いたものは方法格で「は」「ば」との附いたものは拘束格でも附いたものは放任格で、此の三格は本來の用法は修飾語になるべきものである。

例へば

『墨を磨つて』「字を書く」　『月を觀て』「故郷を思ふ」
『怠けると』「落第する」　『勉強すれば』「及第する」
『雨が降つては』「出られなす」『雨が降つても』「出かける」

の「……」は下の語「……」を修飾するだけで補充しない。下の語「……」には意義に缺けた所がない。然るに前例の「……」は形式動詞であつて實質的意義が缺けてゐるが、上の「……」に由つて補充される。形式上は修飾であつて實質上は補充もされてゐる。「人に道を教へてやる」の「教へては」や「方法には違ひないが、何をやるかと云へば」教へての効果を遣る（與へる）のであるから「教へては」方法であつて同時に遣る物をも表はしてゐる。さういふ譯でさういふ形式動詞を被修飾形式動詞といふ。その補充語は單純な補充語ではなくて「修飾」といふ役目を持つてゐる。

英語で云へば「He is writing the letter.」「I am reading it.」の is, am などがさうだ。方法格（分詞法）を補充語として自己の形式的意義を實質化する。
漢文の被修飾形式動詞には「足可」などがある。

堯舜之道孝弟而已矣。子服堯之服誦堯之言行堯之行是堯而已。子服桀之服誦桀之言行桀之行是桀而已矣。孟子告子

五穀者種之美者也。苟爲不熟不如糞稗。夫仁亦在乎熟之而已矣。同

王翦曰大王必不得已用臣非六十萬人不可。史記王翦列傳

季氏富於周公而求也爲之聚斂而附益之。子曰非吾徒也。小子鳴鼓攻之可也。論語先進

語先進

魏人曰商君秦之賊秦彊而賊入魏弗歸不可遂內秦。史記商君列傳

の「足可」などがそうだ。「而已」は「のみ」と訓ずるが文法上は「而して已む」である。「而」は方法格で「已」は「而」に修飾されつゝ、實質に於ては補充される。「可」は動詞の上に在れば歸著形式動詞(第二頁)であるが右の様に動詞の下に在れば被修飾形式動詞だ。

寄生形式動詞

寄生形式動詞は當然其の補充語たるべき補充語が無く、本來自己の補充語でないのみか自己と直接の關係のないものへ寄生し、之を自己の補充語に利用して自己

の實質的意義の缺陷を充す形式動詞である。日本語の例で云へば、

- 1 雷が鳴り出した。すると電燈が消えて仕舞つた。
- 2 今日私は宿直です。けれども人に代つて貰ひます。
 - 3 甲 資格なしでは採用しますまいなあ。とせうなあ。
 - 4 笑ふ譯にも行きません。で私は黙つて居りました。
 - 5 御事情は明細に承知致した。して貴殿の御決心は如何でござる。

の「…」の類がそうだ。上の「…」は本來一つの斷句であつて「…」に對する補充語たるべきものではない。其れを「…」の方が勝手に利用するのである。他の形式動詞は何等か直接の關係の有る語がその補充語になるが、此の形式動詞にはさういふ補充語がない。

此等の形式動詞を接續詞と稱する人もあるが、苟も内包詞であつて敘述性の有るものは動詞である。接續したからとて接續詞といふ別の品詞にはならない。殊に③の「でせうなあ」の如きは接續もしない。又「すると」を「そうする」との「そう」の省略だと思ふ人もあらうが、「すると」は直接に「雷が鳴りだした」へ寄生するのであつて、そ

うなどといふ様な媒介を用ゐるものではない。
漢文の寄生形式動詞には「而」がある。

而 「而」は日本では「しかして」或は「しかうして」と讀む。「しかして」は「然爲てて」しかうしては「然くして」の音便だ。そう讀むと「而」が代動詞の様に聞えるが「然」の如く實質的意義が有るのではなくて、全然實質的意義が無いのであるから代動詞ではなくて形式動詞である。直譯すれば「して」であつて「然して」ではない。「而」の文法的意義を知るには「して」と讀んで見るが善い。「而」は前言に寄生して自己の形式性を實質化するものであるが、それに二種の用法が有る。

第一の用法は

開瓊筵以坐花、飛羽觴而醉月。李自春夜宴桃李園序

策扶老以流憩、時矯首而遊觀、雲無心以出岫、鳥倦飛而知還、景翳々以將入、撫孤

松而盤桓。陶淵明歸去來辭

蘇子愁然正襟危坐、而問客曰何爲其然也。蘇東坡前赤壁賦

の「而」の様に意義のまだ切れぬ前言○○○へ寄生し前言○○○の實質的意義を

借りて自己の意義の形式的空虚を補填する。「而」を「しかして」と讀むと代動詞の様に聞えて意味が重くなり過ぎるから單に「て」と讀むことが多い。併し「而」がなくて「もて」と讀む場合が澤山あるから「て」と讀んではもの足りない感じがする場合がある。文法的には「して」と讀んで見ると「而」の性質がよく分る。例へば

瓊筵を開いて以て花に坐し、羽觴を飛ばして而て月に酔ふ

といふ風に讀んで見るのである。「飛羽觴」は「而」がなくても既に「て」(方法格)の意義がある。唯それが不明確であるから「而」を用ゐて其れを明確にするのである。「飛羽觴」と「而」とは同じ事柄を言ふのである。「羽觴を飛ばして、そうして月に酔ふ」といふ風に「羽觴を飛ばして」の意義をまう一度別の語で云ふのが「そうして」(而て)である。唯「飛羽觴」は實質的意義は明瞭だが下へ續く意味(即ち「て」の意味)が不明瞭である。「而」の方は實質的意義は借物だが下へ續く意味「て」の意味は獨特の能力であるから、「而」を用ゐることは續きを明確にする所以である。

「而」が單に形式動詞であつて「然」の意義がなく代動詞でないことは代動詞「然」の下へ用ゐられることも分る。

夫楚兵雖彊天下負之以不義之名以其背盟約而殺義帝也然而楚王恃戰勝自
彊。史記黥布列傳

若此將軍之所長也然而衆勞卒罷其實難用。同淮陰侯列傳

夏育太史噉叱呼駭三軍然而身死於庸夫。同范雎列傳

この「然而」を日本讀て「然り而して」と讀むが代動詞が重なつて具合が悪い。併し漢文では「然」は代動詞で「而」は形式動詞であるから少しも可笑しくない。實は「然りてして」と讀むべきものであつたのである。尤も「然くして」と讀む人もある。

「而」は單に動詞の下へ使ふだけでなく名詞の下へも使ふ。但し名詞の下に「而」があるのは表示態名詞ではなくて叙述態名詞(第二章第一節)である。

然則管仲知禮乎曰……管氏而知禮孰不知禮。論語八佾

子曰人而不仁如禮何人而不仁如樂何。同

子曰士而懷居不足爲士矣。同憲問

子曰君子而不仁者有矣未有小人而仁者也。同

王立於沼上顧鴻雁麋鹿曰賢者亦樂之乎孟子對曰賢者而後樂此。孟子梁惠王

匹夫而有天下者德必如舜禹而又有天子薦之者。孟子萬章

右の例の「而」の上の名詞は皆單に「人管仲士」などの意ではなく「人であつて士であつて……」の意である。こゝにいふ風に名詞の「何々だ何々であつて」の意なるものを敘述態といふ。名詞が動詞の様に使はれる用法だ。

第二の用法は意義の既に斷れた語の下へ用ゐる。

怠者不能修而忌者畏人修。韓愈原毀

自其不變者而觀之則物與我皆無盡也而又何美乎。蘇東坡赤壁賦

是藏物者之無盡藏也而吾與子之所共適。同

江流有聲斷岸千尺山高月小水落石出曾日月之幾何而江山不可復識矣。同

憂者以喜病者以愈而吾亭適成。同喜雨亭記

この「而」は前斷句へ寄生して自己の形式的意義を實質化する。

第四節 副體詞の小分

副體詞に本副體詞、代副體詞、不定副體詞、形式副體詞の四種がある。それは名詞、動

詞に本代不定形式の四別の有るのと同じ理由である。

本副體詞

本副體詞は變動することのない一定した實質的意義を有する副體詞である。

- | | |
|--------|-------|
| 「諸」朋友 | 「凡」小人 |
| 「各」先生 | 「故」宰相 |
| 「翌」三年 | 「昨」十日 |
| 「兩」將軍 | 「雙」蛺蝶 |
| 「一」兵卒 | 「百」執事 |
| 「一」個人物 | 「一」本書 |

の「太字」の様なのがそうだ。一定の實質的意義を有し、彼我の立場に由つて意義が變ることが無い。

此等の本副體詞の中には他種の品詞としても用ゐられるものが多い。「諸」は名詞にもなり「各」は副詞とも名詞ともなり「凡」は副詞とも形容動詞ともなり「故」は名詞と

も形容動詞とも副詞ともなる。

數詞は一般に名詞ともなる。又度數を表はす副詞ともなる。こゝにいふ風に種々の品詞になるのは同じ原辭が種々の品詞となるので、詞としてはそれが副體詞であればその副體詞的性質は其の詞の本性であつて決して副性ではない。唯原辭として副性なのである。

數詞は一二三の様なのを基數といふ。そうして其れへ數へられる事物を區別する爲に「個」「本」「管」「枚」などの様な名詞を附して出來た「一個」「二本」「三管」「四枚」の様なものをも名數詞といふ。名數詞は大抵名詞であるが、又副體詞として一個人、二本書、三管筆、四枚果子などの様にも使ふ。

代副體詞

代副體詞は或る基準との關係に由つて事物の屬性を間接に指示する副體詞であつて、その場合々々變動する實質的意義を有するものである。

- | | | | | |
|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|----------------------------|
| 此 <small>コノ</small> | 斯 <small>コノ</small> | 茲 <small>ココ</small> | 時 <small>トキ</small> | 伊 <small>イ</small> ………〔近稱〕 |
|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|----------------------------|

其^ク 彼^ク 渠^ク 夫^ク …… [遠稱]
 厥^ク 是^ク …… [中稱]

等がその主なものである。此等は大概代副體詞たるのみならず代名詞又は代副詞としても用ゐられるが、其れは同一の原辭から種々の品詞が出来るのであつて品詞が種々に變化するのではなう。

此等が副體詞たる場合は日本讀は「このか」の「その」である。唯事物の位置を示すだけて事物を指示するのではない。代名詞たる場合は「これかれ」と讀み副詞たる場合は「こゝにこれそれ」と讀む。そうして此等が近稱、遠稱、中稱の三つに分たれることは代名詞に於けると同様である。

近稱 「此^{コノ}」は何れも近稱である。説話者が或る事物に就いて其の位置が自分の近くに在ることを示すものである。名詞へ冠して「此人^{コノ}斯道^ノ」などの様に使ふ。「此^{コノ}」は單純な「この」であつて特殊な意味はない。

此^{コノ} 心之所以合於王者何也。孟子梁惠王
 使^{コノ} 此^{コノ} 詔見於紹興之前可以無事讎之大恥使^{コノ} 此^{コノ} 詔行於隆興之後可以卒不世之

伐功今此詔與此虜猶俱存也悲矣。辛稼軒跋紹興親征詔草

「斯^{コノ}」は「此^{コノ}」よりは指示が稍不明確な場合が多く且つ多くはその物を美めていふ意がある。「我がこの」といふ位に自分へ近づけて最眞にする意がある。

斯^{コノ} 道也何道也曰斯吾之所謂道也。韓愈原道

今天下不遺斯民始早而賜之以雨。蘇東坡喜雨亭記

登斯樓也則有心曠神怡寵辱皆忘把酒臨風其喜洋洋者。范文正公岳陽樓記

噫微斯人吾誰與歸。同

斯謀斯猷惟我后之德。韓愈爭臣論

「茲^{コノ}時伊^ノ」なども「この」と讀む場合は近稱の代副體詞だ。

懷抱利器鬱々適茲土。韓愈送董邵南序

惟時守令有哲有愚。李泰伯袁州學記

雄雉于飛泄々其羽我之懷矣自貽伊阻。毛詩鄘風

遠稱 「彼^{コノ}夫^ノ」は何れも遠稱であつて説話者が事物に就きてその位置の自分へ遠くことを示すものである。

「彼」は單純な「か」であつて特殊の意味はない。

彼童子之師授之書而習其句讀者也。韓愈師說

詩云瞻彼淇澳。萋竹猗々。大學

「夫」は副詞の場合には「それ」と讀んでも意義は遠稱であつて副體詞では「か」である。「彼」と音が近い。「彼」は單純な「か」であるが「夫」は聞く人に注意を與へるために「そらあ」といふ風に用ゐる場合が多い。副詞の「夫」と同義だ。

子曰食夫稻衣夫錦於女安乎。曰安。曰女安則爲之。夫君子之居喪食旨不甘聞樂不樂居處不安故不爲也。今汝安則爲之。論語陽貨

蘇子曰客亦知夫水與月乎。逝者如斯而未嘗往也。盈虛者如彼而卒莫消長也。蘇東坡赤壁賦

聊乘化以歸盡樂夫天命復奚疑。陶淵明歸去來辭

「若夫」を普通「若し夫れ」と讀むが本當は「夫の……の若き」である。

若夫淫雨霏々連日不開陰風怒號濁浪排空日星隱曜山岳潛形商旅不行檣傾櫓摧薄暮冥々虎嘯猿啼登斯樓也則有去國懷鄉憂讒懼譏滿目蕭然感極而悲

者矣。范文正公岳陽樓記

至若春和景明波瀾不驚上下天光一碧萬頃沙鷗翔集錦鱗游泳岸芷汀蘭郁々青々而或長烟一空皓月千里浮光躍金靜影沈璧漁歌互答此樂何極登斯樓也則有心曠神怡寵辱皆忘把酒臨風其喜洋洋者矣。同上

の「若夫」至若を比較して見ても分る。「至若」を「至若夫」に改めることも出来るが「若し夫れ」と讀んでは讀み様がない。「夫」を「か」と讀めば「夫……猿啼が連詞的名詞となるが「それ」と讀めば連詞的動詞となる。

中稱 「其厥」是は皆中稱である。

「其」は前に云つた事物に就いて其の概念の内包を表はす代副詞であつて用法が三つある。

一「其」は事物の屬性を指示して他語を修飾する。

子曰不在其位不謀其政。論語泰伯

未嘗干之不可謂上無其人未嘗求之不可謂下無其人。韓愈與子襄陽書

「其位」は政を謀るべき地位だ。「其人」は干むるに足る人である。

二、「其」は事物の所有者を指示する。

三六

古之欲明明德於天下者先治其國。欲治其國者先齊其家。欲齊其家者先修其身。欲修其身者先正其心。欲正其心者先誠其意。大學

帝堯……其仁如天其知如神。十八史略五帝

「其國」の「其」は「古之欲明明德於天下者」を指し、「其仁」の「其」は帝堯を指すので「國仁」の所有者である。但し所有者の概念の内包を表はすだけであるから代名詞ではなく、代副體詞である。

三、「其」は事柄の主體を指す。

董生……適茲土吾知其必有合也。韓愈送董邵南序

增之去善矣不去羽必殺增。獨恨其不早耳。蘇東坡范增論

惟能前知其當然事至不懼。同篇論

夫以七國之強而驟削之其爲變豈足怪哉。同上

「其」は「それが」の意で下の——の事件の主體を表はしてゐる。「其」は主語の様になり下の——は敘述語の様になる。そうしてこの場合に注意すべきことは下の——

は動詞であるが「其」と——とより成る連詞の全體は大抵名詞になることである。「其」は主體を表はしても代名詞ではない。何となれば事物の概念の内包を表はすだけで外延を表はさない。又主體を表はしても主語ではなく連體語である。所謂修飾語である。「其」は之を品詞として副體詞と云ひ、連詞中に於ける相關的成分として連體語といふ。主語や副詞の様に下の動詞の意義の運用へ關係するのではなく、下の動詞の表はす意義其のものを限定するのである。副體詞は必しも名詞を修飾するものではない。動詞を修飾するものもある。日本語にいふ例の笑はせ給ふの例のは副體詞で連體語であるが動詞を修飾してゐる。動詞を修飾しても名詞を修飾しても意義そのものを修飾すれば副體詞で、意義の運用を修飾すれば副詞だ。「其」當然は「其れが」當然であるてはなく「其れが」に關する當然なることである。「其れが」當然なるである。「其れが」は主語であつても「其れが」は主語ではない。この説明が分らなければ「其」の眞の意義は分らない。「厥」は古い語である。「其」の第一義と同じだ。

相舊夫子廟。慨隘不足改爲。乃營治之東。厥土燥剛。厥位而陽。厥材孔良。殿堂門廡。

黜聖丹漆舉以法故。李泰伯袁州々學記

書曰若藥不眩眩厥疾不瘳。孟子滕文公上

「是は」と讀むが中稱である。日本語には第二近稱(その)はあるが中稱がない。中稱の字は第二近稱又は近稱に易へて讀むのである。代名詞や副詞では「これ」と讀むが、副體詞の場合も意義は同じである。

馬之千里者一食或盡粟一石。食馬者不知其能千里而食也。是馬也雖有千里之能。食不飽力不足才美不外見。韓愈雜說四

是歲十月之望步自雪堂將歸于臨臯。蘇東坡赤壁賦

太行之陽有盤谷……或曰是谷也宅幽而勢阻。韓愈送李愿序

周公之爲輔相其急於見賢也方一食三吐其哺方一沐三握其髮。當是時天下之賢才皆已舉用。韓愈復上宰相書

夫子至於是邦也必聞其政。求之與抑與之與。論語學而

中稱であるから「此」といふ程その位置をさめていふのではなから。「この」よりは「その」へ近いものである。

日本語では「あの」このが相對し又「この」そのが相對する。漢文では「彼此」が相對し又「此」が相對する。「此」に對する「是」は中稱を近稱に對せしめるのであつて日本語の第二近稱の代りになる。

(孟子)曰臣聞之胡斡曰王坐於堂上有牽牛而過堂下者王見之曰牛何之對曰將以斲鐘王曰舍之吾不忍其觶觶若無罪而就死地對曰然則廢斲鐘與曰何可廢也。以羊易之不識有諸(王)曰有之曰是心足以王矣……王說曰詩云他人有心予忖度之夫子之謂也夫我乃行之反而求之不得吾心夫子言之於我心有戚々焉。此心之所以合於王者何也。孟子梁惠王

の「是心」と「此心」との對用を見よ。孟子は王の心を指して「是心」といふ。王の心も孟子が之を論ずる場合は孟子の頭の中に在るから孟子が自分へ近いと見て「此心」と云ふことも出来るが孟子は王の心であるから自分へ近いと見ずに中稱「是」を用ゐた。日本語ならば「その心」を憐む汝の心である。王の方から云へば自分の心であるから「此の心」(牛を憐む此の心)である。

「是之時」「此之時」などを「この時」と讀むが下に「之」がある場合の「是」は代名詞であつて

代副體詞ではない。文法的に云へば、これの時である。

不定副體詞

不定副體詞は常に不定なる實質的意義を有する副體詞である。

一「何人

何時

「孰國

「孰地

「幾年

「幾世

「幾何人

「幾何年

二「若干人

「若干書

「某國

「某地

の「……」の類がそうだ。皆下の名詞を修飾する。その中には不定であつてもその定まることを豫想するもので之を疑問の不定副體詞と云ひ、は不定のまゝであるから之を不問の不定副體詞といふ。

これらの副體詞は大抵不定名詞又は不定副詞にも用ゐられる。

これらの副體詞は日本讀では副體詞にならないものが多い。「何人に就て言へば」「なんびとは全體が名詞、いかなる人のいかなるは動詞だ。「何の人」と云へば「何のは副體詞と云へよう。「いく年は全體で名詞だ。いくばく人のいくばくは副體詞である。「ぼう國は全體で名詞だ。「某の國」と云へば「某のは副體詞と云へよう。

形式副體詞

形式副體詞は實質的意義が無く唯副體詞としての形式的意義の有る副體詞である。

形式副體詞には「之」がある。後世の俗文及び今日の口語には「的」がある。「之」は形式名詞にもある。それは「これ」と訓ずる。形式副體詞の「之」は「或は「この」と訓ずる。形式副體詞の「之」には三種の用法がある。

「之」の第一用法 「の」と訓ずる場合の用法でこの場合は單純形式副體詞である。漢文の「之」は形式副體詞であるのに其の訓「の」は助辭であるから文法上の性質が非常に違ふ。だからその相違を考へなければならぬ。

まづ日本の「の」の性質を云はう。「の」は助辭であつて名詞(其の他の語の實質部)へ密著する。「の」は一概念としての抽象性が不十分である。抽象性としての獨立性が無い。上の詞から離して「の」だけの意義を概念的に分化することは出来ない。例へば「歸る人」を「歸るの人」といふ場合に「の」は「歸る」へ密著して「歸るの」といふ一詞を成すのである。「の」を「歸る」から離せば「の」は一概念を成さないから一詞ではない。「歸る」と「の」との間は密著して居つて他の語を挿むことは出来ない。これが「の」の性質である。

漢文の「之」は「それの」といふ様な、抽象性の獨立した概念を持つてゐる。固より意味は形式的であつて實質的意義は缺けてゐるから必ず上の詞から實質的意義を借りるのであるが、上の詞へ密著するものではない。「家の前と後に庭を作る」といふ様なことを近代の漢文で

設庭於屋宇之前之後

など云ふことが出来る。上の「之」は屋宇の直下に在るが、下の「之」は屋宇と離れてゐる。これ「之」に獨立性の有ることを證するものでなくて何であらうか。日本語で

は「庭の前庭の後」とは云へるが「庭の前、の後」と云ふ様なことは云へない。又日本語の「歸るの人」は漢文では「歸之人」である。「故郷へ歸るの人」と云ふ場合に漢文では

歸故郷之人

であつて「之」は「故郷」を隔て、^レ「歸」を受ける。故郷の人ではない、歸るの人である。「故郷」は唯「歸」の場所を示すものに過ぎない。「之」は「故郷」とは何の關係もないのである。之を辯ずる人は「之」は「歸」を受けるのではなく「歸故郷」の全體を受けるのであると云ふであらう。其れはそう云へる。併し「之」が單に連體格の記號たる助辭であるならば故郷といふ名詞を隔てずに「歸」といふ動詞に直附せらるべきである。英語の *is* は助辭であつて *return* へ直附されて *returning* となる。決して *return* と *ing* の間へ他語を挿まない。即ち「之」は日本語の「の」や英語の動詞へ附く *is* や名詞へ附く *s* の類ではなく寧ろ *is* に近いものである。併し *is* は前置詞であつて客語を統率する性質即ち歸著性があるが「之」は歸著性はない。故に「之」は前置詞或は後置詞ではなくて單純形式副體詞である。「歸故郷」といふ連詞的動詞は「之」に對して單に其の

缺く所の實質的意義を補充する單純な補充語であつて、之は單純にそれに因つて意義が補充される。

「之」は名詞を受ける詞である。「天下之人父母之恩」などは單詞的名詞を受けた例で「英雄豪傑之士」「義道德之說」などは連詞的名詞を受けた例だ。又「憂天下之心」「懷故郷之情」「天下を憂ふ故郷を懷ふ」は動詞の様であるが、これは動詞を名詞化したもので動詞性名詞で矢張名詞であるから、此の「之」はどこまでも名詞を受けてゐるのである。近世の文の「的」も同様である。

「之」の第一用法に次の三つがある。即ち其の用法の三種と同じだ。

一、他語の意義を修飾する。

- | | |
|------|--------|
| 天下之人 | 日本之都 |
| 孟春之風 | 仲秋之月 |
| 觀花之客 | 感慨悲歌之士 |
| 雪白之布 | 如雨之淚 |

後世の俗文では「的」を用ゐる。

二、相對的關係の對手を示す。

- | | |
|-------|------|
| 民之父母 | 一國之主 |
| 東山之上 | 赤壁之下 |
| 國家之力 | 猛火之勢 |
| 朋友之一人 | 豫想之外 |

これも近世の俗文は「的」を用ゐる。

三、作用の主體を表はす(主語の様に使ふ)。近世の文の「的」は此の用法がない。

- | | |
|-----------------------------------|--------|
| 增之欲殺沛公人臣之分也羽之不殺猶有君人之度也 | 蘇東坡范增論 |
| 陳涉之得民也以項燕扶蘇項氏之興也以立楚懷王孫心 | 同上 |
| 且義帝之立增爲謀主矣 | 同上 |
| 天下悲錯之以忠而受禍 | 同量錯論 |
| 昔禹之治水鑿龍門決大河而放之海方其功之未成也蓋亦有潰冒衝突可畏之患 | 同上 |

王之不王不爲也非不能也 孟子梁惠王

右の例の「之」を含んだ。●は作用の主體で下の——は其の作用である。但し。●は主語ではなくて連體語である。そうして。●と——とは共に一つの連詞を成すが、その連詞は大抵名詞になる。「増之欲殺沛公」は一つの名詞「羽之不殺」は一つの名詞である。併し名詞でない場合もある。

その名詞にならない場合は假定疑問感嘆の意の有る場合だけである。例へば

1 如古之無聖人、人之類滅久矣。韓愈原道

苟余行之、不迷、雖顛沛其何傷。同祭田横文

王明並受其福、王之不明、豈足福哉。史記屈原列傳

2 豈上之人無可援、下之人無可推歟、何其相須之殷而相遇之疎也。同與子襄陽書

當秦氏之失鹿、得一士而可王、何五百人之擾々而不能脫、夫子於劍鏑、抑所寶之、非賢亦天命之有常。韓愈祭田横文

3 神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣。史記伯夷傳

の——は(1)では假定(2)では疑問(3)では感嘆だ。

此の「之」が名詞の下へ附いて名詞と共に連體語となつて下の動詞に對して主語の

代りになる用法は全く「其」の用法の第三(第三頁)と同じだ。

此の「之」の用法は日本語の「の」と酷似してゐる。併し日本の「の」の用法は更に廣い。

月の出てたり 花の咲きぬ

月の善き夜 花の咲ける頃

などの「の」は「之」で譯することは出来なう。

「之」の第二用法 「この」と讀む。この場合には寄生形式副體詞である。

1 蝸與鸞鳩笑之曰、我決起而飛、捨榆枋時則不至、而控於地而已矣、奚以之九萬里而南爲、適莽蒼者三食、而反、腹猶果然、適百里者宿春糧、適千里者三月聚糧、之二蟲又何知、小知不及大知、小年不及大年、奚以知其然也。莊子逍遙遊

伊尹志在致君、卒肇商祀、張良志在報韓、卒成漢業、鄧禹志垂竹帛、卒興南陽、狄仁傑志復唐室、卒摧僭周、之數子者、志立於事、爲之先、志遂乎功、成之後。朱伯賢論志

2 其大塊之噫氣、其名爲風、是唯無作、作則萬竅怒呬、而獨不聞之、寥々乎。莊子齊物論
冷風則小和、飄風則大和、厲風濟則衆竅爲虛、而獨不見之調々、之刁刁乎。同

人之生也與憂俱生。壽者_○惜_○久_○憂_○不_○死_○。何_○之_○苦_○也。其爲_○形_○也亦遠矣。莊子至樂

(1)は下の名詞を修飾し(2)は下の動詞の表はす作用の主體を表はして、その意義の體に従屬する。此の用法は(1)も(2)も「之」の形式的意義を補充する補充語が無い。「之」は前言に寄生し、前言を利用して自己の形式的意義を實質化する。この用法は極めて稀に用ゐられた。

「之」の第三用法 矢張「この」と讀んで修飾形式副體詞である。自己の修飾する名詞に依頼して自己の意義を實質化する。

桃之天天、灼灼其華、_{コト}之子于歸、宜其室家。桃之天天、有蕢其實、_{コト}之子于歸、宜其家室。

桃之天々其葉蓂々、_{コト}之子于歸、宜其家人。毛詩周南

田車既好、四牡孔阜、東有甫艸、駕言行狩、_{コト}之子于苗、選徒囂々……_{コト}之子于征、有聞

無聲。毛詩小雅車攻

襄斜不容、_{コト}之子去何之、鳥道一千里、猿聲十二時、宮橋祭酒客、山木女郎祠、別後

同明月、君應聽_{コト}子規。三體詩三五雜

の「之子」の「之」は「子」を修飾するが矢張「子」を指すので「子」に由つて「之」の形式的意義が實

質化する。つまり西洋の定冠詞などと同じ性質のもので、前言に寄生するものではない。この用法は詩經には盛に用ゐてあるが其の後の書には用ゐてあるのは甚だ稀である。

第五節 副詞の小分

尋常副詞と連名性副詞

副詞は他の概念の運用に従屬すべき屬性概念を表はすものであるから、其の本性として必ず他詞の運用に従屬する。然らばその従屬する所の他詞とは何であるかといふと、大抵は動詞であるが、又他の副詞又は名詞である場合もある。之に因つて副詞は尋常副詞と連名性副詞の二種に分たれる。

尋常副詞は専ら動詞又は敘述態名詞に従屬する副詞である。例へば

1 豫知其然、我嘗論之

將歸故郷、未悟其非

屢行之

再言之

勿必信其言

蓋爲天下笑

2 年漸長

益疎世故

道稍遠

風頗烈

3 舜目蓋重瞳子

子誠齊人也

秦歟漢歟將近代歟

臣是酒中仙

の||は皆副詞であるが(1)は動作動詞の上に從屬し(2)は形容動詞の上に從屬し(3)は敘述態名詞の上に從屬してゐる。

連名性副詞は表示態名詞の上に從屬し得る副詞である。そうして必ずしも名詞へ從屬するばかりでなく又副詞及び動詞へ從屬する場合もあるものである。

不求其端不訊其末唯怪之欲聞

韓愈原道

齊侯伐萊萊人使正與子路夙沙衛以索馬牛皆百匹

左傳襄二

季子使其乘之人以其役邑入者無征不入者倍征孟氏使半爲臣若子若弟

同十一

且家人父子尚不能以此自克況號爲君臣者乎

柳子厚桐葉封弟辨

況當陵者豈易爲力哉

李陵答蘇武書

の||は皆下の名詞||へ從屬してその運用を調節してゐる。名詞へ從屬しても名詞の意義の實體へ從屬するのではなく名詞の意義の運用へ從屬するのであるから副體詞ではなくて副詞である。

これらの副詞は勿論動詞へも從屬し得る。又唯於其行也有未可者の唯などの様に副詞前置詞の上へ從屬する場合もある。

連名性副詞は日本語にも英語にも有る。例へば直ぐ隣^{まう}一年^{たつた}百圓^{僅か}十里^{Even a child}などの様に使ふ。

修飾性副詞と補充性副詞

凡そ詞が他の詞へ從屬するのに修飾と補充との二種がある。修飾とは單に他詞の意義を詳密にすることをいふ。其れが無くても從屬される詞の意義の完備不完備に關係のないものである。例へば人靜に歩く道甚だ遠しの靜に甚だの類は下の歩く遠しに對して修飾である。これが有るに由つて下の歩く遠しの意味が

詳細にはなるが、これが無くても別段意義に缺陷を生ずることはない。「人歩く道遠し」だけでも意義が具備してゐる。補充とは他詞の意義の缺陷を補ふことで、此れが無ければ下の語の意義が完備しない。例へば「風靜になる」船出帆すの「靜」に出帆が「なる」すに對する類だ。「なる」すには意義に缺陷があるのを上の「靜」に出帆がそれを補つてゐる。「風なる船す」だけでは意義を成さない。

□副詞は他詞へ從屬してその意義の運用を調節する詞であるが、その從屬には修飾と補充との二種がある。副詞を分けて修飾性補充性の二つとするのはその爲である。

修飾性副詞は専ら他詞の意義の運用を修飾する副詞である。

仰之彌高、鑽之彌堅。 論語子罕
如水益深、如火益熱。 孟子梁惠王
文王既沒、文不在茲乎。 論語子罕
苟志於仁矣、無惡也。 同里仁
直不百步耳、是亦走也。 孟子梁惠王

四方萬國惟同、鶴於唐最親、奉職尤謹。 韓愈送殷員外序
吾嘗論、義帝天下之賢主也、獨遣沛公入關、不遣項羽。 蘇東坡范增論

のの類がそうだ。皆下ののの意義の運用を修飾してゐる。修飾性副詞は決して他詞の意義の缺陷を補充することはないものである。

□補充性副詞は他詞の意義を修飾する場合もあるが、又他詞の意義の缺陷を補充する場合の有るものである。

一方其破荊州下江陵、順流而東也、舳艫千里、旌旗蔽空、醴酒臨江、橫槊賦詩、固一世之雄也、而今安在哉。 蘇東坡赤壁賦

孟子見梁襄王、出語入曰、望之不似人君、就之而不見所畏焉、卒然問曰、天下惡乎定、吾對曰、定于。 孟子梁惠王

歸去來兮、請息交以絕遊、世與我而相遺、復駕言兮、焉求。 陶淵明歸去來辭

閑中帝子今何在、檻外長江空自流。 唐詩選王勃

今者薄暮、舉網得魚、巨口細鱗、狀如松江之鱸、顧安所得酒乎。 蘇東坡後赤壁賦

飲且食兮、壽而康、無不足兮、奚所望。 韓愈送李愿序

美服患人指高明逼神惡今我遊冥々弋者何所慕唐詩選張九齡

下馬飲君酒問君何所之唐詩選王維

或問諫議大夫陽城於愈可以爲有道之士乎哉韓愈爭臣論

の「安惡焉奚何或」の類がそうだ。右の中(一)は下の——に對して其の客體を表はして之を提示し、(二)は下の——に對して其の主體を表はして之を提示してゐる。

「安在」は「在乎何在乎何處」の意である。「何處」は名詞だが「安」は副詞で「何處」の内包的意義だけを有する。

「惡乎定」は「定於何處」の意であるから「惡」は「定」の客體を表はす。「惡乎」の「乎」は感動詞である。「焉求」は「求於何の義」で「焉」は「求」の客體だ。

「安所得酒」は「何處是所得酒」の義即ち「何處が酒の得場所だ」といふ意で「安」は「何處が」の意だから主體だ。

「奚所望」は「何が望だ」の意「何所慕」は「何がその慕ふ所か」の意。

「何所之」は「何處が行き先だ」の意。

「或問」は或る人が問ふの意で「或」は主語だ。

これらの副詞は右の例の様に主體客體を表はし得るものである。併し勿論修飾

にも使はれる。

副詞の四種

副詞を分けて本副詞、代副詞、不定副詞、形式副詞の四種とする。この四別は副詞だけてはない。名詞にも動詞にも副體詞にも皆本、代、不定、形式の四種が有る。

本副詞

本副詞は或る定まつた實質的意義を直接に表示する副詞である。例へば

將 <small>マサニ</small>	且 <small>マサニ</small>	方 <small>マサニ</small>	正 <small>マサニ</small>	卽 <small>ソナヘテ</small>	乍 <small>カタマテ</small>	忽 <small>タチマテ</small>	現 <small>マシクシ</small>
嘗 <small>カマツテ</small>	曾 <small>カマツテ</small>	業 <small>マサニ</small>	竟 <small>ツヒニ</small>	卒 <small>ツヒニ</small>	終 <small>ツヒニ</small>	遂 <small>ツヒニ</small>	夙 <small>イササカ</small>
潮 <small>ヤカニ</small>	轉 <small>マシクシ</small>	益 <small>マシクシ</small>	滋 <small>マシクシ</small>	愈 <small>イカク</small>	彌 <small>イカク</small>	稍 <small>シヅカニ</small>	聊 <small>イササカ</small>
毫 <small>ホトシシ</small>	極 <small>ホトシシ</small>	頗 <small>シヅカニ</small>	最 <small>ホトシシ</small>	尤 <small>ホトシシ</small>	孔 <small>ホトシシ</small>	僅 <small>シヅカニ</small>	聊 <small>イササカ</small>
苟 <small>シヅカニ</small>	姑 <small>シヅカニ</small>	且 <small>シヅカニ</small>	殆 <small>ホトシシ</small>	幾 <small>ホトシシ</small>	大抵 <small>ホトシシ</small>	一切 <small>ホトシシ</small>	略 <small>ホトシシ</small>
粗 <small>ホトシシ</small>	概 <small>ホトシシ</small>	悉 <small>ホトシシ</small>	盡 <small>ホトシシ</small>	皆 <small>ホトシシ</small>	咸 <small>ホトシシ</small>	凡 <small>ホトシシ</small>	約 <small>ホトシシ</small>

無慮	偶	適	會	獨	唯	祇	惟
只	管	翅	具	密	竊	屢	亟
數	尙	猶	交	互	送	更	再
敢	肯	却	固	素	逆	豫	果
動	坐	試	蓋	抑	若	儻	雖
縱	必	寧	決	斷	洵	實	允
信	誠	孚	幸				

などの類がそらだ。

副詞たる文字は訓に於ても大抵は副詞である。併し中には「雖」などの様に訓では副詞にならないものがある。「雖」は「縱」と似た詞であつて副詞であるが「縱」の様に假定ばかりでなく確定の場合があるから古より「た」と「ひ」と訓ぜずに「いへども」と訓じてゐる。又「いふとも」とも訓む。嚴密に言へば假定ならば「云ふとも」で確定ならば「云へども」であるべきだが近頃は總べて「いへども」と讀む人が多い。

一 民欲與之偕亡雖有臺池鳥獸豈能獨樂哉。 孟子梁惠王

ニ 臣聞不知而而言不智知而不言不忠爲人臣不忠當死言而不當亦當死雖然臣願悉言所聞。 韓非子勢頭

の——を「臺池鳥獸有り」といふとも然りといへどもと訓ずる。直譯すれば「は、雖ひ臺池鳥獸有りとも」であるが「は」は確定だから「た」と「ひ」ではいけない。併しこの直譯に因つて「雖」が副詞であることは解るであらう。又反對に訓に副詞を用ゐても原文では副詞でないものもある。例へば「願庶幾などは」願はくは「庶幾はくは」と動詞性副詞として訓ずる場合が多いが原文では動詞である。

1 張儀懼誅乃因謂秦武王曰儀有愚計願效之。 史記張儀列傳

王曰吾憚不能進於是矣願夫子輔吾志明以教我。 孟子梁惠王

2 臣竊爲大王計莫如與秦王遇於澠池而相見而口相結請案兵無攻願大王之定計。 史記張儀列傳

夫從人飾辯虛辭高主之節言其利不言其害卒有秦禍無及爲已是故願大王之

孰計之。 同

1 百姓聞王鐘鼓之聲管籥之音舉欣々然有喜色而相告曰吾王庶幾無疾病與何以能鼓樂也。孟子梁惠王

2 余博覽乎天下曷有庶幾乎夫子之所爲死者不復生嗟余去此其從誰。韓愈祭田橫文
莊暴見孟子曰暴見於王王語暴以好樂暴未有以對也曰好樂何如孟子曰王之好樂甚則齊國其庶幾乎。孟子梁惠王

の[1]の「願庶幾」は副詞かとも疑はれるが[2]の例に由つて其れが動詞であることが分る。[2]の「願」の下の「は之」といふ字が有るから動詞性名詞となつて「願」に對して客語を成し「願」は意義が終止的である。[2]の「は上」の「乎」に由つて客語であることが示され同時に「庶幾」が終止的である。これらから推して[1]のも副詞でないことが判る。されば[1]の訓は「願はくは之を效さむ願はくは夫子吾が志を輔けて明に以て我を教へよ」と讀むのは意譯である。直譯は「願ふ、之を效さむことを願ふ夫子吾が……教へむことを」である。

代副詞

代副詞は或る基準を設けその基準との關係に由つて指示的に間接に或る屬性概念を表示する副詞であつて、其の場合場合に因つて異なる實質的意義を有するものである。

一 自躬

ニ夫 其 厥 是 惟 維 伊 時 茲 侯 之
ニ此 斯 茲 爰 曰 言 之 于 越 安 案 焉

等がそらだ。(一)は「みづから」と讀み(二)は「それ」或は「これ」と讀み(三)は「こゝに」と讀む。

自躬 この二つは動作を基準として其の主體の概念の内包を指示するものである。これが若し外延をも含めば代名詞となるので「己」は即ちそれである。

1 増大怒曰天下事大定矣君王自爲之願賜骸骨歸卒伍。蘇東坡范增論
既數日復自奮曰無所能人乃宜以盲廢有所能人雖盲當廢於俗輩不當廢於行古人之道者。韓愈代張籍與李浙東書

2 退自悲不幸兩日不見物無用於天下胸中雖有知識家無錢財寸步不能自致。同
何れも下の動詞「爲奮悲致」の表はす動作の主體を指すのであるが[1]では單に主體

を指し〔2〕では客體と一致する主體を指す。即ち〔1〕は自分が爲し自分が奮ふのであるが〔2〕は自分が自分を悲み自分が自分を致すのである。〔2〕は客語の様に見えるが、そうではない。客體をも表はすが其れは間接に表はすのであつて直接には「悲致」といふ動作の仕方を表はすのである。自分で悲む意、自分で致す意である。

今有「一人焉、父病、躬進藥而不嘗、又有「一人焉、父病而不躬進藥、而二父皆死、又有「一人焉、操刃以殺其父。」歐陽修春秋論

「自」は受動的でなく自發的である意、他人の動作を待たずに自分から進んでする意である。「躬」は力行的である意で動作を厭はない意だ。

「みづから」と讀む詞には「親」がある。これは親しくする意で直接にすることをいふので本副詞である。日本語の「みづからは」身つ柄で「つは」の意、柄は「山からし尊か
るらし」などの「から」て性質の意、随つて其の性質から分派する或るものを指すから「よりの意に通ふ。「手づから」「口づから」などと同じ云ひ方である。又「自」を「おのづから」「己」の柄と訓ずる場合があるが、それは自然の意で本副詞である。

夫「夫は」それと讀む。これから自分が言はうと思ふことを提出して之を豫示

する語である。日本語で言へば「いや何だよ」位な意だ。文の途中にも使ふが往々劈頭に用ゐる。

夫「天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若夢、爲權幾何。」李太白春夜宴宴桃李園序

夫「衡人者皆欲割諸侯之地以予秦。」史記蘇秦列傳

夫「以大王之賢、挾強韓之兵、而有牛後之名、臣竊爲大王羞之。」同

夫「盲者業專於藝、必精。」韓愈代張籍與李浙東書

夫「以大王之賢、與齊之疆、天下莫能當、今乃西面而事秦、臣竊爲大王羞之。」且夫韓

魏之所以重畏秦者、爲與秦接境壤界也。」史記蘇秦列傳

且夫「天地之間、物各有主、苟非吾之所有、雖一毫而莫取、惟江上之清風、與山間之

明月。」蘇東坡赤壁賦

斷句の始て「夫」だけならば「いや何だよ」と解し、且「夫」は「其れに何だよ」と解すれば善い。日本語で「何だよ」と云ふのはこれから云はうとする所のものを暗示するのである。

其「其」は「矢張、それ」と讀む。日本語では代名詞と副詞とてアクセントが違ふ。

「それは代名詞で、それは副詞である。漢文の「其」はこれから云はうと思ふことを指示する副詞だ。

然而周公求之如此其急。韓愈復上宰相書

豈特吐哺握髮之勤而止哉。惟其如是。故于今頌成王之德而稱周公之功不衰。同是以忘其疎愚之罪而有是說焉。閣下其亦憐察之。同應科日時與人書

古之所謂鄉先生歿而可祭於社者其在斯人歟。其在斯人歟。同送楊少尹序

是可爲天下常法乎。不可常者其聖人之法乎。歐陽修縱囚論

執策而臨之曰天下無良馬。嗚呼其真無馬邪。其真不識馬邪。韓愈雜說四

仲尼曰始作俑者其無後乎。爲其象人而用之也。如之何。其使斯民飢而死也。孟子

梁惠王上

冉子退朝。子曰何晏也。對曰有政。子曰其事也。有政雖不吾以。吾其與聞之。論語子路

「其」と「夫」との相違は左の如くである。
一「夫」は題目語よりも上に置かれる。即ち斷句の全體を修飾する。「其」は主語より下へ置かれる。主語を修飾せずには敘述語だけを修飾する。

二「夫」は他人の知つてゐることをいふのである。「御承知の通り」とか「誰も知る通り」とかいふ意味がある。自分だけの意見をいふのではない。論理學でいふ大前提たるものを修飾する。題目語より上に在るのは其の爲だ。「其」は或る問題に就いて自分の考をいふので、論理學でいふ斷案を修飾する。既存の問題に就いていふのであるから主語よりも下へ置かれるのだ。

夫欲治國平天下者必先修其身齊其家……………大前提

今君有治國平天下之志……………小前提

君其先修其身齊其家……………斷案

其れと定まつて他ではないといふ自分の考を指示するのである。「そら何だ其れだ」といふやうな意味がある。

三「夫」は客觀的で感動の意はないが「其」はやゝ主觀的で感動の意がある。

副體詞では「夫」は「かの」とよみ「其」は「その」と讀む。

是「是」は「これ」と讀む。事物をこれと指して「偏に」といふ意を表はす。

1 愈今者惟朝夕芻米僕賃之資是急。不過廢閣下一朝之享而足也。韓愈與于襄陽書

2 惴々焉惟不得出大賢之門下是懼。同復上宰相書

- 3 又酌而祝曰使大夫常無變其初無務富其家而飢其師無甘受佞人而外敬正士無味諛言惟先生是聽以能有成功保天子之寵命同送石處士序
- 4 魯頌曰戎狄是膺荆舒是懲周公方且膺之孟子滕文公上
- 5 維此良人弗求弗迪維彼忍心是顧是復詩大雅蕩
- 6 東人之子職勞不來西人之子粲々衣服舟人之子熊羆是裘私人之子百僚是試詩小雅谷風

右の[1][2][3]では「惟」と「是」が對用されてゐるから「是」の「偏に専ら」といふ意味が強い。[4][5][6]の「是」も「偏に専ら」といふやうな意味は有るが[1]よりは軽い。

惟維伊時茲侯之厥 これら皆「厥」を「それ」と讀む外皆「これ」と讀む。唯これだけといふ意を表はす。併し「たゞ」といふ意味は著しい場合と著しくない場合とある。右の例の「是」と對用された「惟」は[1]では「たゞ」の意が軽いから「これ」と讀むが[2][3]では「たゞ」の意が強いから「たゞ」と讀む。「維伊は「たゞ」の意は「惟」より強い。今次へ古例を擧げる。

文王在上於昭于上周雖舊邦其命維新 詩大雅文王

葛之覃兮施于中谷維葉萋々黃鳥于飛集于灌木其鳴喈々詩周南

維天之於時亦然韓愈送孟東野序

惟上帝不常作善降之百祥作不善降之百殃爾惟德罔小萬邦惟慶爾惟不德罔大墜厥宗尙書伊訓

王城之東晉公所廡鬱々三槐惟德之符嗚呼休哉蘇東坡三槐堂銘

蓼々者莪匪我伊蒿哀々父母生我劬勞詩小雅谷風

鳧鷖在渚公尸來燕來處爾酒既清爾殽伊脯公尸燕飲福祿來下同大雅生民鳧鷖

一雨三日伊誰之力民曰太守太守不有歸之天子蘇東坡喜雨亭記

寄言全盛紅顏子應憐半死白頭翁此翁白頭真可憐伊昔紅顏美少年唐詩選七言古

仲虺乃作誥曰嗚呼惟天生民有欲無主乃亂惟天生聰明時又有夏昏德民墜塗

炭天乃錫王勇智表正萬邦纘禹舊服茲率厥典奉若天命商書仲虺

嗚呼先王肇修人紀從諫弗拂先民時若 同伊訓

俾予一人輯寧爾邦家茲朕未知獲戾于上下同湯誥

商之孫子其麗不億上帝既命侯于周服毛詩大雅文王

殷商之旅其會如林矢于牧野維予侯興。同

厥或誥曰羣飲汝勿佚。周書酒誥

之屏之翰百辟爲憲不戢不難受福不那。毛詩小雅甫田

謀臧不從不臧覆用我視謀猶亦孔之邛滄滄訛訛亦孔之哀。同小雅節南山

此斯茲爰曰云言越于安案焉。こゝにと讀む。そこにその場合にすなはちといふ様な意だ。

是故君子先慎乎德。有德此有人。有人此有土。有土此有財。有財此有用。禮記大學傳

人皆有不忍人之心。先王有不忍人之心。斯有不忍人之政矣。孟子公孫丑上

曾子言曰鳥之將死其鳴也哀人之將死其言也善君子所貴乎道者三動容貌斯

遠暴慢矣正顏色斯近信矣出辭氣斯遠鄙倍矣。論語泰伯

敷貴敷前人受命茲不忘大功。周書大誥

爰有寒泉在浚之下。毛詩邶風凱風

詩云王赫斯怒爰整其旅以遏徂莒以篤周祜以對于天下此文王之勇也文王一

怒而安天下之民。孟子梁惠王下

秋日淒淒百卉具腓亂離瘼矣爰其適歸。詩小雅谷風四月

摯仲氏任自彼殷商來嫁于周曰嬪于京乃及王季維德之行。毛詩大雅文王

子反曰日云莫矣寡君須矣吾子其入也。左傳成十二

凡我同盟之人既盟之後言歸于好。孟子告子下

今爾奔走臣我監五祀越惟有胥伯小大多正爾罔不克臬。周書多方

弁彼鸞斯歸飛提々民莫不穀我獨于罹。毛詩小雅節南山

般之口案以中立無有所偏而爲縱橫之事偃然案兵無動以觀夫暴國之相粹也。

案平政教審節奏砥礪百姓爲是之日而兵刺天下之勁矣。荀子王制篇

分議者延延而交儆者路路焉可以長生保國。墨子親士

不定副詞

不定副詞は不定なる實質的意義を有する副詞である。

- 何 奚 胡 曷 害 詎 假 侯 惡
- 安 焉 烏 奈何 那 寧 庸 豈

或

等がそうだ。その中或は不問副詞で他は皆疑問副詞である。

何「何は疑問名詞にも疑問副體詞にも疑問動詞にも用ゐられるが多くは疑問副詞である。そうして状態場所事物時を表はすものである。

1 公山弗擾以費畔召子欲往子路不説曰未之也巳ナケムニク何必公山氏之也ナニシ論語陽貨

子曰小子何莫學夫詩詩可以興可以觀可以羣可以怨邇之事父遠之事君多識於鳥獸草木之名ナニシ同陽貨

抑王興甲兵危士臣構怨於諸侯然後快於心與王曰否吾何快於是將以求吾所大欲也ナニシ孟子梁惠王上

2 予欲有問乎若何思何慮則知道何處何服則安道何從何道則得道ナニシ莊子知北遊

子路曰是稷々何爲者邪ナニシ同則陽
蘇子愀然正襟危坐而問客曰何爲其然也ナニシ蘇東坡前赤壁賦

有薦石先生者公曰先生何如ナニシ韓愈送石處士序
今王鼓樂於此百姓聞王鐘鼓之聲管籥之音舉欣欣然有喜色而相告曰吾王庶

幾無疾病與何以能鼓樂也ナニシ孟子梁惠王下

3 老聃曰汝將何始曰始於齊ナニシ莊子則陽
芴冥無形變化無常神與生與天地竝與神門往與芒乎何之忽乎何適ナニシ同天下

下馬飲君酒問君何所之君言不得意歸臥南山陲但去莫復問白雲無盡時ナニシ唐詩
選一王維

4 何當共剪西窗燭卻話巴山夜雨時ナニシ同八李商隱夜雨寄北

(1)は理由(2)は事物(3)は場所(4)は時である。事物や場所を表はす場合は副詞でなくて名詞かとも見える。名詞らしく感ずる理由は二つある。第一は事物や場所を表はすのは作用の客體を表はすのであるからである。従來の習慣として作用の客體を表はすものは名詞に限り副詞は決して客體を表はさないと考へられて居た。併し客體を表はすことは名詞に限るのではない。副詞が名詞と異なるはその意義が内包的なるにある。副詞でも客體を表はさないことはない。この理由に由つて副詞でないと思ふのは誤である。第二の理由は「何の訓なにづく」が日本語で名詞であるからである。併し訓は必

しも眞の直譯でないから訓に由つて原文の品詞を定めることは出来ない。「なに
いづく」と讀まずに「なんぞいづくんぞ」と讀めば副詞として受取れる。前例は

・ 何ぞ思ひ何ぞ慮らば則ち道を知らむ。何ぞ居り何ぞ服せば則ち道に安ん
ぜむ。何ぞ従ひ何ぞ道とせば則ち道を得む。

・ 3 芒乎として何くんぞ之き、忽乎として何くんぞ適く。

と言へば善い。餘り直譯臭いから普通は「何をか思ひ何をか慮り何くんぞ適く」何
くんぞ適く」と讀むのである。

「何」は本來は内包詞である。されば副詞(何ぞ)副體詞(何の)動詞(何ん)として用ゐるの
が本來である。唯特に外延化して用ゐた場合に名詞になる。その特に外延化さ
れたことを示すには動詞或は前置詞の下へ客語として用ゐる。例へば

其弟子曰、向之人爲何者邪、夫子見之何故變容失色、終日不自反邪。莊子天地

文承問、問其父嬰曰、子之子爲何、曰爲孫、孫之子爲何、曰爲玄孫、玄孫之孫爲何、曰

不能知也。史記孟嘗君列傳

王曰、先后其謂我何。左傳僖廿四

閣下濟之以已絕之年、賜之以既盲之視、其思輕重大小、籍宜如何報。韓愈代張籍與李
浙東書

小子後生、於何考德而問業。韓愈送溫處士序

こういふ風に動詞や於の下に用ゐればその特に名詞として用ゐたことを示す力
が有る。併しこれは特に名詞として用ゐたのである。但し特に歸著性の明確な
語でなければこういふ風に「何」の上には用ゐられない。「爲謂云如於」等少數の語に
限るのである。

「何爲は」何すれぞと讀むが、何ぞ爲ての意である。「何如は」いかんと讀むが、何にか如
る「何にか似る」の意である。「何如と如何との別は第三編第二章第四節に説く。

「何が副詞であるかどうかを考へるには英語の「where, whence」や次の「奚」の用法が參
考になる。

奚 「何」と全く同じである。

1 乃葛伯仇餉、初征自葛、東征西夷、怨、南征北狄、怨、曰奚獨後予、攸徂之民、室家相慶、
曰後予、后、后来其蘇。商書仲虺之誥

今也制民之產、仰不足、以事父母、俯不足以畜妻子、樂歲終身苦、凶年不免於死亡。

此惟救死而恐不贖、奚暇治禮義哉。孟子梁惠王上

佞人之心、翦々者又奚足以語至道。莊子在宥

彼唯人言之惡聞、奚以夫譎譎爲乎。同至樂

2 諄芒將東之、大壑適遇苑風於東海之濱、苑風曰子將奚之。曰將之。大壑。同天地

齧缺遇許由曰子將奚之。曰將逃堯。同徐無鬼

3 孔子西遊於衛、顔淵問師金曰以夫子之行爲奚如。師金曰惜乎。而夫子其窮哉。同

天運

樂正子入見曰君奚爲不見孟軻也。曰或告寡人曰孟子之後喪踰前喪。是以不往見也。孟子梁惠王下

彭陽曰公閱休奚爲者邪。曰冬則獨鼈於江夏、則休乎山樊。莊子則陽

顔回見仲尼請行。曰奚之。曰將之。衛。曰奚爲焉。同人問世

小童曰夫爲天下者亦若此而已矣。又奚事焉。同徐無鬼

夫子出於山、舍於故人之家、故人喜命豎子殺鴈而烹之、豎子請曰其一能鳴其一

不能鳴、請奚殺。主人曰殺不能鳴者。同山木

天下有至樂、無有哉。有可以活身者、無有哉。今奚爲奚據、奚避、奚處、奚就、奚去、奚樂

奚惡。同至樂

飲且食兮、壽而康、無不足兮。奚所望。韓愈送李愿序

「何」と全く同じだ。(1)は理由、(2)は場所、(3)は事物である。事物を表はしても事物の

概念の内包だけを表はすから副詞なのである。この用法を觀れば「何が副詞であ

る」ことも肯かれると思ふ。「奚」は名詞にも副體詞にもなる。

イ 平公問、此道奚出。韓非子十過

ロ 今予問乎、若若知之、奚故不近。莊子知北遊

齧缺遇許由曰子將奚之。曰將逃堯。曰奚謂邪。莊子徐無鬼

(4)の「は」は名詞で、(5)の「は」は副體詞だ。

胡 理由や状態や場所を表はす。

1 嗚呼弗慮、胡獲弗爲、胡成、一人元良、萬邦以貞。商書太甲

羣公先正、則不我助、父母先祖、胡寧忍予。毛詩大雅蕩雲漢

浮遊乎萬物之祖物而不物於物則胡可得而累邪。莊子山木

田原不遇歲事君不遇世實於鄉里遂於州部則胡罪乎天。休惡遇此命也。同達生

2 已矣乎寓形宇內復幾時曷不委心任去留胡為遑遑欲何之。陶淵明歸去來辭

3 謀之其臧則具是違謀之不臧則具是依我視謀猶伊于胡底。毛詩小雅節南山小晏

(1)は理由で(2)は事物(3)は場所だ。

曷 理由、場所及び時を表はす。

1 書曰天降下民作之君作之師惟曰其助上帝寵之四方有罪無罪惟我在天下曷敢有越厥志。孟子梁惠王下

予曷其不于前寧人圖功攸終天亦惟用勤茲我民若有病予曷敢不于前寧人攸受休畢。周書大誥

2 難者曰曷為盾復見于經許悼公曷為書葬曰弑君之臣不見經此自三子說爾果聖人法乎。歐陽修春秋論

3 嘉穀六穗我稽曷蕃非唯雨之又潤澤之非唯濡之汜專護之。史記司馬相如列傳
嗚呼曷歸予懷之悲萬姓仇予予將疇依。夏書五子之歌

4 夏王率遏衆力率制夏邑有衆率意弗協曰此日曷喪予及汝皆亡夏德若茲今朕必往。商書湯誓

何求為我以戾庶正瞻卬昊天曷惠其寧。毛詩大雅蕩雲漢

君子于役不知其期曷其至哉。同王風于役

(1)は理由で「なんぞ」と讀む。(2)は事物で「なん」と讀む。(3)は場所で「いづくに」と讀む。(4)は時で「いつか」と讀む。

害 時を表はす。「曷」の時を表はすのと同じだ。

湯誓曰時日害喪予與女皆亡民欲與之偕亡雖有臺池鳥獸豈能獨樂哉。孟子梁惠

王上

詎 或は「距鉅渠」などとも書くが同音であつて同じ語である。單獨にも用ゐるが多くの「庸豈何寧」などと共に用ゐる。

樓前相望不相知陌上相逢詎相識。唐詩選七言古長安古意

將執而不化外合而內不訾其庸詎可乎。莊子人間世

吾惡乎知之雖然嘗試言之庸詎知吾所謂知之非不知邪庸詎知吾所謂不知之

非知邪。同齊物論八

相與吾之耳矣。庸詎知吾所謂吾之乎。同大宗師

凡人之鬪也。必以其惡之爲說。非以其辱之爲故也。今俳優侏儒狎徒罵侮而不鬪者。是豈鉅知見侮之爲不辱哉。荀子正論篇

儻不得已而遂至於用兵。則我豈遽出虜人下哉。胡澹菴上高宗封事

先生以鬼神爲明知能爲禍福人哉。爲善者富之爲暴者禍之。今吾事先生久矣。而福不至。意者先生言有不善乎。鬼神不明乎。我何故不得福也。子墨子曰。雖子不得

福。吾言何遽不善。而鬼神何遽不明。墨子公孟

蘇君之時。儀何敢言。且蘇君在。儀寧渠能乎。史記張儀列傳

假「何」と同じだ。同音で通ずるのである。

倬彼雲漢爲章于天。周王壽考。假不作人。詩大雅文王

侯「なんぞ」と讀む。

萬物熙々懷而慕思。名山顯位望君之來。君乎君乎。侯不邁哉。史記司馬相如列傳

右の二つは普通の文には用ゐない。

惡 場所と理由を表はす。

1 孟子見梁襄王出語人曰。望之不似人君。就之而不見。所畏焉。卒然問曰。天下惡乎定。吾對曰。定于上。孟子梁惠王上

敢問夫子惡乎長。曰。我知言。我善養吾浩然之氣。同公孫丑上

東郭子問於莊子曰。所謂道惡乎在。莊子曰。無所不在。莊子知北遊六

道惡乎隱而有真僞。言惡乎隱而有是非。道惡乎往而不存。言惡乎存而不可。同齊物論三

2 王無異於百姓之以王爲愛也。以小易大。彼惡知之。王若隱其無罪而就死地。則牛

羊何擇焉。孟子梁惠王上

王請無好小勇。夫撫劍疾視曰。彼惡敢當我哉。此匹夫之勇敢。一人者也。王請大之。

同梁惠王下

獸相食。且人惡之。爲民父母。行政不免於率獸而食人。惡在其爲民父母也。同。上

今休歎啓寡聞之民也。吾告以至人之德。譬人若載鼃以車馬。樂鷄以鐘鼓也。彼又

惡無驚乎哉。莊子達生十三

第二編 第一章 第五節 副詞の小分

若我而不有之、彼惡得而知之。同徐無鬼

夫至德之世同與禽獸居、族與萬物並。惡乎知君子小人哉。同馬蹄

故天子生則天下隆、致順而治、論德而定位。死則能任天下者必有之矣。夫禮義之分盡矣、擅讓惡用矣哉。荀子正論篇

①は場所て②は理由である。但し場所を表はすのが本義である。理由を表はすにも實は理由の存する場所を表はすのである。例へば「惡む民の父母たるに在らむや」の「惡む」はやはり「何處に」の意味がある。「何處に民の父母たるに在るといふ理由が存するか」といふ意である。

安「こゝに」と讀む時がある位であつて、場所を表はす語であるが轉じて理由をも表はす。

1 陽子曰、弟子記之、行賢而去自賢之行、安往而不愛哉。莊子山木

神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣。于嗟徂兮、命之衰矣。史記伯夷列傳

2 崔瞿問於老聃曰、不治天下、安賊人心。莊子在宥

吾安能棄南面王樂而復爲人間之勞乎。同至樂

不知乎、人謂我朱愚。知乎、反愁我軀。不仁則害人、仁則反愁我身。不義則傷彼、義則反愁我已。我安逃此而可。同庚桑楚

蚊謂蛇曰、吾以衆足行而不及子之無足、何也。蛇曰、夫天機之所動、何可易耶。吾安用足哉。同秋水

①は場所て②は理由だ。

焉「安」の通音であらう。場所と理由を表はす。

1 子之武城聞弦歌之聲。夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀。子游曰、昔者偃也聞諸夫子、君子學道則愛人、小人學道則易使也。子曰、二三子、偃之言是也、前言戲之耳。論語陽貨

吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食。同陽貨

景春曰、公孫衍張儀豈不誠大丈夫哉、一怒而諸侯懼、安居而天下熄。孟子曰、是焉得爲大丈夫乎。孟子滕文公下

吾之不遇魯侯、天也。臧氏之子焉能使予不遇。同梁惠王下

君失其官、帥師不威、將焉用之。左傳閔二

焉知會史之不爲桀跖嚙矢也。故曰絕聖棄知而天下大治。莊子有宥

秋季文子將聘於晉使求遺喪之禮以行其人曰將焉用之文子曰備豫不虞古之善教也求而無之實難過求何害。左傳文六

陷君於敗敗而不死又使失刑非人臣也臣而不臣行將焉入。同傳十五

既入焉而示之璧曰活我吾與女璧。已氏曰殺女璧其焉往遂殺之而取其璧。同哀十七

「焉」を「これ」と讀んで形式名詞に用ゐることのあることは勿論であるが疑問の意のまゝ名詞に用ゐた例がある。

皓々白駒食我場苗繫之維之以永今朝所謂伊人於焉逍遙皓々白駒食我場藿繫之維之以永今夕所謂伊人於焉嘉客。毛詩小雅白駒

上の「於」が若し「あ」と讀むべきものであるならば「焉」も普通の用法になる。

鳥「いづくんど」と讀む。「惡」の通音だ。

今割齊民以附夷狄弊所恃以事無用鄙人固陋不識所謂使者曰鳥謂此邪必若所云則是蜀不變服而巴不化俗也。史記司馬相如列傳

相如以子虛虛言也爲楚稱鳥有先生鳥有此事也爲齊難無是公者無是人也。明天子之義故空籍此三人爲辭。同

奈何「奈」だけ用ゐることも出来るが大抵「何」と共に一詞を成す。

民常不畏死奈何以死懼之若使人常畏死而爲奇者吾得執而殺之孰敢。老子下且也若與予也皆物也奈何哉其相物也。莊子人間世

「若何如何」「奈何」と同義であるが「如何は、何の如し」といふ連詞的動詞であつて疑問の意は「何」に在る。「奈何」に至つては「奈」にも「如し」の意は無い。

那これは新しい語である。奈と同じだ。

人情已厭南中苦鴻雁那從北地來。唐詩選王勃

蓬萊織女回龍車指點虛無引歸路。自是君身有仙骨世人那得知其故。唐詩選李白

寧「なんぞ」或は「あに」と讀む。

秦伯曰晉國和乎對曰不和小人耻失其君而悼喪其親不憚征繕以立圍也曰必報讎寧事戎狄。左傳僖十五

此所謂驅市人而戰之其勢非置之死地使人人自爲戰今予之生地皆走寧尚可

得而用之乎。史記淮陰侯列傳

不然。臣有赴東海而死耳。寧能處小朝廷求活邪。胡澹菴上高宗封事

使人召蔡澤。蔡澤入則揖應侯。應侯固不快。及見之。又倨。應侯因讓之曰。子常宣言

欲代我相。秦寧有之乎。對曰然。史記范雎蔡澤列傳

庸 庸は「なんぞ」と讀む。反轉態にのみ用ゐる。

勝自厲。劔子期之子平見之曰。王孫何自厲也。曰。勝以直聞。不告女。庸爲直乎。將以

殺爾父。左傳哀十六

社稷有主而外其心。其何貳如之。苟主社稷。國內之民其誰不爲臣。臣無二心。天之制也。子儀在位十四年矣。而謀召君者庸非貳乎。同莊十四

且吾聞唐叔之封也。箕子曰。其後必大。晉其庸可冀乎。同僖十五

豈 豈は他の疑問副詞と違つて單なる疑問ではない。疑の意を以て反省する語である。

1 其所求進見之士。豈復有賢於周公者哉。不惟不賢於周公而已。豈復有賢於時百執事者哉。豈復有所謀議能補於周公之化者哉。韓愈復上宰相書

豐水有芑。武王豈不仕。論厥孫謀以燕翼子。武王蒸哉。毛詩大雅文王有聲

子曰。夫召我者而豈徒哉。如有用我者。吾其爲東周乎。論語陽貨

有若曰。豈惟民哉。麒麟之於走獸。鳳凰之於飛鳥。泰山之於丘垤。河海之於行潦。類也。聖人之於民亦類也。出於其類。拔乎其萃。自生民以來。未有盛於孔子也。孟子公孫丑上

2 側聞閣下抱不世出之才。特立而獨行道。方而事實。卷舒不隨乎時。文武惟其所用。豈愈所謂其人哉。韓愈與于襄陽書

「どうだらう」と反省するのである。「豈復た周公に賢れるもの有らむや」は「どうだらう」周公に賢れるものがあるだらうか、いや其れはない」といふ意である。〔1〕は普通の疑問〔2〕は反轉的疑問であるが何れも試に疑を設けて其れを反省するのである。「何ぞや」焉ぞなどの様な判断される材料の疑問ではない。判断其のものゝ疑問である。

以上「何より」豈まで皆疑問である。或は不問不定である。

1 或問乎曾西曰吾子與子路孰賢曾西蹵然曰吾先子之所畏也。孟子公孫丑上

或謂孔子曰子奚不爲政。子曰書云孝乎惟孝友于兄弟施於有政是亦爲政也奚其爲爲政。論語爲政

填然鼓之兵刃既接棄甲曳兵而走或百步而後止或五十步而後止以五十步笑

百步則何如。孟子梁惠王上

2 行或使之止或尼之。行止非人之所能也。同上

馬之千里者一食或盡粟一石。韓愈雜說四

農人告予以春及將有事于西疇或命巾車或棹孤舟。陶淵明歸去來辭

〔1〕は或る人或るものの意〔2〕は或る場合の意である。

〔或は動詞として有り〕と讀むことが有るがそれは意譯であらうと思ふ。

北方之學者未能或之先也。孟子滕文公上

從許子之道則市買不貳國中無僞雖使五尺童適市莫之或欺。同上

これを未だ之に先んずる或る能はず之を欺く或る莫しと讀むのであるが私は或はと讀む方が善いと思ふ。

或は形式副詞たる場合もある。〔第三三頁〕

〔獨の辨〕獨をなんぞと讀む場合が有るが私は其れは意譯又は誤譯であらうと思ふ。獨は下の動詞を反轉態たらしめる力は有つても自己に疑問の意はなからうと思ふ。

縱彼不言籍獨不愧於心乎。史記項羽本紀

夫賢者以感忿匪眦之意而親信窮僻之人而政獨安得嘿然而已乎。同刺殺韓政列傳
相如雖驚獨畏廉將軍。同廉頗藺相如列傳

これらの「獨」を「なんぞ」と讀む人が有るが私は「獨」は「ひとり」であつて特別扱ひをする意で自分だけが特別に、其れ一つ特別にといふ意から下の動詞が反轉態になるものだらうと思ふ。

形式副詞

形式副詞は形式的意義のみを有して實質的意義を缺く副詞である。例へば

1 上好禮則民莫敢不敬上好義則民莫敢不服上好信則民莫敢不用情。論語子路

飲且食兮壽而康。無不足兮奚所望。韓愈送李愿序

2 小子後生於何考德而問業。同送溫處士序

或曰以德報怨何如。子曰何以報德。論語憲問

3 何其相須之殷而相遇之疎也。韓愈與于襄陽書

のの類がそうだ。皆副詞であつて下の——の語の運用を調節修飾するが、その意義は形式的である。

形式副詞は其の用法に由つて次の三種に分たれる。

- 1 接續詞……………右の例の[1]の様なもの
- 2 前置詞……………右の例の[2]の様なもの
- 3 修飾形式副詞……………右の例の[3]の様なもの

接續詞と前置詞とは西洋文典では各一つの品詞とされてゐるが私は之を副詞の一種と思ふ。

接續詞〔寄生形式副詞〕

接續詞といふ語は單に名稱であつて説明的に命名すれば寄生形式副詞である。其の語彙は

以	則	即	乃	便	輒	載	曾
<small>スナハチ</small>	<small>スナハチ</small>	<small>スナハチ</small>	<small>スナハチ</small>	<small>スナハチ</small>	<small>スナハチ</small>	<small>スナハチ</small>	<small>スナハチ</small>
迺	亦	又	還	有	復	且	將
<small>スナハチ</small>	<small>モシクハ</small>	<small>モシクハ</small>	<small>モシクハ</small>	<small>アレセハ</small>	<small>モシクハ</small>	<small>モシクハ</small>	<small>モシクハ</small>
若	如	或					

等である。此等は上下の語を接續するから接續詞と稱せられ、且つ接續詞といふ一つの品詞とされてゐるが、上下の語を接續してもしなくても、其れが副詞であるならば品詞としては副詞の中へ這入るべきもので、接續詞といふ獨立の一品詞を成すべきものではない。且つ接續などといふことは甚だ不明確なことであつて、單に名稱としてならば兎も角も、説明の語としては不適當である。誰が前置詞が語と語を接續しないと云ひ得るか。誰が「が」の「に」をなどの助辭が語と語を接續しないと云ひ得るか。されば接續詞の定義は一定して居るにも拘らず、その語彙は書に由つて甚しく違ふ。

□私は接續詞といふ品詞を認めない。又語と語を接續する詞といふものを知ら

ない。私は唯形式副詞の一種に寄生形式副詞なるものが有ることを認め、これが世間の人から接續詞と稱せられてゐることを認める。だから名稱だけを世間の通用語に取つて之を接續詞と稱するのである。而も獨立の一品詞としてでなく形式副詞の一種としての接續詞なのである。之を定義すると次の如くである。□接續詞は形式副詞の一種であつて自己と何等直接の統合關係の無い語に寄生し、其の意義を借りて自己の實質的意義に供し、以て他語に従屬してその運用を調整するものである。例へば

増不去則羽必殺増

の「則」は接續詞である。上の「増不去」の意義を借りて自己の實質的意義に供しその上で下の「羽必殺増」を修飾してゐる。所が上の「増不去」は「則」には關係なく自己の力で「羽必殺増」へ關係してゐるので「増不去」と「則」との間には何等の統合關係が無い。之を圖解すると

増不去
則 羽必殺増

増去らずんば
則 ち 羽必ず増を殺さむ

である。「則」は「増不去」を別の語で言ひ換へたものであつて「則」と「増不去」とは同義なのである。

凡そ文法上詞と詞との關係は三種ある。「花を觀る」に於ける「花を」と「觀る」の關係の様な相關關係を統合關係と云ひ、代名詞が前言を指示する様な關係を指示關係と云ひ、形式詞が自己と統合關係なき他語の意義を利用する關係を寄生關係といふ。「増不去」と「羽必殺増」との關係も「則」と「羽必殺増」との關係も統合關係であるが「則」が「増不去」に對する關係は寄生關係である。即ち「則」の方だけが「増不去」の意義を利用するので「増不去」の方から言へば干知しないことである。

世間で接續詞と稱するものゝ中には「然らば」「然れども」「然して」の類も含まれてゐるが、これらは「然り」といふ動詞の一運用である。「然り」を「然らば」と云ふのは「往く」を「往がば」と云ふのと同じである。こういうものを接續詞と稱することは固より誤である。(第三頁参照)

私の謂ふ接續詞は説明的に言へば寄生形式副詞である。今次へ一々の詞に就いてその用法をいふ。

三

「以」の用法

「以」は「もつて」と訓む。日本語の「もつて」はもと動詞の「持つて」から轉じて動作の意義と敘述性とを失ひ、單に形式的なる副詞的意義を表はす詞となつたものである。「以」は方法を表はす接續詞である。動詞(多くは連詞的動詞)の下に用ゐられ、其の動詞に寄生して自己の形式的意義を實質化した上て下の動詞を修飾するもので、其の効力は形式動詞の「而」に似てゐる。

1 引壺觴以自酌、阿庭柯以怡顏、依南牕以寄傲、審容膝之易安、園日涉以成趣、門雖設而常關、策扶老以流憩、時矯首而遊觀、雲無心以出岫、鳥倦飛而知還、景翳々以將入、撫孤松而盤桓、陶淵明歸去來辭

2 古之君子、其責己也重、以周其待人也、輕以約。韓愈原毀
の「以」の様に皆上の動詞「引壺觴」「阿庭柯」などへ寄生して下の——なる動作に對して

其の方法を表はす。

「以」は方法を表はすが其の用法は右の例の〔1〕の様に上の動詞の意義が下の動詞の意義へ實際に於て從屬してゐる場合と〔2〕の様に上の動詞の意義が下の動詞の意義へ形式的には從屬して居ても實質的には對等である場合と兩方有る。

「以」は「而」を代入しても意義が通ずる。「引壺觴以自酌」と「引壺觴而自酌」と略同じだ。其れは同様に方法を示すものであるからだ。右の例の〔1〕は「以」と「而」が代る／＼使つてある。

しかし「而」は形式動詞であつて敘述性が有るが「以」の方は副詞であつて敘述性が無い。その爲に「而」よりは「以」の方が用法が狭い。

「而」には意味の切れない語の下へ用ゐる第一用法と意味の切れたものゝ下へ用ゐる第二用法(第三頁)と二つの用法が有る。若し「而」に敘述性が無かつたならば第二用法は無い筈である。「以」には「而」の第二用法が無い。其れは「以」は副詞であつて敘述性が無いことから生ずる區別である。

「而」は方法を表はすものであるが「門雖設而常關」雖能言而不能躬行などの様に「然れ

どもといふ意の處へも使ふことが出来るが「以」はそれは出来ない。接續詞の「以」は必ず動詞(連詞的動詞)の下へ用ゐる。併し必ず下に他の動詞があるとは限らなう。

自明治以前

自大正以後

自東京以東

自大阪以西

などは「明治より以前」「東京より以東」と讀んでも漢文の意義は「明治よりして以前」「東京よりして以て東」であつて「自」は前置詞性動詞で「自明治」「自東京」は連詞的動詞である。又「以て前」「以て東」は名詞であつて動詞ではない。名詞でも「前後」などは時間的に進行するものとして考へ「東西」は空間的に進行するものとして考へられるのであるから「以て」はその進行的運用を修飾するのである。こういう様な「以」も「而」を代入して「自明治而前」「自明治而後」などいふことが有る。「以」は前置詞にもなる。(第三頁)

「則」の用法

「則」は「すなはち」と訓む。用法が三つある。

一 假定的用法 「何々ならば何々なれば」といふ様に假定の意に用ゐられた動詞(或は敘述態の名詞)の下に用ゐられて「然らば其の場合」といふ意を表はす。「其の場合」といふと代副詞の様に聞えるがそうではなくて形式副詞だ。

河内凶。則移其民於河東。移其粟於河内。河東凶亦然。孟子梁惠王

以五十步笑百步。則何如。曰不可。直不百步耳。是亦走也。曰王知此。則無望民之

多於鄰國也。同

旱。則苗槁矣。天油然作雲。沛然下雨。則苗浥然興之矣。同

曰鄒人與楚人戰。則王以爲孰勝。曰楚人勝。曰然。則小固不可以敵大。寡固不可以

敵衆。同

の「則」上の動詞。は假定の意を以て下の動詞——を修飾する。そうして「則」は上の動詞。へ寄生して自己の意義を實質化した上て下の動詞——を修飾する。上の動詞。と「則」とは同じ事柄を表はすので「則」は上の動詞の表はした意義を形式的に再示するのである。「則」の意義はその場合はいふ様な意だ。俗に「則」を「即」と區

別する爲に「れば則」と名けるのは「何々なれば則ち」といふ風に續くからである。又

使盾果有弑心乎則自然罪在盾矣不得曰爲法受惡而稱其賢也使果無弑心乎

則當爲之辯明必正穿之惡使罪有所歸然後責盾縱賊則穿之大惡不可幸而免

盾疑似之跡獲辯而不討之責亦不得辭。歐陽修春秋論

の様に「則」が一旦意義の終止した動詞の下へ用ゐられることもある。併し假定の意の有ることは變らなす。

二、分說的用法 「何々は」といふ意の語の下に用ゐられて「其れは」といふやうな意を以て下の動詞を修飾する。この場合に上の「何々は」といふ意の語は抽象的ではあるが假定ではなく、且つ前の「」の様に動詞又は敘述態の名詞に限るのではなくて名詞、動詞、副詞皆ある。

古之君子其責己也重以周其待人也輕以約……今之君子則不然其責人也詳其待人也廉。韓愈原毀

謂虞中夷逸隱居放言身中清廢中權我則異於是無可無不可。論語微子

或謂愈曰子之言則然矣宰相則知子矣如時不可何。韓愈復上宰相書

孔子曰哀則哀矣而難爲繼也。禮記

苟如是日受千金之賜一歲九遷其官感恩則有之矣將以稱天下曰知己則未也。韓愈上張僕射書

宰我子貢善爲說辭冉有閔子顏淵善言德行孔子兼之曰我於辭命則不能也。孟子公孫丑上

の「則」は分說的用法で日本の助辭の「は」の意のある所に用ゐられてゐる。日本の「は」は事情の異なるものを分けていふもので之を分説と云ひ「も」は事情の似てゐるものを合せていふもので之を合説といふ。「夏は暑く冬は寒い」と云へば夏と冬を分けていつたので分説だが「昨日も今日も大變に寒い」と云へば昨日と今日を合せて云つたので合説だ。漢文では「夏則熱冬則寒」といふ風に「則」を用ゐれば分説で「昨日亦寒今日亦寒」といふ風に「亦」を用ゐれば合説だ。唯「は」は助辭であつて凡そ物の異を分つ場合には一々「は」を附けるが「則」は副詞であるから一々附けては煩はしい。特に異を分つ必要のある時だけ使ふ。それだけ「は」よりは意味が重い。「夏則暑」と云へば「夏はそれは暑い」といふ意である。「すなはち「は」それは」と同様なのである。

□この用法に於ける「則」に次の様なものがある。

跋彼織女終日七襄雖則七襄不成報章。毛詩小雅谷風大東

これは「終日七襄雖七襄則七襄不成報章」の意である。「哀則哀矣」と同じ用法である。

「則」は名詞の場合は「則」であつて規則の意であるがそれは副詞の場合と關聯してゐる。「何々なれば何々だ何々は何々だ」といふことは論理に於ける三段論法の大前提である位で一般に抽象的な規則である。「則」が「即」と違ふ點はこの點に在る。

三、斷句の始めに用ゐる。

位公也道私也私不勝公則道不勝位位之權得以賞罰而道之權不過於是非道在我矣而不得爲有位者之事則天下皆曰位之不可僭也如此不然天下其誰不曰道在我則是道者位之賊也。蘇老泉春秋論

かういふ風に一度意味の切れたものゝ下に用ゐる上の詞の意義を「則」自己の實質的意義に利用する。「その場合は」といふ意味だ。そうして矢張假定的の意味が無い分説である。

日本語の「すなはち」はそのほどの通音である。「そのほと」といふと「其」がある爲に代副詞の様に聞えるが「すなはち」といふ時は既に代副詞的意義は失はれて純然たる形式副詞になつてゐる。

「すなはち」と讀む詞には「則」の外に「即乃便輒載會迺」等がある。皆夫々違ふ所がある。

「即乃便輒載會迺」の用法

「即」は「すなはち」と訓じ其の儘直ぐといふ意である。從來「取りも直さず」と解したのは「取りも直しもせずそのまゝ」といふ意を云つたのである。

齊國雖編小吾何愛一牛。即不忍其殼觶若無罪而就死地。故以羊易之也。孟子梁惠王

前日中得進奏吏報云、自陳州召至闕拜司諫。即欲爲一書以賀。歐陽修上范司諫書

「外ではない、それだ」といふ意を表はす。前言へ寄生しその借りた實質的意義を以て下の語を修飾するのであるが、目的は前言の内容と後言の内容との一致をいふのに在る。「換言すれば論じて行けば結局などといふ様な云ひ方である。

先シズル即制人後シレバ則爲人所制。史記項羽本紀

晏平仲……其在朝君語及之即危言語不及之即危行國有道即順命無道即衛命以此三世顯名於諸侯。同管晏列傳

橫成則秦帝從成則楚王秦帝即以天下共養楚王即雖有萬金不私也。戰國策

これらの「即」は「則」を代入することが出来るから「即」と「則」と相通する様だが併し「即」には「は」の意義がない。「則」と「即」とを區別して讀めば

先則制人……先んずれば則ち人を制す

先即制人……先んずる即ち人を制す

秦帝則以天下共養……秦帝たれば則ち天下を以て共に養ふ

秦帝即以天下共養……秦が帝たる即ち天下を以て共に養ふ

の如くいふべきである。

「即」が時間的に「直ぐ」といふ意を表はすのは本副詞である。

即位之初即不許度人為僧尼道士又不許創立寺觀臣常以爲高祖之志必行於

陛下之手今縱未能即行豈可恣之轉令盛也。韓愈論佛骨表

「即」は動詞としては「即く」である。空間的に離れない意である。其れだから時間的には「直ぐ」の意になり判斷的には「其のまゝ」の意になるのである。「則」が「法則」のつとるの意なると大に違ふ所以である。

乃 やはり「すなはち」と讀む。下の語を當然そうあるべき事柄として修飾するものである。「即」も同様、二者の一致を示すのであるが「即」は單に一致を示すが「乃」は前詞からの意義の關係上當然こうなければならぬと誰でも豫想しさうな事柄に對して前後の一致を示すのである。例へば

宣王立知成侯賣田忌乃復召田忌以爲將。史記孟嘗君列傳

天下方務於合從連衡以攻伐爲賢而孟軻乃述唐虞三代之德。同孟軻列傳

の「乃」の類だ。「そこでどうしたか」と云ふといふ意だ。上に——の語がある以上人は誰でもその場合は何とか然るべき事柄があるだらうと漠然ながら豫想する。「乃」はその豫想を提げて下の——の事柄をいふのである。「即」が單に一致を表はすのと「乃」がある豫想を以てその豫想を結果づけるのとは大變に違ふ。又「則」がその場合は「は」の意のあるのと「乃」の場合にてあつて「は」の意味のないのとは殊に

甚しく違ふ。又

其後竟爲侯景所逼餓死臺城國亦尋滅事佛求福乃更得禍。韓愈請佛骨表

錯不於此時捐其身爲天下當大難之衝而制吳楚之命乃爲自全之計欲使天子

自將而已居守。蘇東坡量鎗論

の「乃」もそこでどうかといふとの意だ。普通は「却つて」の意と説かれて居るが、其れは上下の關係が自然「却つて」の意を成すので「乃」に「却つて」の意があるのではない。矢張上の——の事件から生ずる結果を豫想してその豫想を提げるのである。即ち豫想に二種あるのて例へば「老」と云へばその豫想は「衰か」「益壯か」二つに考へられる。そこで「老乃衰」とも「老乃益壯」とも云へるのである。

是二人者未始不相須也然而千百載乃一相遇焉。韓愈與于襄陽書

汝不和吉言于百姓惟汝自生毒乃敗禍姦宄以自災于厥身乃既先惡於民乃奉其恫汝悔身何及。商書盤庚

既數日復自奮曰無所能人乃宜以盲廢。韓愈代張籍與李浙東書

など皆「そこで」そこで當然などの意である。

今男女同贊是無別也男女之別國之大節也而由夫人亂之無乃不可乎。左傳莊廿五

今君德無乃猶有所闕而以伐人若之何。蓋姑內省德乎無闕而後動。左傳僖十九などは「乃」ち不可なる無からむや「乃」ち不可なり「乃」ち猶闕くる所有る無からむや「乃」ち猶闕くる所有りの意で「乃」の意に變りはない。この「無乃」を一語と思ひ「無乃」と讀むのは善くない。

「無乃」と似た云ひ方に「無寧」がある。

子疾病。子路使門人爲臣。病間曰久矣哉。由之行詐也。無臣而爲有臣。吾誰欺欺天乎。且予與其死於臣之手也。無寧死於二三子之手乎。論語子夏

天其以禮悔禍于許。無寧茲許公復奉其社稷。左傳僖十

の「寧」る二三子の手に死する無からむや「無」が反轉態である。の「寧」ち茲のみなる無く許公復其の社稷を奉ぜむ「無」が反轉態でない。「無寧」を「無寧」と讀むことは註に「無寧は寧也」とあるからであるが「寧」の反轉と「無寧」の正説とは同義でも文法上形式が違ふ。

「乃」は又「乃父乃公」などの様に副體詞として「その」の意になる。動詞としては「しかり

(然)である。これが副詞の場合は、當然の事柄としてといふ意になる所以である。
便輒載會迺 これらも皆「すなはち」と讀む。「そこですぐ」の意の接續詞である。
「乃」に似て「乃」よりは輕し。

宜爲王如故便立二世之兄公子嬰史記始皇帝紀

能徙者予有二人徙之輒予五十金同商君列傳

舟搖々以輕颺風飄々而吹衣問征人以前路恨晨光之熹微乃瞻衡宇載欣載奔
僮僕歡迎稚子候門陶淵明歸去來辭

曰然則吾子與管仲孰賢會西斃然不說曰爾何曾比予於管仲孟子公孫丑上

公孫鞅聞秦孝公下令國中求賢者將修繆公之業東復侵地迺遂西入秦史記兩君列傳

皆「そこで直ぐ」の意である。「載欣載奔」は衡宇を見ると直ぐ同時に欣び同時に奔る意、即ち欣びながら走る意である。

「亦」の用法

「亦」は「また」と訓ずる。「やはり」の意で用法が二つある。

一 假定的用法 「則」の「二」と對する。「則」が「何々ならば」といふ意の語の下に用ゐられるのに對して「亦」は「何々でも」といふ意の語の下に用ゐられる。

居廟堂之高則憂其民處江湖之遠則憂其君是進亦憂退亦憂范文正公岳陽樓記

但し和訓の上から言ふと「則」の上の動詞は動詞のままに訓むが「亦」の上の動詞は動詞性名詞に直して訓む。例へば「進則憂」は「進めば則ち憂ふ」と讀むが「進亦憂」は「進むも亦憂ふ」と讀む。「進みても亦憂ふ」と讀むべきであるが語調の上から「進むも」と讀むのである。

二 合説的用法 「則」の「三」に對する用法で假定の意のない場合である。「則」が分説であるのに對して「亦」は合説である。事情が違へば「則」を用ゐて之を分ち、事情が同じならば「亦」を用ゐて之を合せる。

王立於沼上顧鴻雁麋鹿曰賢者亦樂此乎孟子梁惠王

須臾客去予亦就睡蘇東坡赤壁賦

昔關里之多士孔聖亦云其遑々韓愈祭田橫墓文

吾聞之周生曰舜目蓋重瞳子。又聞項羽亦重瞳子。羽豈其苗裔邪。史記項羽本紀贊

「亦」は本副詞にもなる。日本語の「も」は助辭であるが之と似た意味の語を副詞に求めれば「やはり」である。「亦」が接續詞である場合は「……も、やはり」の意であるが、本副詞の場合は「も」と伴はない。「……やはり」である。例へば

子曰學而時習之。不亦說乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不慍。不亦君子乎。

論語學而

子張曰何謂惠而不費。子曰因民之所利而利之。斯不亦惠而不費乎。擇可勞而勞之。又誰怨。欲仁而得仁。又焉貪。君子無衆寡。無小大。無敢慢。斯不亦泰而不驕乎。君子正其衣冠。尊其瞻視。儼然人望而畏之。斯不亦威而不猛乎。論語堯曰

雖然增高帝之所畏也。增不去項羽不亡。嗚呼。增亦人傑也哉。蘇東坡范增論

秦人不暇自哀。而後人哀之。後人哀之而不鑑之。亦使後人而復哀後人。杜牧阿房宮賦

吾聞之。申包胥曰。人衆者勝天。天定亦能勝人。蘇東坡三槐堂銘

の「亦」の類でこれは形式副詞ではなく本副詞である。色々考へてその適當なるも

のを求める語で「やはり」の意である。「不亦說乎」は「悦ばしくないか否」矢張悦ばしいの意。亦人傑也哉は「人傑ではないか、矢張人傑だ」の意である。されば「増亦人傑也哉」を「増も亦……と讀むと「亦」が接續詞の「亦」になるから「嗚呼、増は亦人傑なるかな」と讀むべきである。肯定の場合には接續詞か本副詞か外形上不明瞭であるが、之を否定の形にすると明瞭になる。「不亦となれば本副詞で「亦不」となれば接續詞である。「不亦ならば」の意味はない。寧ろ「は」の意味がある。

肯定

否定

范增亦人傑也哉(范增も人傑だ)……范增亦非人傑乎(范增でも人傑と云へないか)

范增亦人傑也哉(范增は矢張人傑だなる)……范增不亦人傑乎(范增は何と矢張人傑ではないか)

處世之道亦難矣(處世の道も難い)……處世之道亦不難也(處世の道も難くない)

處世之道亦難矣(處世の道は何と難い)……處世之道不亦難乎(處世の道は何と難くない)

「不」が「亦」より上に在れば「亦……」が否定され、「亦」も否定の内へ這入るから「矢張人傑だ」と云ふことが違ふか、いや違ふまい」といふ意になる。

孟子見梁惠王。王曰叟不遠千里而來。亦將有以利吾國乎。孟子梁惠王……「矢張私

の想像通り」

孟子對曰王何必曰利亦有仁義而已矣。同……「私は利以外に仁義が有ると思ふ其の私の考通り」

今有受人之牛羊而爲之牧之者則必爲之求牧與芻矣求牧與芻而不得則カヘサム「コレヲ諸其人乎抑亦立而視其死與。孟子公孫丑下……」[まう一つの考通り矢張]

これらも種々に考へられる中の一つの考に就いてその考の様に矢張といふのである。本副詞であるから「亦」の意味はない。

「また」と讀む語には「亦」の外に「又」復有「還」などが有る。これらの内に「亦」と取換へられる場合のあるものもあるが、その意味は皆それぞれ違ふ。

「又」還「有復」の用法

又「又」はその上に「の意であつて追加的である。「亦」が矢張同様に「といふ意であつて類似的なのと違ふ。「又」は本副詞にも有るが接續詞としての用法は例へば

臣聞之鬼神非人實親惟德是依。故周書曰皇天無親惟德是輔又曰黍稷非馨明

德惟馨。又曰民不易物惟德馨物。如是則非德民不和神不享矣。左傳僖五

然則何爲而可。曰繼而來歸殺之無赦而又繼之而又來則可知爲恩德之致爾。歐

陽修縱囚論

今有一人焉父病躬進藥而不嘗又有一人焉父病而不躬進藥而二父皆死。同春

秋論

昔者吾舅死於虎夫又死焉今吾子又死焉。禮記

上の語に寄生して實質的意義を求め、まう一つ同じ様に「といふ意を表はす。「亦」と通ずる様に見える場合も有るが矢張違ふ。例へば右の最後の例の「夫又死焉」の如きは「夫亦死焉」と云ふと「夫も亦焉に死すの意になるが「夫又死焉」は「又夫死焉」と略同義で「舅が虎に殺され又その上に夫がやられた」といふことだ。「夫もまた」ではなく「夫が又」即ち「又夫が」である。「亦」は物に對する「また」であるから「夫亦死」は「夫も」の意になるが「又」は動作に對する「また」であるから「夫も死んだ」ではなく「夫が死ぬ」といふこととしたのである。日本語で「も」が名詞へ附く場合には漢文で「亦」で「も」が動詞へ附く場合には「又」である。

月が出た星も出た………月出矣星亦出矣。
 月が出もし星が出もした………月出矣星又出矣………月出又星出
 梅が咲き桃も咲く………梅花開桃花亦開
 梅が咲きもし桃が咲きもする………梅花開桃花又開(又)桃花開
 などの様な區別が有る。

雞初鳴而衣服至於寢門外問内豎之御者曰今日安否何如内豎曰安文王乃喜
 及日中又至亦如之及暮又至亦如之。禮記

の「又」などは「復」と通ずる様に見えるが違ふ。「復」はもう一度の意だが「又」は度数をいふのではない。動作を時間的に數へると度数になるが「又」は動作を動作と見るので度数と見るのではない。「日中又至」は朝見舞ふだけではなく日中見舞もした夕方見舞もしたといふ様に動作の累加を表はすのである。「日中復至」は「日中にも一度行つた……」の意、日中亦至は「日中にも行つた」の意で其れれゝ意味の具合が違ふ。

自其不變者而觀之則物與我皆無盡也而又何美乎。蘇東坡赤壁賦

の「又」なども特殊な用法ではない。「物と我と皆盡くるなくして又他を羨む」といふことを否拒したのである。

「還」は「亦」に近く「有」は「又」に近く「復」は「もう一度」の意だ。

中原還逐鹿、投筆事戎軒。唐詩選魏徵述懷

世衰道微邪說暴行有作、臣弑其君者有之、子弑其父者有之、孔子懼作春秋。孟子

滕文公

帝曰咨汝羲暨和、朞三百有六旬有六日、以閏月定四時成歲。尙書堯典

常以爲自今以後不復見如古人者、於今忽有之。韓愈代張籍與李浙東書

「且」將の用法

且「且」は接續詞としての用法が三つある。

一、まだ意味が切れなくて下と對等なる意を表はす語を承けて「もう一つ」の意を表はす。

奈之何、民不窮且盜也。韓退之原道

如有周公之才之美使驕且吝其餘不足觀也已矣論語泰伯

邗有道貧且賤焉恥也邗無道富且貴焉恥也同

夫愚且賤者不得爲政乎貴且知者貴且知者然後得爲政乎愚且賤者此吾所以

知義之不從愚且賤者出而必自貴且知者出也墨子天志中

「且」が有つて始めて上下の語が接續されるのではない。上の語は自力を以て下の語へ關係してゐる。「且」は唯「まう一つ」といふ意を表はすだけである。

二、對等の事件を表はす二語の各の頭へ附ける。

山有漆隰有栗子有酒食何不日鼓瑟且以喜樂且以永日毛詩唐風山有樞

これは「」の用法の變體だ。「以喜樂且以永日」と「以永日且以喜樂」の二つを一處にいふと「且以喜樂且以永日」となるので上の「且」は下の語を豫想して之を承け下の「且」は上の語を承ける。

三、意義の終止した語の下へ用ゐて「其れにまう一つ」といふ意を表はす。

自其不變者而觀之則物與我皆無盡也而又何美乎且夫天地之間物各有主苟非吾之所有雖一毫而莫取蘇東坡赤壁賦

蘇秦喟然歎曰此一人之身富貴則親戚畏懼之貧賤則輕易之況衆人乎且使我

有雒陽負郭田二頃吾豈能佩六國相印乎史記蘇秦列傳

四、提示された語の上又は下に用ゐて「すらさへも」の意を表はす。

獸相食且人惡之爲民父母行政不免於率獸食人惡在其爲民父母也孟子梁惠王

急則敗矣且家人父子尚不能以此自克況號爲君臣者乎柳子厚桐葉封弟辨

(4)は提示された語——の下に在り(4)は上に在る。

本副詞としての用法を序にいふ。これに二つある。

一は「假に一寸」の意。「かつしばらく」と讀む。

聞其至馳往省之問無恙外不暇出一言且先賀其得賢主人韓愈代張籍與李浙東書

韓信謝曰先生且休矣吾將念之淮陰侯列傳

二は「すぐに」の意で「まさにと讀み其の下の動詞へ「ひとす」を添へて讀む。

使之治國上且鈞乎君下且逆乎民其得罪於君也將弗久矣莊子徐無鬼

張儀既相秦爲文檄告楚相曰始吾從若飲我不盜而壁若答我若善守汝國我願

且盜而城史記張儀列傳

吳王從臺上觀見且斬愛姬大駭趣使下令曰寡人已知將軍能用兵矣寡人非此二姬食不甘味願勿斬也。同孫子吳起列傳

日本語の「かつ」は難い意味兼ねる意味が元で「咲くと見しまにかつ散りにけり」などの様に「すぐの意にもなるから」且は「まさに」と讀まずに「かつ……むとす」と讀んで次の「將」と區別する方が善かつたと思ふ。

將「將」は接續詞としては「はた」と讀む。前の語の實質的意義を承けて其れをひつくりかへすのである。

一、前の語を承けて自己を實質化する。

増始勸項梁立義帝諸侯以此服從中道而弑之非増之意也夫豈獨非其意將必力爭而不聽也。蘇軍坡范增論

吾寧憊々歎々朴以忠乎將送往勞來斯無窮乎寧誅鋤草芥以力耕乎將游大人以成名乎寧正言不諱以危身乎將從俗富貴以媮生乎。屈原卜居

この「將」は次の様に「且」でも通ずる場合がある。

曾子問曰葬引至於垣日有食之則有變乎且_{アラハル}不乎。禮記曾子問

これは「且」の「」(第三頁)の用法だがこゝでは「將」と通ずる。

二、上下に「將」を對用する。上の「將」は下の語を豫想して之を承けるのである。

夫滕壤地褊小將爲君子焉將爲小人焉無君子莫治野人無野人莫養君子。孟子

滕文公上

「將」は又本副詞として「これから」といふ意を表はす場合がある。「まさに」と讀み下の動詞へ「むとす」を添へて讀む。

是歲十月之望步自雪堂將歸于臨臯。蘇東坡赤壁賦

子豈盡知之乎吾將盡言之。韓愈代張籍與李浙東書

曾子言曰鳥之將死其鳴也哀人之將死其言也善。論語泰伯

「且」と似てゐるが「且」の方が「すぐ」の意が強い。

「若如」の用法

「若如」は「もしくは」と讀む。後世の文では「或」をも代りに使ふ。

季氏使其乘之人以其役邑入者無征不入者倍征孟氏使半爲_臣若_子若_弟。左傳

求爾何如對曰方六七十如五六十求也爲之比及三年可使足民論語先進
赤爾何如對曰非曰能之願學焉宗廟之事如會同端章甫願爲小相焉。同

上の名詞の意義を借りて下の名詞の運用を修飾する。名詞を修飾しても名詞の運用を修飾するのであるから矢張副詞である。之を連名性副詞(第三頁)といふ。

前置詞

□前置詞は説明的に言へば歸著形式副詞である。歸著性の有る形式副詞であつて、客語に歸著し客語に因つて自己の意義の形式的空虚を補充されるものである。
於 于 焉 之 以 將 爲 比 自 由
從 道 方 比 與 及 暨 每 舉
等がそうだ。

前置詞といふ名稱は西洋文典の Preposition の譯語である。その前置詞と云はれる理由は「於日本以文學の於以」などの様に名詞の前へ置かれるからである。併し日

本語では「日本に於て文學を以て」といふ様に名詞の次へ置くから後置詞 (Postposit-ion) と云はなければならぬ。前置、後置の別は國語の性質に因つて分れることであるから、世界の各國語に共通なるべき名稱としては「前置詞」後置詞は適當でない。且つ西洋文典では前置詞を一品詞として居るが、此れは副詞の一種であるから一品詞とすることは善くない。私は前置詞といふ名稱を好まない。其れよりは歸著副詞と云ふ方が善いと思ふのであるが、前置詞と云ふ方が通りが善いから姑く前置詞と云つておくのである。

前置詞は形式副詞であるから、自己は唯形式的意義を表はし、實質的意義は客語をして之を表はさしめ、客語を統率して自己と客語との結合體を以て具備した概念を成し、自己がその結合體の樞軸となつて之を代表し、連詞的副詞として他語の運用を調整するものである。

前置詞 名詞
{以} 千金 買名馬
歸著語 客語
連詞的副詞

右の例の「以」は前置詞で下の「千金」は名詞である。「以」だけで「千金」がなければ何物を以てであるかが分らない。即ち「以て」と云ふ形式的意義だけで實質的意義が缺ける。そこで「千金」で其れを補ふ。「千金」は「以」に對する客語であつて「以」は「千金」を統率する統率語である。「千金」を以ては「千金」の一種ではなくて「以て」の一種である。「千金」を以ても「百金」を以ても「十金」を以ても皆「以て」の一種である。それだから「以千金」といふ連詞の代表部は「以て」である。「千金」は「以」の意義を實質化する爲の從屬部たるに過ぎない。「千金」は下の「買名馬」に對して何等直接の關係を持つてゐない。唯「以」へ關係してゐるだけである。「買名馬」へ關係するのは「以て」である。喩へて言へば「千金」といふ品物を「以」といふ車へ載せて「買名馬」の處へ持つて行くのである。「以」は副詞であるが「以千金」は大なる副詞(連詞的副詞)である。この大なる副詞「以千金」は「以」がその代表部となつて「買名馬」へ關係する。

世人は多くは前置詞を誤解して、單に名詞と他語との關係を表はすものだと思ひ日本語の助辭「を」に「へ」と同じ性質のものと思つて居るが、それは大變な誤である。前置詞といふものは單純に名詞の前へ置かれるものではない。單純に名

詞の前へ置かれるのは接頭辭である。前置詞は西洋文典に記載せられてゐる通り、名詞の前に置かれ名詞を客語として其れを統率するのである。前置詞の次へ來る名詞は其の格が客體格(Objective case)である。無格ではない。日本語で言へば(日本語では前置詞が名詞の後へ附く)「千金」を以てであつて「千金」以てではない。「以て」は「千金」といふ客體格を統率するので「千金」以てといふ様に「千金」といふ無格名詞を統率するのではない。「千金」へ「を」といふ助辭の附いたものを統率するのである。この助辭「を」は「千金」といふ名詞をして客體格たらしむる助辭であるので「を」は無條件に名詞へ後附せられる。西洋の前置詞を日本で後置詞と稱するとすれば「東京を以て」の「以て」が後置詞なので「を」は後置詞ではない。そういふ譯で前置詞即ち歸著形式副詞を了解するには、どこまでも客語を統率するものであるといふことに注意する必要がある。

「於」の用法

於「於」は前置詞即ち歸著性の形式副詞であつて日本語の「おいて」に當るもので

ある。名詞へ依據して「何々に於て」於某として用ゐられる。日本語の「於て」はもと動詞置いてから出来たものであつて場所の形式的意義を表はすものであるが、漢文の「於」は場所の形式的意義から轉じて、向つて對して比してなどの意を表はす。

四方萬國惟回鶻於唐故親。韓愈送段員外序

於是相屬爲詩以道其行云。同

夫盲者業專於藝必精故樂工能盲。韓愈代張籍與李浙東書

齊宣王問曰文王之囿方七十里有諸孟子對曰於傳有之。孟子梁惠王

唐虞之際於斯爲盛。論語泰伯

孔子於鄉黨恂々如也似不能言者。論語鄉黨

朋友死無所歸曰於我殯。同

錯不於此時捐其身爲天下當入難之衝而制吳楚之命乃爲自全之計。蘇軾鼠錯論

これら皆下の。を客語として之を統率し。と共に連詞的副詞となつて下の——なる動詞へ懸る。皆「もいて」と讀み客語。は「に」を添へて讀む。

右に述べたのは「於」の前置詞たる場合である。「於」には右の外に形式動詞「爲」の意味

を含む種々の用法が有る。

一「於」が「爲」の意味を帯びて「於てす」といふ意味に用ゐられるもの。これは前置詞性寄生形式動詞である。

臣聞爭名者於朝爭利者於市。史記廉頗藺相如傳

「爭名者於朝爭」の意で「於て争ふ」に於ける「争ふ」の形式的意義(す)を於へ含ませたものである。

二「やはり」於「爲」の意味を帯びて「於てす」の意になるのであるが、動詞の下へ用ゐられて前置詞性の單純形式動詞になる。

河内凶則移其民於河東。孟子梁惠王

この「於」は「於てす」であつて「す」の意味が有るから形式動詞である。そうして上の「移」といふ動詞の意味を以て自己の實質的意義とするもので「移」と「於」とは同じ動作を表はすのである。同じ動作を實質的意義と形式的意義との二面に分けて、實質的意義の方を「移」に表はさしめ形式的意義の方を「於」に表はさしめたものである。

三「於」が「す」の意味を帯びたものへ更に名詞的意義(こと)を持たせたもので「於てすること」の意になる。讀むには「於ける」と讀む。

「寡人之於國也盡心焉耳矣」。孟子梁惠王

「於」は前置詞性の動詞性名詞である。そうして「……」の全體は連詞的名詞になる。この用法は「於」が變態詞となつたものであるからその詳細は第八節に譲る。

于焉之。おいてと讀む。「于」は「於」と音が近く、意義も同様である。「焉」は「こゝ」といふ意から於ての意になる。「之」は「ゆく」といふ意味から「于」と同義になる。

詩曰畏天之威于時保之。孟子梁惠王下

故于今頌成王之德而稱周公之功不衰。韓愈復上宰相書

予曷其不予前寧人圖功攸終。周書大誥

京師之野于時處處于時廬旅于時言言于時語語篤公劉于京斯依跚跚濟濟俾

筵俾几。毛詩大雅生民公劉

焉而晏日焉而得罪將惡避逃之。墨子天志上

之所以接下之人百姓者庸寬惠。荀子王制篇

やはり下の名詞を客語として之を統率しこれと共に連詞的副詞となつて其の下の動詞を修飾する。

「將歸于臨臯」の「于」の様に使ふ用法は變態詞であるから第八節で論ずる。

「以將」の用法

「以」は「もつて」と讀む。他動性の前置詞で方法を表はすものである。自動他動の別は動詞に有るだけでなく前置詞にもある。「以」は他動性でその他の前置詞は大抵皆自動性だ。「以」は他動性であるから日本讀では其の客語へ「を」を付けて「何々を以て」と讀む。日本語の「もつて」は動詞の「持つて」から轉じたものである。

大夫烏公以鈇鉞鎮河陽之三月以石生爲才以禮爲羅羅而致之幕下。未數月也以溫生爲才於是石生爲媒以禮爲羅又羅而致之幕下。韓愈送溫處士序

の「以」は前置詞で下の。はその他動性に對する客語である。「以」。は連詞的副詞であつて「以」がその代表部を成し、その下の動詞——へ懸り、其の動作の方法を表はす。

右の例の「以」には用法が二種あることを見るであらう。一の「以」は單純に方法を表はす。「以鈇鉞鎮河陽」は鈇鉞で河陽を鎮するので鈇鉞は「鎮す」の方法物(道具)である。所が一を附けた「以」は方法を表はすには違ひないが單純に方法を表はすのではな

「以石生爲才」は石生を才と爲すので「石生て」といふ意ではなく、「石生を」と云ふ意である。日本語では「石生を」が「爲す」に對して直接に客語になるが漢文ではそれは出来ないから「石生」といふ客語を「以て」統率し之を「爲才」の方法と看做すのである。「以」は他動であるから之に對して客語が有るべきであるがその客體の觀念が客語なしに了解される時には客語は要らない。例へば「未嘗敢以聞於人」の「以」は「以之」の意であるが「之」は分つてゐるから要らない。

「以」が「所」へ續いて「所以」となると「以て何々する所」の意であるが多くは「所以」と讀む。

「以爲」は「以て何々と爲す」の意であるが「以爲へらく」と讀む場合が多い。

「以」の用法は前置詞として以外、接續詞としても用ゐられる。それは「而」と取換へ得る様に使ふ用法であつて「引壺觴以自酌」の「以」の類だ。第三三頁に出てゐる。

「以」は前置詞であるが之へ形式動詞(日本語の「す」)の意義を含ませて前置詞性形式動詞とすることがある。その場合には「制夷以夷」の「以」の様に「以てす」と讀む。(第八節)「將も」もつてと讀む。「何々を把つて何々と與に」の意である。

酒後留君待明月、還將明月送君回。唐詩選二丁仙芝

「爲」の用法

爲 「爲」は「爲す」「爲る」の意の場合には動詞だが「ため」の意の場合には前置詞である。

尤も日本語の「ため」は形式名詞であつて「何々のため」といふ様に連體の語を受けるのであるから「爲」の訓としては眞の直譯にならない。「爲」は依據性があるから客語を統率する。直譯は「爲にして」である。「爲子孫買美田」は「子孫に爲にして」或は「子孫に對して」である。

「爲」の意義は目的と原因とを表はすに在る。

一、目的を表はす例

曾子曰、吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎。論語學而

孔子曰、吾黨之直者異於是。父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣。論語子路

相爲天子得人於朝廷、將爲天子得文武士於幕下。韓愈送溫處士序

生既至拜公於軍門、其爲吾以前所稱爲天下賀、以後所稱爲吾致私怨於盡取也。

同

豫讓遁逃山中曰嗟乎士爲知己者死女爲說己者容今智伯知我我必爲報而死
以報智伯則吾魂魄不愧矣史記刺客豫讓傳

二、原因を表はす例

1 於是乎遊戲懈怠置酒乎皇天之臺張樂乎輶輶之宇撞千石之鐘立萬石之鉦建
翠華之旗樹靈鼉之鼓奏陶唐氏之舞聽葛天氏之歌千人唱萬人和山陵爲之震
動川谷爲之蕩波史記司馬相如列傳

資二生以待老今皆爲有力者奪之韓愈送溫處士序

右の(1)は單に下の動詞の表はす動作の原因を表はすが(2)は下の動詞をして被動
態たらしめる。

この「三」の用法を比較して見るに目的と云ひ原因と云ふも同一意義に統一され
る。等しく皆他人の動作を助成することである。故意に助成する場合には目的
と考へられ助成することに自然になる場合には原因と考へられるのである。「三」
の用法の被動を表はすが如きも本意でなくて他人の動作を助成するのである。
支那人が他人にして遣られた時によくいふ「遂成豎子之名」の意だと思ふ。

(四)の用法に於て爲は被動の原因を表はすが「なる」といふ意の「爲」形式動詞も矢張被動の意を
表はす。世人は往々この二つを混同する。

- 1 此乃信之所_ニ以爲_レ陛下_ニ禽_ニ也史記淮陰王傳……陛下に禽にせられたる所以なり。
- 2 還爲_レ越王_ニ禽_ニ三渚_ノ之_ニ浦同前……越王に三渚の浦に禽にせらる。
- 3 伍胥父兄爲_レ戮_ニ於_レ楚同伍子胥列傳……楚に戮せらる。
- 4 否必爲_レ二子_ニ所_レ禽同淮陰王傳……二子の禽にする所と爲らむ。
足異處卒爲_レ天下_ニ笑同……天下の笑と爲る。

此等の「爲」は皆形式動詞である。1 2 3 は下の動詞(禽、戮)を客語とするもので「らる」と訓む。
4 は下の名詞(所禽、笑)を客語とするもので「爲る」と訓む。何れも副詞ではない。之を無暗
に「ため」と訓んで「陛下の爲に」「越王の爲に」「二子の爲に禽にせらる」「天下の爲に笑はる」
などいふのはよくない。

1 2 の「爲」が「ため」でないことは3と比較して見れば直ぐ分る。又1の「禽」が名詞でないこと
は2 4と比較して見れば分る。既に「禽」が動詞である以上は1の「爲」は「なる」でなくて「らる」で
あることが明である。

4の「爲」を「ため」と讀んだり「らる」と訓んだりすることが誤であることは次の様な例に由つて

證明される。

三六

1 梁父即楚將項燕爲秦將王翦所戮者。史記項羽本紀

故爲天子之計莫若少寬其法使大臣得有所守而不爲法之所奪。韓非子

修其政刑十年不爲聲色敗遊之所敗雖微商鞅有不富彊乎。韓非子

(4) には下に「者」といふ字が有る。(5) には間に「之」が有る。これらの「爲」や「所」を「らる」と讀んだり

「ため」と讀んだりしたならば「者」や「之」は意義を成さなくなる。王翦の戮する所の者になつた意法の奪ふ所とならざらしむる意で被動と同効ではあるが被動ではない。

5 は天下に笑はると讀んで讀めないものではないが其れは曲解であらう。其の證として其窮涸不能自致乎水爲猿獼之笑者蓋十八九矣。韓非子

などの様な例が有る。「猿獼」の下に「之」がある。此の「之」が無いからとて「猿獼」に笑はる猿獼の爲に笑はるではない。1 の「爲陛下禽」や其の他「爲人殺爲人救爲敵國迫」などの様に「之」を入れて見ることの出来ないものとは區別されなければならぬ。

「爲」は前置詞であるが動詞的意義を帯びて「爲にす」と讀まれる場合がある。その場合は前置詞性動詞である。(第四頁)

「爲」は前置詞であつて歸著性が有るから客語を要する。例へば「爲病不能出仕」の「病」

は「爲」の客語である。意譯すれば「爲病は病の爲に」であるが直譯すれば「病に爲りて」である。「爲」は客語を要するが客語の意義が「爲」の中へ含まれてゐる場合には客語は要らない。例へば「我多病爲不能出仕」の「爲」は「爲之」の意であるが「之」は分つてゐるから要らないのである。

比「比も爲と同様ため」と讀んで目的を表はす。これは「比べて」であつて「對して」の意であらう。

晉國天下莫強焉叟之所知也及寡人之身東敗於齊長子死焉西喪地於秦七百
里南辱於楚寡人恥之願比死者壹洒之如之何則可。孟子梁惠王

「自由從道」の用法

「自由從道」は「より或はよりて」と讀む。出發點の形式的意義を表はすものであつて其の實質的意義は客語に由つて補はれる。

「自由從道」みな今日より此處よりの如く時間的或は空間的に動作の出發點を表はす。又「是」によつての如く因果的に出發點を表はすこともある。

自正。月不雨。至于秋。春秋文十

有朋自遠方來。不亦樂乎。論語學而

自是觀之。兩臂重於天下也。莊子讓王二

古人有言。請自隗始。韓愈與于襄陽書

今王誠欲致士。先從隗始。隗且見事。況賢於隗者乎。戰國策燕

昌言從。傍取棗栗啖我。蘇洵送石昌言序

施々從。外來驕其妻妾。孟子離婁下

禮義由賢者出。而孟子之後喪踰前喪。君無見焉。孟子梁惠王

諸將皆由壁上觀。史記項羽本紀

夫義路也。禮門也。惟君子能由是路。出入是門也。孟子萬章

公孫丑問曰。夫子加齊之卿相。得行道焉。雖由此。霸王不異矣。同公孫丑

由是觀之。無惻隱之心。非人也。同公孫丑上

師曠不得已。援琴而鼓。一奏之。有玄鶴二。八道南方。來集於郎門之垓。韓非子十過

「自從由道」は前置詞で下の。。を客語とし之を統率して下の——を修飾する。

「自古從道」は依據性が有る。「何々によりて」と読む場合は依據性が明である。意譯して「何々より」と読めば依據性は和譯に顯れない。

これらは動詞性を帯びて「自す」と訓ぜられる場合がある。(第八節)

「方比」の用法

方「あたつて」と訓ずる。

方事之般也。有韎韐之附注。君子也。左傳成十六

方羽殺。卿子冠軍。增與羽比。肩而事義帝。蘇東坡范增論

比「ころほひに」と訓ずる。其の歸著性のあることは「方つて」と同様だ。

亦請南宮萬于陳。以賂陳人。使婦人飲之酒。而以犀革裹之。比及宋。手足皆見。宋人皆醢之。左傳莊十二

子路莞爾而對曰。千乘之國。攝乎大國之間。加以師旅。因之以饑饉。由也爲之。比及三年。可使有勇。且知方也。論語先進

「比」は専ら動詞性名詞を客語とする。。は客語だ。

「與」及「暨」の用法

與 「與」はもと動詞で「與へる」の意味だ。與へる意味から授ける意となり仲間になる意となり相手にする意となる。そこで「與す」組みすの意と讀む。其れから前置詞となつたので意味は日本語の「與」に當るが、「與」は依據性がある。「と」も讀むが「と」は依據性がないから「與」の依據性を明かにする爲には「何々に與に」と讀んで見なければならぬ。

「與」の意味は對手を示すのであるが其れが三つに分れる。一は事件の共同者又は對手を表はし、二は關係者を表はし、三は比較の對手を表はす。

一、事件の共同者又は對手を表はす例。「と」或は「與に」と讀む。對手を表はす場合は「と」と讀む。

壬戌之秋七月既望蘇子與客泛舟遊於赤壁之下。蘇東坡赤壁賦

起之爲將與士卒最下者同衣食臥不設席行不騎乘親裹贏與士卒分勞苦。史記

孫子吳起列傳

儀之出也固與秦王約。同張儀列傳

二、事件の關係者を表はす例。「ために」或は「に」と讀む。

假令晏生在世已雖與之爲僕隸爲之執鞭亦所忻慕。史記管晏列傳

平公曰此道奚出師曠曰此師延之所作與紂爲靡々之樂也。韓非子十過

三、比較の對手を表はす例。「よりは」と讀む。

與其有聚斂之臣寧有盜臣。大學

罪疑惟輕功疑惟重與其殺不辜寧失不經。虞書大禹謨

王孫賈問曰與其媚於奧寧媚於窻何謂也。論語八佾

子曰奢則不遜儉則固與其不遜也寧固。同述而

子與其死於臣之手也無寧死於二三子之手乎。同子罕

禮與其奢也寧儉。同八佾

戰大勝簡子曰與吾得革車千乘不如聞行人燭過之一言也。韓非子難二

子路曰吾聞諸夫子喪禮與其哀不足而禮有餘也不若禮不足而哀有餘也。禮記

而與其從辟人之士也豈若從辟世之士哉。論語微子

與我處吠畝之中由是以樂堯舜之道吾豈若使是君爲堯舜之君哉吾豈若使是民爲堯舜之民哉吾豈若於吾身親見之哉。孟子萬章上

與其有譽於前孰若無毀於其後與其有樂於身孰若無憂於其心。韓愈送李愿序

與其傳不得聖人而爭且亂孰若傳之子雖不得賢猶可守法。尊愈對再問

「與」を「よりは」と讀むが「とは」と讀んで見るとよく分る。日本語でも「新高山は富士山とは高いなど」といふ風に「とはは「よりは」と通ずる。「與」が比較の對手を表はすのは其の修飾される動詞の——が其の方が優つてゐるといふ形式的意義を帯びるから「與」がその形式的意義に對して對手を成すのである。「與其有聚斂之臣寧有盜臣」は

與其有聚斂之臣相較寧可有盜臣

の意で「相較」の意味が「有盜臣」の中に含まれてゐるのである。

□右の例に於ける様な「孰若……」を從來……に孰若ぞと讀んで居るが「豈若……」の例と比較して考へるに此れは矢張字の通りに「孰れか……」に若かむやと讀むべきものであらうと思ふ。

「與」は「我與彼の」の様に形式名詞(第三頁)にもなり、公之視廉將軍孰與秦王の「與」の様に前置詞性形式動詞(第三頁)にもなる。

及暨「及」と「暨」も「與」と同様に使ふ。但し「暨」は極古くのみ用ゐられた。

夏王率遏衆力率割夏邑有衆率怠弗協曰時日曷喪予及汝皆亡夏德若茲今朕必往。尙書湯誓

夏四月辛巳晉人及姜戎敗秦師于殽。左傳僖三十三

惟暨乃僚罔不同心以匡乃辟俾率先王迪我高后以康兆民。商書說命

「および」と訓ずる場合は形式名詞(第三頁)である。

「每」の用法

毎 動作を配分する意を表はす。

入大廟每事問。論語鄉黨

宣言曰我見相如必辱之相如聞不肯與會相如每朝時常稱病不欲與頗爭列。史記廉頗列傳

日本語の「毎」は「ごと」とあつて名詞性副詞或は接尾辭であるが漢文の「毎」は歸著性が有つて客語〇〇を取る。「毎事」は直譯すれば「事に毎して」である「事毎」には意譯だ。

舉 事物を殘さない意であつて「あげて」と讀む。他動性だ。

イ 屈原曰「舉世混濁而我獨清衆人皆醉而我獨醒。」史記屈原列傳

ロ 其君得爲諸侯其臣得爲大夫者舉皆齊晉也不然則齊晉之與國也。蘇東坡王者不治

夷狄論

「世を舉げて」といふ様に客語を取る。「の」舉はその全體を舉げての意で客體の觀念が自己の内部に含まれてゐる。そういう場合には客語は要らない。

修飾形式副詞

修飾形式副詞は副詞として下の詞を修飾し下の詞の意義に由つて自己の意義の實質的缺陷を補充される形式副詞である。その重なるものは

- 1 不 弗 未
- 2 是 非 匪

相 晉

等である。

「不弗未」の用法

「不」は動詞の上に用ゐて否定を表はすものである。

凡そ人が或る問題に就いて判断を下すには二つの範疇が有る。それは「そうだ」とするか「そうでない」とするかで前者を肯定と云ひ後者を否定といふ。動詞と敘述的に用ゐられた即ち敘述態の名詞とは何れも判断を表はすものであるが否定副詞なしに用ゐれば皆肯定である。「無」の如きも有に對して否定と見えるが「無し」自身に對しては肯定である。否定的に考へた事柄を肯定するそれが否定であることを表はすには漢文では上へ副詞「不」「未」「弗」を附けて

清風徐來水波不興。蘇東坡前赤壁賦

蓋二客不能從焉。同後赤壁賦

僕弗敢願也。史記商君列傳

楚人有鬻楯與矛者。譽之曰：吾楯之堅莫能陷也。又譽其矛曰：吾矛之利於物無不陷也。或曰：以子之矛陷子之楯，何如？其人弗能應也。韓非子難一。

未_レ有_レ仁而遺_レ其親者也。未_レ有_レ義而後_レ其君者也。孟子梁惠王上。

小學而大遺。吾未_レ見_レ其明。韓愈師說。

の様にいふ。「興能從敢願能應有見等が上の「不弗未」に由つて否定態になる。

日本語では否定を示すには「興らず見ず」などいふ様に下に「ず」といふ助辭を附ける。「興らず」に就いて云へば「興ら」は實質的意義で「ず」は否定といふ形式的意義を表はすのであるが「ず」は「興らず」全體の代表部である。日本人はそういふ云ひ方をするから漢文の「不那未」が副詞であるといふことが能く呑込めない。英語でも *not* が副詞であるといふので「不那未」も副詞かなあとは思つても、その副詞たる所以が呑込めない。それを呑込むには日本語に其れに類した現象のあることを考へるが善い。

大伴の三津の濱なる忘草家なる妹を忘れて思へや。萬葉集

「忘れて思ふ」とは「思はない」といふことだ。この「思ふ」は心が活いてゐることだけをいふので君のことは忘れて居りつゝ心が活いてゐる意味だ。即ち君のことを思はないのである。

但し歌の意は反語であるから豈忘れて思はむや豈忘れむやの意だ。

又醜婦を批評してあの女は「不」の字に美人だなどいふ場合がある。これは單に否定の意が強く反對の意ではあるが否定の語が上へ附いてゐる。

漢文で「不」が副詞として下の動詞を否定にするのは右の例の様な云ひ方である。「不興」は「不的に興るといふ云ひ方」未見」は「未的に見る」といふいひ方と思へば善い。

漢文の「不遠」と日本語の「遠くなく」とは意義は等しくても文法上の構造が違ふ。日本語の「遠くなく」は「遠く」の方が從屬部で「なく」の方が統率部代表部だ。「遠くなく」は「なく」の一種であつて「遠く」の一種ではなから。「遠く」を實質とする所の「なく」である。「遠くなく」と「近くなく」と「早くなく」とも皆「なく」の一種である。色々の「なく」の中に「遠くなく」「近くなく」「早くなく」があるのである。漢文のはそうではない。「不遠」は「不」の方が從屬部で「遠」の方が統率部代表部だ。「不遠」は「遠」の一種ではない。「不」を形式とする所の「遠」だ。否定的の「遠」だ。「不遠」と「未遠」と「已遠」とも皆「遠」の一種だ。「遠」の中に「不遠」「未遠」「已遠」等の別があるのである。日本語と漢文との否定の表はし方の相違から日本では「ず」「ない」を下へ附け漢文では「不」「未」を上へ附けるのである。

日本語の「ず」が助動詞と稱せられるために漢文の「不」まで助動詞だと思つてはいけ

ない。日本語の「ず」は助辭であつて單獨性がない。動詞へ附いて動詞と共に一單詞としての動詞になる。「興らず」は一詞である。「興ら」と「ず」との二詞ではない。所が漢文の「不」は副詞であつて單獨性がある。

句讀之不知惑之不解或師焉或不焉韓愈師說

の「或不焉」の様にも使へる。「或不師焉」の意だ。日本語で「或は焉を師とし或は焉をず」と云ふ譯にはいかない。「不」は單獨性があるから

有朋自遠方來不亦樂乎論語學而

不以物喜不以己悲范文正公岳陽樓記

などの様に單詞なる動詞に直附せず副詞などを隔てる場合がある。若し助辭であるならば單詞なる動詞に直附する筈である。これ「不」が助辭でない證據である。

□「不」と「弗」は類音同義だが「未」は違ふ。「不」は單に否定を表はすだけで別の意味はない。即ち「ず」の意味である。「未」の方は「未だ……ず」と讀む位であつて不十分な否定である。否定の力が決定的でない。まだそうでない意と解すると時間的に過

去と現在を否定して未來を云はない様に聞えるが、そう客觀的に解してはいけな
い。これは自己の認識に於ける否定であつて自分の知識で云つてまだそうでな
いのである。既にそうであるものであつても自分がまだ其れを知らない場合に
は未然である。それだから單に時間的に「まだそうでない」といふ意の場合と、大體
そうではない」と控目にいふ場合と兩方ある。

1 増大怒曰天下事大定矣君王自爲之願賜骸骨歸卒伍歸未至彭城疽發背而死

蘇東坡范增論

□ 義帝之存亡豈獨爲楚之盛衰亦增之所與同禍福也未有義帝亡而增獨能久存者也同

④の「未」は實際の未然と一致するが③の「未」は實際の未然ではなくて自分の知識に於ける未然である。即ち判然しないので想像ではない。されば

1 不知先生果能枉駕於敝處否

2 未知先生果能枉駕於敝處否

の[1]は「如何です来て下さいませるか」の意であるが[2]は「如何でせう来て下さいませ

うかであつて控目にいふから鄭重である。〔1〕の「不知」は「分らない」の意だから、如何ですといふことになる。2の「未知」は「分りかねます」よく分りません」の意だから、如何でせう」といふ意になる。

「不孝不善などは名詞であるが最初「不」が副詞で「孝」が形容動詞であつた、孝ならずの意の動詞が後から名詞になつて、孝ならざること」といふ意を表はすのである。「不」は名詞の上へ用ゐられることがあるが其れは敘述的に用ゐた名詞であつて單純な名詞ではなう。

人不知而不愠。不亦君子乎。論語學而

質仁秉義行道施德得志於天下天下懷樂敬愛而尊慕之皆願以爲君王豈不辯智之期與。史記范雎列傳

の「君子辨智之期」は「君子なり辨智之期なり」の意である。これを名詞の敘述態といふ。名詞の敘述態は動詞と同じ効果のあるものである。

「未」は「あらず」と讀む場合もあるがそれは意譯である。

不敢不言

未必無其效

などを「敢て言はずんばあらず」「未だ必ずしも其の效なくんばあらず」と讀むが、それは直譯して「敢て言はざらず」「未だ必ずしも其の效無からず」と云ふのが語調が悪いから「あらず」といふので「非」とは違ふ。

否定の形式副詞は「不」「弗」「未」の三つであるが、複性詞の「盍」にも否定形式副詞部がある。「盍」は「何不」の約言で「何ぞ……ざると讀む。一詞でありながら上部に「何ぞ」といふ意義が有り、下部に否定副詞的意義が有る。この兩義は下に用ゐる動詞の媒介によつて間接の關係を生ずるだけで直接の關係はない。(第七節參考)

否定の範圍 「不」は動詞或は敘述態名詞の上に用ゐて其れの否定態に在ることを示す副詞である。然るに其の動詞の上に形式動詞又は他の副詞が有る場合には其れを「不」より上に置くと下に置くとでは意味が非常に違ふ。何となれば「不」より下に在れば動詞と共に否定され、上に在れば否定されないからである。今その最も著しい例を次へ舉げる。

「不敢」と「敢不」「敢」は副詞であつて「無遠慮に厚かましくづらづらしく我儘を通し」といふ様な意である。凡そ動作には我儘を通す勝手な動作と柔順と云ふ程で

なくとも我儘を通すのではない動作と二種ある。勿論實際の我儘ばかりを云ふのではない。我儘と見なして云ふ場合が澤山ある。何れにもせよ「敢」といふ副詞は我儘を通す意に用ゐた動詞の上へ附けるのである。例へば人を諫めるといふことは出過ぎた失禮な我儘な動作であるから「敢呈一言」といふ。又さういふ失禮な出過ぎたことが出来ないといふ所には「不敢出一言」といふ風になる。この場合の「敢」或は「不敢」をまだ附けない最初の動作「呈一言」を原動と名づけるとすると「敢呈一言」も「不敢出一言」も何れも原動は肯定である。然るに原動が否定な場合がある。「不服従」「不奉命」「不盡力」などの様な動作は肯定では柔順な動作であつて否定に於て始めて我儘な動作になる。さういふ動作へも「敢」が附くから「敢不服従」「敢不奉命」といふ様なことが言へる。これもさういふ勝手なことは致しませんといふ時には「敢の上へ」「不」が附いて「不敢不服従」「不敢不奉命」と云ふことになる。そうでなければ「敢不服従」が反轉態になつて「敢不服従」となる。

一言以て之を言へば「敢」又は「不敢」は我儘な勝手な動作を表はす動詞の上へ附くのである。その原動の動詞は肯定呈一言の類の場合も否定不服従の類の場合もある。

る。その結果は

敢「——」 不敢「——」 敢「不——」 不敢「不——」

の四種を生ずる。「——」内の詞は原動だ。

- 1 臣故敢進其愚慮。竊爲君計者莫若安民無事。 史記蘇秦列傳
- 2 趙王送璧時齋戒五日。今大王亦宜齋戒五日。設九賓於廷。臣乃敢上璧。 同廉頗藺相如列傳

- 3 今以秦之彊而先割十五都予趙。趙豈敢留璧而得罪於大王乎。 同
- 4 是以賓客游士莫敢自盡於前者。 同蘇秦列傳
- 5 秦王跽曰。先生卒不幸教寡人邪。范雎曰。非敢然也。 同范雎列傳
- 6 趙亦盛設兵以待秦。秦不敢動。既罷歸國。 同廉頗藺相如列傳
- 7 語之至者。臣不敢載之於書。 同范雎列傳
- 8 今太子聞光盛壯之時。不知臣精已消亡矣。雖然。光不敢以圖國事。所善荆鄉可使也。 同刺客列傳
- 9 公請於華費遂將攻華氏。對曰。臣不敢愛死。無乃求去憂而滋長乎。臣是以懼。敢不

「聽命」左傳昭二十

10 寡君將君是望^レ敢^レ不^レ稽首^一 左傳襄三

11 君不^レ討^レ敢^レ不自^レ討^レ乎^一遂自刎^一 同莊十九

12 維女荆楚居國南鄉昔有成湯自彼^レ羌莫敢^レ不^レ來^レ享^一莫敢^レ不^レ來^レ王^一曰商是常。毛詩
商頌殷武

13 而後遣辯士奉咫尺之書暴其所長於燕燕必不^レ敢^レ不^レ聽從^一。史記淮陰侯列傳

14 乃謂秦王曰和氏璧天下所共傳寶也趙王恐不^レ敢^レ不^レ獻^一。同廉頗蔣相如列傳

從來「敢不」は必ず反轉語になるから「不敢」と違ふなど云つてゐるがそれは半面のみを觀たものである。「敢不奉命」などはその原動「不奉命」が如何にも不都合な行爲であるから自然反轉語になる場合が多いのであつて「敢不——」が必ず反轉語にのみ使はれる道理は無い。反轉語に用ゐられた古例は甚だ多いがそうでない例もある。例へば右の例の9の「敢不聽命」などは反轉語ではない。無禮ながら命を聞きませぬの意だ。又「敢不」を反轉語だから「不敢」と違ふなどと云へないまう一つの理由が有る。其れは「不敢」も反轉語になることである。右の例の8の「不敢」は反轉語

である。「敢て以て國事を圖らざらむや」である。

右の例は1 2 3 4 5 は「敢」の例 6 7 8 は「不敢」 9 10 11 12 は「敢不」 13 14 は「不敢不」の例である。そうしてその——を附けたものは何れも無遠慮な厚かましい動作として取扱はれた動作である。

9の「不敢以圖國事」の「以圖國事」は賤人にして國事を圖るなどは無遠慮な僭越であると謙遜し併し御命令であるから遣りませう、何で御断りませうぞと云ふのである。尤も「不圖國事」を燕の太子の命令を聽かない無遠慮な動作だとして言ふことも出来る。その場合には「雖然臣敢不圖國事」となる。こういうのは「敢不」でも「不敢」でも通るのである。但し意味の工合は違ふ。

二「不必」と「必不」 「不必——」は「必」が下の動詞と共に否定され「必不——」は「必」が否定されない。「不必來」は「必來」と云ふことはないの意、「必不來」は決して來ないの意だ。和訓は「必不來」は「必來らず」と讀み「不必來」は「必ずしも來らず」と讀む。但し「不必來」は「必ず來るとは言へない」の意の場合も有るが多くは「必ずしも來らざれ」と讀んで「何も屹度來るには及ばない」の意になる。

此の外「不」の勢力の範圍を考へれば皆分る筈である。

三

「是非匪」の用法

動詞の敘述性は明確である。名詞の敘述態も敘述性が有るが其の敘述態であることを示す記號がないから、其の敘述性は動詞に比すれば不明確である。そこで名詞が敘述態に在る場合に其の敘述態であることを示す何等かの方法が必要である。「是非匪」の三副詞はその必要から生じたものである。即ち名詞の前に「是」が有ればその名詞は敘述態であつて、否として肯定であることが判り、「非」が有ればその名詞は敘述態であつて而も否定態であることが分る。

「是」の例

李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠。天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙。・杜甫飲中八仙歌

憂來藉艸坐、浩歌淚盈把。冉冉長途間、誰是長年者。同玉華宮
悲笳數聲動、壯士慘不驕。借問大將誰、恐是霍嫫媧。同後出塞

商君亡至關下、欲舍客舍。客人不知其是商君也。曰：商君之法、舍人無驗者坐之。

史記商君列傳

牀前看月光、疑是地上霜。舉頭望山月、低頭思故鄉。李白靜夜思

この「是」は副詞であつて下の名詞の敘述性を確めるのである。下の名詞は敘述態であるから「是」を除去しても意味が通じないことはない。「臣是酒中仙」は「臣は是れ酒中の仙」と讀むのであるが「是」を抜けば「臣は酒中の仙なり」であつて意義は通ずる。「是」を肯定副詞として用ゐることは極古くは殆どなかつた様であるが史記あたりからそろそろ見え始め唐宋頃の時代文には盛に用ゐる様になり、以て今日の俗文や口語に及んだものであらう。彼の

子曰富與貴、是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。論語里仁

の「是」などは代名詞であつて「此」と通ずるものである。併しこれが一寸轉じてその外延性を失へば直ぐに副詞になり、すなはち「と云ふ様な心持の語となる。そうならばそれが肯定副詞である。

西洋人の書いた支那文典には揃ひも揃つて「臣是酒中仙」などの「是」を動詞だとしてゐる。即ち「是」は「ありて」「非」は「あらずだ」といふ。「臣是酒中仙」は「臣は酒中の仙に是り」といふことになる。私たちも一時そう思つた。併しこれは日本人が「これ」と讀んだのが正常な見解であらうと思ふ。

「非」の例

今、人乍見孺子將入於井皆有怵惕惻隱之心。非所以內交於孺子之父母也。非所以

以要譽於鄉黨朋友也。非惡其聲而然也。由是觀之無惻隱之心非人也。孟子公孫丑

非其位而居之曰貪位。非其名而有之曰貪名。史記商君列傳

四月維夏六月徂暑先祖匪人胡寧忍予。毛詩小雅谷風四月

何艸不玄何人不矜哀我征夫獨爲匪民匪兕匪虎率彼曠野哀我征夫朝夕不暇

毛詩小雅魚藻

「非」は副詞で下の「は」に修飾される敘述態名詞である。「非」匪みな「あらず」と讀む。「匪」は極古く用ゐられた詞で「非」と同じだ。「非」は「あらず」と訓ずるから動詞の様に見えるが、動詞ではなくて副詞である。動詞を否定にする時には「不」を用ゐる名

詞の敘述態を否定にする時には「非」を用ゐる。そうして名詞の敘述態に在つては肯定には「是」を用ゐる否定には「非」を用ゐるのである。「是」と「非」は唯肯定否定の別があるだけで其の品詞別は同じである。「是」が副詞であるならば「非」も副詞である。日本人は「是」は「これ」と讀み「非」は「あらず」と讀むために「是」を副詞といふことには眞ぐ賛成が出来ても「非」を副詞といふことには一寸賛成を躊躇するであらう。併し「非」は「是」の否定なる「不是」と同じである。後世の文では「非」の意味は大抵「不是」で表はしてゐる。「彼是小人非君子」を「彼是小人不是君子」といふのである。「是」や「不」や「不是」が副詞であることが分れば「非」の副詞であることも分るであらう。

此花不美

此の花は不の字に綺麗だ

彼是小人

彼は肯定的に小人だ

彼非君子

彼は否定的に君子だ

こんな風に直譯を付けて見ればその性質が分る。

「相齊」の用法

「相胥」は動詞の上に用ゐられて、その動作が一人の動作でなく甲乙二者の動作であつて甲は乙を客體とし乙は甲を客體として行はれる所の動作であることを示すものである。例へば

1 龍與虎鬪而虎與龍鬪

2 龍虎相鬪

3 龍虎相與鬪

の23は1と同義である。23の「鬪」は龍が虎を客體とする動作と虎が龍を客體とする動作とを兼ね表はすので、之を動詞の相の上から相互態といふ。

苴、蜀、相攻撃、各來告急於秦。史記張儀列傳

士大夫之族曰師曰弟子云者則群聚而笑之。問之則曰彼與彼年相若也。道相似也。韓愈師說

節物風光不相待。桑田碧海須臾改。唐詩選七言古長安古意

振々鶯鶯于下。鼓咽咽。醉言舞。于胥樂兮。毛詩魯頌廟

「胥」は極古く用ゐられた詞である。

第六節 感動詞の小分

感動詞は説話者が自己の思念の状態を主觀的に表示する詞である。分つて實質感動詞、形式感動詞の二種とする。

實質感動詞

實質感動詞は實質的意義を有する感動詞であつて、其の詞だけで一つの斷句を成し得べきものである。

嗚呼	於	於戲	於乎	惡	嗚	吁
于嗟	于嗟乎	于摧	烏乎	已	烏乎	呼
意	噫	噫嘻	猗嗟	猗與	唉	懿
嘻	諱	緊	嗟	嗟々	嗟呼	嗟苦
嗟夫	咨	都	咄	叱	唯々	

など種々ある。

嗚呼 あゝ

嗚呼慎厥終惟其始殖有禮覆昏暴欽崇天道永保天命。商書仲虺

嗚呼弗慮胡獲弗爲胡成一人元良萬邦以貞。同太甲

嗚呼先王肇修人紀從諫弗拂先民時若。同伊訓

嗚呼嗣王祗厥身念哉聖謨洋洋嘉言孔彰。同

於

穆々文王於緝熙敬止假哉天命有商孫子。毛詩大雅文王

王在靈沼於物魚躍。同

於戲 あゝ

詩云於戲前王不忘君子賢其賢而親其親小人樂其樂而利其利此以沒世不忘也。大學

於乎 あゝ

王曰於乎何辜今之人天降喪亂饑饉薦臻。毛詩大雅蕩雲漢

亂生不夷靡國不泯民靡有黎具禍以燼於乎有哀國步斯頻。同桑柔

惡 あゝ

然則夫子既聖乎曰惡是何言也。孟子公孫丑上

啞 あゝ

師曠曰今者有小人言於側者故撞之公曰寡人也師曠曰啞是非君人者之言也。

韓非子難一

吁 あゝ

客又復至廉頗曰客退矣客曰吁君何見之晚也。史記廉頗趙奢列傳

于嗟 あゝ

麟之趾振々公子于嗟麟兮麟之定振々公姓于嗟麟兮。毛詩周南麟之趾

于嗟乎 あゝや

彼茁者葭壹發五豝于嗟乎騶虞彼茁者蓬壹發五豝于嗟乎騶虞。同召南騶虞

于摧 あゝ

昊天上帝則不我遺胡不相畏先祖于摧。同大雅蕩雲漢

烏乎 あゝ

趙簡子圍衛之郭。郭。犀楯。犀櫓。立於矢石之所及。鼓之。而士不起。簡子投枹曰。烏乎。吾之士數弊也。韓非子難二

烏擊 あゝ

遭世罔極。今廼隕厥身。烏擊。哀哉。今逢時不祥。賈誼弔屈原賦

已 あゝ

已予惟小子。若涉淵水。予惟往求。朕攸濟。周書大誥

呼 あゝ

既又欲立王子職。而黜太子商臣。商臣聞之而未察。ウツヒカニキ告其師潘崇曰。若之何。而察之。潘崇曰。享江革而勿敬也。從之。江革怒曰。呼。役夫。宜君王之欲殺女而立職也。告潘崇曰。信矣。左傳文元

意 あゝ

意甚矣哉。其無愧而不知恥也甚矣。莊子在宥

噫 あゝ

噫。斗筭之人。何足算也。論語子路

噫嗟 あゝ

問其姓名。俛而不答。嗚呼。噫嗟。我知之矣。噤昔之夜。飛鳴而過我者。非子也邪。蘇東坡後赤壁賦

猗嗟 あゝ

猗嗟。昌兮。順而長兮。抑若揚兮。美目揚兮。毛詩齊風猗嗟

猗與 あゝ

猗與。那與。置我鞀鼓。奏鼓簡簡。衛我烈祖。毛詩商頌那

唉 あゝ

知以之言也。問乎狂屈。狂屈曰。唉。予知之。將語若。莊子知北遊

謔 あゝ

哲夫成城。哲婦傾城。懿厥哲婦。爲臬爲鳴。婦之有長舌。維厲之階。亂匪降自天。生自婦人。毛詩大雅蕩

噓 あゝ

堯觀乎華。華封人曰。嘻。聖人。請祝聖人。使聖人壽。莊子天地

噫 あゝ

庖丁爲文惠君解牛。……文惠君曰。善哉。技蓋至此乎。庖丁釋刀對曰。臣之所好者道也。進乎技矣。 莊子養生主

繫 あゝ

公問之。對曰。小人有母。皆嘗小人之食矣。未嘗君之羹。請以遺之。公曰。爾有母遺。繫我獨無。 左傳隱元

嗟 あゝ

嗟爾朋友。予豈不知而作。如彼飛蟲。時亦弋獲。 毛詩大雅蕩

嗟々 あゝ

嗟々。臣工敬爾在公。王釐爾成。來咨來茹。 毛詩周頌

嗟乎 あゝ

嗟乎師道之不傳也久矣。欲人之無惑也難矣。 韓愈師說

嗟苦 あゝ

嗟苦先生獨離此谷兮。 賈誼弔屈原賦

嗟夫 あゝ

嗟夫六國各愛其人。則足以拒秦。 杜牧阿房宮賦

咨 あゝ

文王曰咨。咨女殷商。曾是彊禦。曾是掎克。曾是在位。曾是有服。 毛詩大雅蕩
帝曰咨。四岳湯々洪水方割。蕩々懷山襄陵。浩々滔天下民。其咨有能俾乂。 虞書堯典

都 あゝ

禹曰都。帝慎乃在位。帝曰兪。禹曰安汝止。 虞書益稷

咄 「とつ」と音で讀む。馬鹿々々しいといふ感じを表はす。

私自尤曰咄。市有虎。而曾參殺人。讒者之效也。 韓愈釋言

叱 「しつ」と音で讀む。聲を強くして制止する語である。

俄而子來有病。喘々然將死。其妻子環而泣之。子犁往問之。曰。叱避無怛。 化。 莊子

唯々

唯々 「しし」と音で讀む。謹んで命を奉ずる意。

秦王跪而請曰。先生何以幸教寡人。范雎曰。唯々。有問秦王復跪而請曰。先生何以

「唯」は論語陽貨に「公西華曰正唯」とあり「諾」は史記刺客荆軻傳に「鞠武曰敬諾」とある例などに由つて動詞であることが分る。感動詞ではない。たゞ「唯々」といふ時は感動詞になる。「然否」が動詞であることは勿論である。

右に挙げたる諸例は皆多くは下の語に従屬してゐる。感動詞それ自身は説話者の思念の状態を主觀的に表はし、下の語は概念を材料とする思念を客觀的に表はす。此等の感動詞とその下の語とは同じものを表はすのであるが、感動詞の方は其れを主觀的に表はし、下の語は客觀的に表はす。例へば右の例の最初の「嗚呼」と其の下の「愼厥終惟其始」とは本來同じ思念であるが、「嗚呼」の方は其れを概念とせず、單に概念として主觀的に表はし、下の語は概念化してこれを客觀的に表はしてゐる。

右の例では感動詞が皆大抵下へつゞいてゐるが、實質感動詞は本來一つの斷句を成し得べきものである。それ故右の例の「于摧」や「唯々」の様に獨立することも有る。

これらの感動詞に實質的意義があると云ふのは、例へば花の美しいのを見て「嗚呼」と嘆息したとすると、この「嗚呼」はその思念に於ける感嘆的狀態を表はすのであるが、其れは勿論その感嘆の中に花の美しいことの概念が含まれてゐるからである。即ちその場合の「嗚呼」は「美哉花」と云つたのと似てゐる。「美哉花」は花の美しいことに對する概念が概念化されてゐるが「唯嗚呼」と云つた場合にはその概念が概念化されてゐないといふ區別があるだけだ。

漢文の實質感動詞は多くは「あゝ」と訓ずる。「あゝ」と一様に訓じてても文字は色々である。文字が色々だから其れ々々非常に違ふ意義が有る様に見えるが、皆大同小異である。漢字の音を字義に拘らずに假名の様に使つて感動の音を寫したのであるから、文字は色々になつて居つても實際は同音或は類似の音のものが多し。例へば「嗚呼」は「をこて」於戲は「あき」であつて音は近い。されば「あゝ」と訓ぜられるものは略同義だと思つて差支はない。

形式感動詞